



## 第1章 運命(さだめ)

---

1.

西武池袋線練馬駅の改札を出た桜川(さくらがわ)善正(よしまさ)がバスターミナルへと向かう通路に出たとき、外は小雪が舞い落ちていた。時折吹く風に雪が巻き上げられ、塵のように舞っている。通勤帰りのサラリーマンやOL、学生と思しき若者たちが、家路へと急ぐ。

ふと、桜川は通路の入り口で立ち止った。右手に下げた紙袋に視線を落とす。袋の中には、デパートで買った行列ができる有名店のシュークリームの箱が入っていた。桜川の血を分けた一人息子の大好物なシュークリームだった。

そっと微笑んだ桜川は、彼のことを待つ母子の顔を思い浮かべた。そんな二人の背後に、別のシルエットが浮かんでくる。シルエットが、ある顔を映し出す。もっとも彼の近くにいる女性の顔だった。

桜川の顔から笑顔が消えた。切なそうな表情に変わる。心の中の声がささやく。「あいつには、オレが必要なんだ。オレも、最後まで責任を取らなければならない。これは、男としての義務なんだ……」何度も何度も発した言葉だった。

小さく息をついた桜川は、再び歩き始めた。

桜川の目的地は、駅から歩いて五分ほどのところに建つマンションだった。

風が強くなった。吹きつける小雪が、桜川の鼻や唇にへばりつく。道行く人たちが速足になる。桜川も、大股で歩みを進めた。

やがて、桜川の視界の中に、とあるマンションの全景が広がった。壁面が赤茶色で統一された、西洋の古い町並みの中でひっそりと佇むアパートメントハウスを思わせるような重厚な造りが趣を感じさせる。築二年の新築物件だった。

ルーズシャドウという建物の名前が彫り込まれたマンションの入り口に立った桜川は、上を見上げた。このマンションの五階に、彼の目指す部屋がある。

花木の植えられた前庭を突き抜け、正面玄関に入り、オートロックボタンの前に立つ。桜川は、五、〇、五のボタンを押した。

「いらっしゃい」インターホンから女の声が聞こえた。ゴーツという乾いた音を立てながら正面玄関の内扉が静かに開く。内扉を越えた桜川は、エレベーターに乗り、五〇五号室のドアの前に立ち、ドアホンのチャイムを押した。

間髪入れずドアが開けられた。ドアの向こうから、ほのかに甘い煮炊き物の匂いが漂ってきた。桜川の好物のすき焼きの匂いだった。

「寒かったでしょ」出迎えた女が、桜川のコートにへばりついていた雪を手で叩いた。

「ああ」桜川が頷く。

「善之(よしゆき)は帰っているのか？」桜川は、玄関のドアを閉めながら女に問うた。

「ええ」女が答える。

「そうか……」桜川の胸の中に、柔らかな風が吹き抜けた。

桜川には、妻の敏江(としえ)との間に生まれた一人娘の麻子(まこ)以外に善之という息子がいた。彼が結婚前に交際していた千倉(ちくら)紀子(のりこ)が宿した子どもだった。

桜川と紀子は五年越しの恋を繰り広げたが、実ることはなかった。紀子の父親が、桜川との結婚を許さなかったからだ。

年商一千億円規模の玩具メーカーの創業者でもあった父親は、一人娘の紀子に婿を取らせ事業を継がせたいと考えていた。経済界の有力者の子息など毛並みの好い男子を婿に迎え入れ会社の地盤を強化する、いわゆる政略結婚を望んでいた。

そんな紀子の父親は、娘がしががないサラリーマンの桜川と付き合い始めたことを知ったとき、驚愕し、そして激怒した。桜川が家に挨拶に来たときも、「どこの馬の骨だかわからない奴に、大事な一人娘はやれない！」と、けんもほろろな態度で追い返した。

その後も父親の目を盗むように二人は交際を続けていたが、あるとき、桜川に敏江との縁談話が持ち上がった。会社の上層部の人間が勧めてきた縁談話だった。

桜川は、縁談話が持ち上がったことを紀子に告げた。桜川としては、紀子に「縁談を断って欲しい」と言ってほしかった。

今回の話をむげに断れば、会社に居づらくなるのは間違いない。しかし、自分は紀子と一緒にになりたい。紀子が望むのであれば、縁談を断り、半ば駆け落ち的に彼女をさらっていてもよい。たとえ知らない土地に二人で暮らすことになったとしても、自分はどんなことをしてでも紀子のことを守っていく。桜川は、そこまでの覚悟を決めていた。

しかし、紀子は自分が身を引くことを口にした。

今回の縁談話は、桜川にとってまたとないチャンスだった。縁談話を勧めてきた上層部の人間は次期社長候補とも目される社内の有力者であり、そのような人間に目をかけられた桜川の将来も保証される。一方、父親から反対されている自分たちは、決して結ばれない運命にある。

「善正さんには幸せになってもらいたいの」寂しそうな笑顔を浮かべながらも、紀子は、はっきりと口にした。

紀子に対する想いを包み隠さずさらけ出した桜川だったが、紀子の気持ちが変わることはなかった。

桜川は、未練を断ち切れぬまま、敏江との交際をスタートさせた。

敏江には、紀子にはない魅力があった。敏江も桜川のことを大変気に入ったようであり、桜川も、敏江との結婚を意識し始めた。

ところが、あるとき紀子が、思ってもみなかったような事実を桜川に告げた。紀子のお腹の中に二人の間の子が宿っていた。

驚愕した桜川は、敏江とは別れ、紀子と一緒になるという言葉で口にした。紀子の父親があくまでも反対するのであれば、知らない地に二人で移り住み、親子三人でひっそりと暮らしていきたいという言葉も口にした。

しかし、紀子の考えは決まっていた。お腹の中の子を産み、シングルマザーとして育てていくという考えだった。

このまま強引に二人が一緒になったとしても決して幸せにはなれないことを紀子は悟っていた。自分と一緒になれば、桜川も会社を辞めざるを得なくなる。父親も、生まれてくる子を決して認めようとはしないだろう。しかし桜川と別れた上でのことであれば、自分と父親との関係は時間が解決してくれる。そうなれば、生まれてくる子のごとも認めてくれるようになるはずだ。

紀子の固い決意を知った桜川は、せめて生まれてきた子の顔を見るために、定期的に紀子と子のもとを訪ねることを許してほしいというお願いをした。桜川は、自分ができる精一杯の範囲で二人のことを援助するつもりでいた。

紀子は、その願いを受け入れた。「そのほうが、きっと生まれてくる子にとっても幸せよ」紀子は、桜川に向かって優しく微笑んだ。

半年後、紀子は男の子を生んだ。男の子は、桜川の名前の一文字を取って善之と名付けられた。

善之の誕生に戸惑いの色を隠せなかった父親も、次第に善之の存在を認めるようになった。娘がシングルマザーの道を選んだことに対して責任を感じていたようだった。

時を同じくして、桜川は敏江と結婚した。

一年後、二人の間に子が生まれた。女の子であり、麻子と名付けられた。

桜川は、妻や娘に対して夫や父親としての愛情を注ぎながら、紀子と善之のもとにも足を運んだ。自ら選んだ道とはいえ、紀子は寂しい思いをしているはずだ。紀子の表情からも、桜川が訪ねてくるのを心待ちにしている様子が窺えた。

桜川は、妻に善之の存在を告げなかった。告げるべきなのかどうか大いに悩んだが、告げないことに決めた。世の中には、知らないほうが幸せなこともある。自分には、妻や娘のことを愛し続ける自信がある。「あえて幸せな関係に波風を立てることもない」桜川は、迷う心を封印した。

## 2.

それから三年後、紀子の両親が急逝した。友人夫婦を乗せて車で伊豆のゴルフ場へ出かけた帰り道、ハンドル操作を誤り、四人が乗った車が崖下に転落した。四人とも、搬送先の病院で息を引き取った。

祖父母も全員他界しており、兄弟姉妹もいなかった紀子は、一人残された。

父親の手助けをしながら会社の経営にも携わっていた叔父と相談した紀子は、会社の経営は叔父に任せて自分は経営には係らないことを決めた。父親から相続した株式をすべて会社に売却した紀子のもとに、莫大な財産が転がり込んできた。

紀子は、経済的に困ることはなくなった。しかし、心の隙間は、善之の存在とたまに訪ねてくる桜川に頼るほかはなかった。

その気持ちを察した桜川は、ことあるごとに紀子のもとを訪ね、心の支えになった。家庭を優先する中での訪問だったが、訪ねたときは、紀子と善之に対して精一杯の愛情を注いだ。

善之も、桜川になつた。たまに彼が顔を見せると、善之は嬉しそうな表情を浮かべながら懐に飛び込んできた。その様子を目にした紀子も心を安らげた。ひと時の時間ではあったが、家族としての幸せを感じ取っていた。

桜川も、つかの間の団らんに幸せを感じていた。

そんな善之も、成長するにつれて、自分と桜川との関係を察するようになっていた。

紀子は、善之に対して、父親は彼が小さいときに事故で亡くなり、それ以来紀子の幼馴染である桜川が自分たちのことを元気づけるために訪ねてきてくれているのだという説明をしていたが、善之は、桜川の中に父親の匂いを感じ取っていた。

あるとき、善之が紀子に向かって、「ねえ、お母さん。もしかして、桜川さんって、ボクの本当のお父さん？」という言葉を目にした。

返す言葉に詰まった紀子が、「馬鹿ねえ、突然なにを言い出すの。桜川さんは、お母さんの幼馴染だって話したでしょ」と言葉を返す。

「そうだったよね……」納得のいかない表情を浮かべながらも、善之は、それ以上追及してこなかった。

その後も、桜川と紀子、善之との今まで通りの関係が続いていた。

二人の関係に気が付いたのは善之だけではなかった。一人娘の麻子も、あるとき自分に兄弟がいるのではないかということを知り、桜川に問うてきた。

親想いで心優しい性格の麻子は、進んで家事を手伝うようになっていた。学校の勉強やクラブ活動に勤しみながら、空いた時間に掃除や洗濯などの家事を買って出て母親を助ける。そんな麻子が桜川の書斎の掃除をしていたときに、偶然桜川と善之が二人で写っている写真を見つけてしまったのだ。

前の日、桜川は、机の中にしまってあった二人が写った写真を引っ張り出し眺めた。いつもであれば写真を眺めた後は元通りの場所にしまっていたのだが、そのときは急用を思い出し、うっかり机の上に出しっぱなしにしてしまっていた。掃除のときはさりげなく写真を元の位置に戻した麻子であったが、翌日母親が外出し家の中に桜川と二人きりになったときを見計らって口にした。

「ねえ、お父さん。ちょっといい？」

「なんだ？」書斎の机で作業をしていた桜川は、入り口に立つ娘のもとを振り返り、空いている椅子に座るよう手で促した。

書斎に足を踏み入れた麻子が、椅子に座り、桜川に視線を向ける。桜川も、娘に視線を向けた。

「ねえ、お父さん、変なことを聞いてもいい？」

「なんだい、変なことって？」

「うん……。あのね、ひょっとして、私に兄弟っている？」

「なっ、なにを言うんだ、いきなり……」想像もしていなかった言葉に、桜川は絶句した。

そんな彼の表情を見やりながら、麻子が言葉を続ける。

「実はね、昨日書斎を掃除していたときに偶然見ちゃったんだ。お父さんと男の子が写っている写真。私と同じくらいの歳頃の男の子と一緒に映っていた」

「……」

「お母さんには言っていないけど、たまに男の子が喜ぶようなおもちゃとか漫画を買って帰ってきたこともあったでしょ？」

「麻子……」

「絶対お母さんには言わないし、なにを言われても驚かないから教えて！一緒に映っていた写真の男の子、もしかしたら私の兄弟？」麻子が、真剣なまなざしを向けてきた。桜川が視線をそらす。

麻子は中学二年になった。多感な年ごろである。真実を打ち明けることで、自分のことを軽蔑するようになるかもしれない。桜川は、娘の心が自分から離れていくことが怖かった。

桜川は葛藤した。真実を打ち明けるのは怖い。しかし、娘がここまで言う以上、確信があつてのことであろう。下手にごまかすほうが、自分から心が離れていくことになるかもしれない。いっそのこと、すべてを打ち明けて許しを請うたほうが自分のことを受け入れてくれるのではないだろうか。

桜川は、娘に真実を打ち明けることを決めた。再び、視線を娘の顔に合わせる。

「麻子、今まで黙っていて悪かったな。実はな、一緒に写っていた男の子、お前の一歳年上のお兄さんなんだ」そう言うと、桜川はすべてのことを打ち明けた。男の子の名前が善之であり、今でも定期的に会いに行っていることを話した。母親にはなにも話していないことも伝える。自分は、妻や娘のことを愛しており、わざわざこのことを打ち明けて幸せな家庭を壊す必要もないだろうと考えていたことも口にした。

「お父さんのこと嫌いになったか？」桜川は、複雑な表情を娘に向けた。麻子も、複雑そうな表情を浮かべている。

「ううん、全然。だってお父さん、正直に話してくれたもの。それに、お母さんや私のことを愛してくれているって言ってくれたし。でも、善之兄さんにだってお父さんの愛情は必要だから、たまに会いに行くのもおかしくはないと私は思うわ」

「麻子……。理解してくれてありがとう」

「私も、そのうち善之兄さんに会いに行ってみようかな」

「えっ？」

「うそうそ。いきなり私が現れたら、善之兄さんも紀子さんっていう人もびっくりするでしょ。それに、お母さんはなにも知らないわけだし……。もう少し時間が経って、会いに行けるようになったら会いに行きます」

「そうだな。お母さんにも、いずれは打ち明けなければならないと思っている。でも、麻子が理解してくれているんだったら話しをしやすい。本当のことを言うとな、秘密を抱え続けているようで、正直言ってお父さん辛かったんだ。でもな、今こうやって麻子に話を聞いてもらえたおかげで、少しは肩の荷が下りたよ」桜川は、肩の荷が軽くなったことを感じていた。

### 3.

紀子と善之のもとを辞した桜川は、西武池袋線練馬駅に向かって歩き出した。相変わらず小雪が風に舞っている。一段と冷え込みが厳しくなっていた。

体を丸めながら、桜川は、つい先ほどまでの三人の団らんを思い返していた。すき焼きを囲みながら、ひと時の会話を楽しんだ。善之には高校受験が迫っており、その話で持ちきりであった。すでに志望校は決まっており、学校の担任からも善之の学力であれば間違いなく志望校に合格するだろうと太鼓判を押されているということであった。

桜川は、高校受験に合格したらマウンテンバイクを買ってあげてくれることを善之に約束した。善之が、ことのほか喜ぶ。二人の会話に聞き耳を立てていた紀子の顔もほころんだ。

紀子は、善之に贅沢な暮らしをさせることはなかった。

両親から莫大な財産を引き継いだ紀子であったが、今暮らしている分譲マンションを購入したこと以外は大きな買い物をしたことはなかった。食事や衣服も質素に努め、紀子自身も週三日ほどパート勤務に出た。働かなくても充分暮らしていけるのだが、一度贅沢な暮らしにはまると抜け出せなくなることを知っていたからだ。息子は、まだまだ先が長い。今から贅沢な暮らしを覚えさせると、必ず将来苦労させることになる。そのため、毎月の小遣いも常識程度の金額しか与えていなかった。

そんな善之にとって、マウンテンバイクは、手が届きそうで届かない代物であった。地道に小遣いを貯めればいつかは買えるのであろうが、それには時間がかかる。高校生になってからアルバイトをしながらお金を貯めて買おうと思っていた矢先の桜川の言葉であり、嬉しかったのである。

「桜川さん。次は、いつごろ来るんですか？」帰り際に善之が発した言葉を桜川は思い返していた。

「桜川さんか……」彼にとって複雑な思いのする言葉であった。本当は「お父さん」と呼んでもらいたい。

紀子の話によると、どうやら善之は自分と桜川との関係に感づいているようであった。あるとき、それらしい言葉を口にしたということだった。しかし、そのことを突き詰めると母親が苦しくなることを察したのだろう、それ以来その話に触れることはなく、桜川に対しても今まで通りの態度で接してきた。

そんな善之のことを、桜川は不憫に思っていた。できることなら、もっと彼のそばにいてあげたかった。善之も思春期であり、女親には言えないような悩みも抱えていることだろう。そんなとき、彼のそばで話を聞いてあげ、一緒に考えてあげたかった。しかし、今の関係では、それもままならない。

「善之が成人したら、オレの方からちゃんと話をしよう……」桜川は、成人した善之と酒を飲み交わしながら、今までのことを詫び、男同士の話に興じている場面を想像した。

「お父さん、昨日はどんな話をしたの？」書斎の扉を閉めた麻子が問いかけてきた。敏江は、

リビングでテレビのバラエティー番組に興じているようである。

桜川は、紀子と善之のことを打ち明けて以来、二人のもとを訪れるときは、いつも事前に麻子に話すようにしていた。麻子も、毎回のよう、桜川たちが交わした会話の内容や善之の様子を聞いてきた。兄である善之の存在が気になるのであろう。

桜川は、昨晚の会話の内容を思い返しなが、言葉を口にした。

「昨日は、善之の受験の話がほとんどだったな。二月二十三日が試験日だって言っていたよ」

「そうなんだ」

「無事合格したらマウンテンバイクを買ってあげるって言ったら、善之喜んでいたよ」

「へえ。善之兄さん、無事志望校に受かるといいわね」

「そうだな。担任の先生は問題ないって言ってくれているみたいだけどね」

「善之兄さん、頭いいみたいだしね。私も来年受験かあ。私が合格したら、お父さん、なにを買ってくれるんだろう？」

「なにか欲しいものがあつたら、お父さんで買えるものだったら買ってあげるよ」

「じゃあ、その時までに考えておくね」麻子が、屈託のない笑顔を浮かべた。桜川の顔もほころぶ。

「お母さん、昨日も、なにも言っていなかったか？」桜川は、敏江の様子を麻子に訊ねた。

善之が高校受験を控えているということもあり、最近は二人のもとを訪ねる回数が増えていた。紀子も善之の高校入学後のことで相談したいことがいろいろとあるということであり、桜川は、そのたびに相談に乗っていた。たいていが仕事帰りに寄る形であり、敏江に対しては「仕事で遅くなるから食事も済ませてくる」というように伝えてあった。

土曜日に二人のもとを訪ねるときもあった。そんなときは、友人と遊びに行くという理由を使うことが多かったのだが、たまに麻子をカモフラージュに使うときもあった。麻子の買い物に桜川が付きあうというような理由であった。

敏江は大らかな性格であり決して人のことを詮索するような行動は取らなかったが、二人のもとを訪ねる回数が増えていることを桜川が気にしていたのだ。

そんな桜川に向かって、麻子が返事をする。

「心配しなくても大丈夫よ。お母さん、全然不審に思っていないから。お父さんのことを信じきっているみたいだし」

「そうか……。なあ麻子、お父さんはな、お前が二十歳になったら、お母さんと善之にちゃんとした話をしようかと思っているんだ。そのときは、お前と善之を引き合わせるよ」

「そうなんだ。それがいいかもね。お互い、大人になったら自由だしね。私も、そのときが来るのが楽しみだな……」

麻子の脳裏に、写真で見た善之の姿が浮かんでいた。すらっとした四肢と浅黒く彫の深い顔をした風貌の中に、あどけなさが入り混じった少年の姿であった。顔には笑顔を浮かべている。鼻や口の形が、桜川の特徴を捉えていた。脳裏に浮かぶ善之が微笑みかけてくる。一度も会ったことのない相手であったが、なぜだか笑顔が頭の中から離れずにいた。話しをしたこともないのに、声やしゃべり口調のイメージが頭の中で定着してしまっている。

麻子は、胸の鼓動が高まるのを感じていた。

4.

桜川の平穏な二重生活が続いていた。妻と娘との親子三人による仲睦まじい生活の中に、つかの間の紀子、善之との親子生活が存在する。両者は、決して交わることもなく馴染む性質のものでもないのだが、お互いの幸福領域を侵食することもなく各々のアイデンティティを確立していた。

善之は、無事志望校に合格し、晴れて高校生となった。約束通り、桜川はマウンテンバイクを買い与えた。学内のアウトドア系の同好会に入会した善之は、仲間とともにマウンテンバイクを駆使して心地よい汗を流していた。

麻子も中学三年となったが、桜川のおよき理解者であることは変わらなかった。思春期の娘との距離に悩む同世代の父親が多いのだが、彼には無縁の世界であった。相変わらず、紀子や善之のことはすべて娘に話していた。今では、桜川の心の中で、娘に話すことで紀子や善之のもとに定期的に通い詰めることへの免罪符が得られたような気持ちが湧いていた。

そんなあるとき、麻子が、善之の写った写真が欲しいと言い出した。血のつながった兄ということで、善之に対して特別な感情を抱いているのであろう。

桜川は、何枚かの写真を分け与えた。その中には、彼自身と善之が一つのフレームに写された写真もあった。

「頼むから、お母さんに見つからないように保管してくれよ」

「分かっているわ。もし見つかったら、私のボーイフレンドをお父さんに紹介したっていうようにしておくから」

桜川は、善之と麻子が共に成人したら、妻にすべてを話すつもりでいた。

娘が大人になれば、夫婦としての第二の人生がスタートする。子育ての義務から解放され、終生の伴侶としての道を歩み出すのである。そのときは、すべての過ちを懺悔し、すべての古い過去を水に流したい。今まで欺かれていた側からすれば虫の好い考えなのかもしれないが、終生の伴侶としての道を歩むのであれば必ず通り抜けなければならない道でもある。

桜川は、そのときに備えて、今まで以上に夫婦としての絆を強めていきたいと考えていた。

しかし、桜川の平穏な二重生活に終止符が打たれる時がやってきた。善之が高校二年になった秋のことであった。

それは、仕事中に掛かってきた一本の電話から始まった。携帯電話のディスプレイに善之の電話番号が表示されたのを見た桜川は、不審な面持ちで電話に出た。受話器の向こうから、善之の沈んだ声が聞こえてきた。

「突然電話してすみません。今いいですか？」

「いいけど、なにかあったのかい？」

「はい。母のことなんですけど」

「紀子さんがどうかしたのか？」

「実は……」善之の話は衝撃的であった。

話によると、善之のもとに、最近紀子が通い出した病院から担当医が会いたがっているという連絡が入った。その後、善之が指定された時間に担当医を訪ねたところ、紀子が癌であるという宣告を受けたということであった。肺から発した癌がリンパ節や他臓器にも転移しており、手の施しようがないということである。余命も三カ月から持って半年程度ということであり、誰か信頼のできる大人に相談しながら今後の対応を決めたほうがよいのではないかとアドバイスされたということであった。

一カ月ほど前から咳が止まらないことが多くなり微熱も続いていたため、紀子が病院に通い出したということは桜川も知っていた。彼の勧めに従って精密検査も受けた。その結果が出たということなのであろう。

「桜川さん、ボクはどうすれば……」途方に暮れたような声を発した善之に向かって、桜川は「すぐに行くから、どこかでゆっくりと話をしよう」と言葉を返した。紀子は家にいるということであり、桜川は、紀子と善之が住むマンションの近くの喫茶店で待つように指示を与えた。

その日会社を早退した桜川は、指定した喫茶店に駆けつけた。善之は、すでに待っていた。

善之の座るテーブルに着いた桜川はコーヒーを注文した。一杯目のコーヒーを飲み終えていた善之のおかわりのコーヒーも注文する。

ウェイトレスが立ち去ったのを見た桜川は、状況を確認した。

「紀子さん、そんなに具合悪いのか？」

「ええ、さっきも苦しそうにしていました」善之が辛そうな表情を浮かべた。

桜川も、十日ほど前に紀子のもとを訪ねていた。そのときも咳をしていたが、ことのほか元気そうに見えた。そのときに、精密検査を受けるように勧めたのである。

憐れむような眼差しを向けながら、桜川は、善之のことを励ました。

「善之君。なにがあってもボクがキミの力になるから、気持ちをしっかりと持ちなさい」

「すみません」

「いずれにしても、紀さんは入院させなければならないな……。紀さんは、このことを知らないのだろう？」

「ええ」

「そうか……。ところでキミは、このことを正直に紀さんに話したほうがよいと思っているのかい？」

「わかりません。正直言って、どうすればよいのか……。桜川さんは、どう思いますか？」

「難しいな。医者が余命宣告をしているのだったら、残された時間は、心身ともに苦しまないように過ごさせてあげたいからね。でも、紀さんは強い女性(ひと)だから、正直に話しても取り乱すことはないんじゃないのかな。すべてを受け止めた上で、残された時間を悔いなく過ごしたいと考えるんじゃないのかな」

「ボクもそう思います。母は、正直に話しても取り乱すことはないと思います。それに、母に残された時間はボクにとっても残された時間です。お互いに悔いなく過ごすためにも、すべての

状況を受け入れた上で、苦しみも分かち合っただけです」

「そうか。キミがそこまで思っているのだったら、紀子さんに正直に話そう。なにができるのかについては病院側とも相談しなければならないから、明日にでも、ボクとキミとで先生に相談してみよう」そう言うと、桜川は、善之の肩に触れた。

桜川と善之、担当医との間で治療方針が決められた。

再度担当医の口から手の施しようがない状態であることを確認した桜川と善之は、延命治療は行わなくてもよいということを伝えた上で、残された時間の生活の質を保つために、ホスピス病棟での療養をさせてあげたいことを希望した。その結果、担当医が紹介状を書いてくれることになり、ホスピス病棟のある病院に入院することが決定した。

その後、担当医の口から、紀子に対して末期癌で治療ができないことや余命が限られていることが伝えられた。一瞬顔色の青ざめた紀子であったが、「わかりました」とはっきりとした口調で言葉を返した。

紀子のホスピス生活がスタートした。個室に、最低限の生活用品が運び込まれる。ホスピス病棟には末期癌患者ばかり三十名ほどが入院していたが、患者たちの表情は、ことのほか明るかった。患者同士で語りあい、毎日さまざまなイベントが開催されていた。

紀子も、明るい表情を取り戻した。

「私のことは心配しなくてもいいから、来られるときだけ来てね」紀子は、桜川にそう告げた。そこには、迷惑をかけながら死んでいくのは嫌であるという強いメッセージが込められていた。

「言われなくてもそうするよ」笑顔で言葉を返し病室を後にした桜川の目に、涙がこみ上げてきた。

桜川は、紀子のことを麻子に伝えた。

麻子もショックを受けたようであり見舞いに行きたいと言いつつ、桜川が止めた。今の紀子には、なによりも善之との、そして桜川との時間が大切であったからだ。紀子には、残された時間が限られている。その中には、後悔や戸惑いなど心を乱すために消費する時間は含まれていない。最後のひと時ひと時まで、心乱れることなく平安に過ごさせてあげたい。

その思いは麻子にも通じた。

紀子がホスピス病棟に入院してから三カ月が経過した。新年を迎え、病棟内にも正月の余韻が残っていた。毎月のように、何人かの入院患者が旅立ち、新たな入院患者が加わる。

そしてついに、紀子の旅立ちのときがやってきた。

善之から様態が急変したという連絡が病院からあったことを告げられた桜川は、会社を早退し、病院に駆け付けた。医師が、今日明日が山になるかもしれないということを告げる。

桜川と善之がベッドに付き添った。二人とも言葉を口にせず、沈黙の時間が流れていく。

「遅くなるっていう連絡をしておいたほうがいいかな」桜川が家への連絡を思い立ったとき、

紀子が目を開けた。桜川と善之が身を乗り出す。

「二人とも来てくれていたのね……」紀子が、振り絞るように声を発した。

「ずっとここにいたよ」桜川が、笑顔で言葉を返す。

「ボクもだよ」善之も言葉を返した。

しばしの時間桜川の顔を見つめていた紀子が、善之に視線を向けた。善之の手をそっと握り、「善之……」と弱々しく呼びかける。

「なんだい？ お母さん」善之が、顔を近づける。

「善之、ごめんね。お母さん、なにもしてやれなくて」

「そんなことはないよ。お母さんは、ボクを育てるために、女手一つでいろいろとやってくれたじゃないか！」

「そうね……。でも、もうそれも、あともう少しでできなくなるの。善之、よく聞いて。今まで黙っていたけど、桜川さんね……。あなたの本当のお父さんなのよ」

「……お母さん。ボクも、ずっとそう思っていた」

「善之……」

桜川は、数日前に病室に見舞いに行ったときに、善之に桜川との関係を打ち明けたいと紀子から相談を受けていた。旅立ちのときがすぐそこまで来ていることを、彼女なりに悟っていたのであろう。桜川は、自分が実の父親であることを善之に告げた上で、紀子が旅立った後も実の父親として善之と接し続けていくことを約束した。

約束の言葉を耳にした紀子の目から涙が溢れ出る。桜川も、紀子の痩せ細った手を握りながら、髪を優しく撫でた。

5.

その夜、紀子は旅立った。

遺体は、本人の希望で直葬に付されることになった。桜川と善之の二人だけに、そっと見送って欲しいという思いからであった。

紀子は、友人たちに対しても病気のことを知らせていなかった。両親が事故死してからは、親族とも疎遠になっていたようである。もっとも、親族たちも親の反対を押し切ってシングルマザーとなった彼女のことを敬遠していたようであった。

直葬は、都内の葬儀屋でしめやかに行われた。

桜川も、妻の敏江に親しい友人が亡くなったと説明し、紀子の遺体と善之のそばに付き添った。

親族からは、紀子の父方の叔父の使者が一人と母方の伯父が一人顔を出し、形ばかりのお悔みと香典を置いていった。

やがて紀子の遺体は火葬に付され、骨となって善之のもとに帰ってきた。遺骨の収められた骨壺を、遺影とともにマンションの一室に祀る。善之が、寂しそうに紀子の遺影を見つめた。そんな善之の肩にそっと手を置いた桜川が語りかける。

「紀子さん。いい笑顔だな」

「ええ」

桜川は、若き日の紀子のことを思い浮かべた。遺影の中の紀子は、若き日の面影を存分に留めていた。善之の脳裏にも、母との思い出が想い巡っているのであろう。

「善之君。紀子さんのことを、お母さんと呼ばせてもらってもよいかな？」

「はい」

「こうやってお母さんの遺影を眺めていると、いろいろと昔のことを思い出すよ」そう言うと、桜川は、善之に紀子との思い出を語り始めた。出会った頃のこと、結婚を反対され二人で苦悩していたころのこと、そして善之が生まれたときのことなど、思い出しては語った。善之も、桜川の話に聞き入る。

「お母さん、本当に桜川さんのことが大好きだったんですね」善之が言葉を発した。桜川は、寂しそうな笑顔を浮かべながら、何度も小さく頷いた。二人の間を静寂が支配する。

そんな中、おもむろに桜川が口を開いた。

「善之君。気持ちの整理がついてからでいいんだけど、オレのことをお父さんと呼んでくれな  
いかな」

「お父さん……ですか？」

「呼べないか」

「そんなことはないですけど」

「今すぐじゃなくてもいいんだ。ただ、そう呼んでもらえると嬉しい」

「……」

「お母さんから聞いているかどうかわからないけど、オレの名前は善正っていうんだ。キミが生まれたとき、どうしてもオレの一文字を付けたいってお母さんが言うんで、善之っていう名前にしたんだ」

「そうだったんですか」

「キミには寂しい思いをさせてしまい、本当にすまなかった」感極まった桜川の目に涙が溢れてきた。今さらながら、善之に対する不憫な思いが込み上げてくる。桜川が、肩を震わせてむせび泣く。

「お父さん」善之の口から言葉が発せられた。

「えっ？」驚いたように桜川が顔を上げる。

「お父さん、ボクはお父さんに感謝しています。いつも、お母さんやボクのことを気にかけてくれていたし」

「善之……」桜川は、善之の顔を抱き寄せた。桜川の胸の中で、善之がむせび泣く。

やがて善之が顔を上げた。はにかんだような表情を浮かべる。

「善之」桜川は優しい笑顔を向けた。二人が、照れくさそうに顔を合わせる。そんな空気を打ち破るかのように桜川が語りかけた。

「そうだ、キミには、一つ年下の妹がいるんだよ」そう言うと、懐から麻子の写真を取り出し善之に差し出した。

「ボクの妹ですか？」善之が、写真を食い入るように見つめる。

そこには、色の白い一人の少女の姿が映されていた。すらっとした体躯に肩まで伸びた黒い髪、切れ長の瞳と麗しさを帯びた唇、少女としての可憐さの中に大人の女性としての美しさが顔を覗かせた風貌であった。

突然現れた妹の存在に、善之は衝撃的な思いを抱いた。

「麻子っていう妹だ。彼女は、オレと善之の関係のこともすべて知っている。キミに会いたがっているよ」

「そうなんですか」

「なあ、善之。キミさえ嫌でなかったら、オレはキミのことを家族として迎え入れたい。キミが望むのであれば、一緒に暮らしたいとも思っている」

「……」

「本当は、キミと麻子が共に成人したら、事情を知らない妻にすべてを話して、麻子や妻とキミを引き合せようと考えていたんだ。でも紀子がいなくなっちゃったし、キミさえよければ、できるだけ早く妻に事情を話して、キミと引き合わせるよ。妻も悪い女じゃない。ちゃんと事情を話せば、キミのことを温かく迎え入れてくれるよ。それにな、麻子がオレのことを理解してくれていて、本当にキミと会いたがっているんだ。だから、心配しなくてもいい」

「ありがとうございます。ボクも、家族の人に会ってみたいです」

「そうか。わかった。それじゃ、少しだけお父さんに時間をくれ。妻に事情を話して、理解させた上でキミのことを迎えに来るから。もちろん、それまでの間も、ちょくちょくキミの顔を見に来るけどな」 桜川は、温かい笑顔を善之に振り向けた。

6.

「なあ敏江、今度二人で海外旅行にでも出かけないか？」ある日の家族三人での夕食の席で、桜川が話を切り出した。桜川は、妻に対して善之のことを話すタイミングを見計らっていた。簡単な話ではないし、いきなり聞かされる妻のほうも気持ちを整理する時間が必要になる。

折よく、桜川は、会社から勤続二十五年のリフレッシュ休暇をもらえることになっていた。休暇日数は五日間であるが、土日を挟めば九連休になる。祝日を絡めれば、最大十連休の設定も可能であった。

桜川は、妻を海外旅行に連れ出し、日ごろの感謝の気持ちを伝えた上で、もろもろの事情をすべて打ち明けたいと考えていた。日常とは異なる環境でゆっくりと話しあえば、妙なわだかまりを残すことなく理解してもらえるのではないかと考えていたのである。

突然の提案に、敏江が戸惑いの表情を浮かべる。

「海外旅行ですか？ そりゃ行きたいですけど、なんでいきなりそんな話を？」

「実は、勤続二十五年表彰で五日間のリフレッシュ休暇をもらえるんだ。週末と祝日をくっつけば、最大十連休まで可能になる。たまには、お前とゆっくり語らいたいなと思ってね」

「そうね、行けるんなら行ってみたいわね。でも、麻子はどうするの？」敏江が、麻子に顔を向ける。

すかさず、麻子が言葉を返した。

「お母さん、私のことは心配しなくても大丈夫。自分のことは自分でやれます。それよりも、たまにはお父さんと二人だけでゆっくりと過ごしてもいいんじゃない？」

「そうね。麻子がそう言ってくれるんだったら、お言葉に甘えて、海外旅行に連れて行ってもらうかしら」敏江もその気になったようであった。麻子が、ほくそ笑んだような顔を桜川に向ける。

今回の海外旅行計画に関して、桜川は麻子に相談をしていた。母親にすべての事情を話し、理解してもらった上で善之と家族を引き合わせたいという考えも伝えていた。落ち着いて話をするためには環境を変えたほうがよいため、リフレッシュ休暇を利用して海外旅行に連れ出したいという考えも口にしていたのだが、そのとき麻子が、「その話をしたときに、お母さんが私のことを心配して躊躇すると思うから、私の方からも強く勧めてみる」という言葉をかけてくれたのであった。

麻子の援護射撃により、桜川と敏江の海外旅行計画がまとまった。

海外旅行は、ゴールデンウィークを絡めた九日間のヨーロッパツアーに決定した。ドイツ、スイス、フランスの三カ国を巡る旅である。

そして、出発当日を迎えた。麻子が、成田空港まで見送りに来た。円高の影響で海外旅行に出かける人間が多いせいか、空港は混雑していた。

「トイレに行ってくるわね」敏江が、ロビーの席を立ち、トイレへと向かう。遠ざかる母親の姿を目で追いながら、麻子が口を開いた。

「お父さん、頑張ってるね」

「ああ」

「大丈夫よ。お母さん、きっとわかってくれるって」

「そうだといいがな」

「状況、メールで教えてね」

「わかった」

「お土産も忘れずにね」

「わかっているよ」

桜川は、麻子からお土産の希望が書かれたリストを預かっていた。インターネットでヨーロッパの土産物について調べたらしく、渡されたリストには、商品名や製造元などの情報がびっしりと書き込まれていた。リストには、欲しい順の番号もふられている。

敏江がトイレから戻ってきた。桜川が時間を確認する。空港内のアナウンスが、搭乗手続きの開始を告げた。

「じゃあ、そろそろ行ってくるよ」

「ちゃんとした食事をするのよ」

桜川と敏江が、それぞれ麻子に向かって言葉をかける。

「お父さんもお母さんも、せっかくの旅行を楽しんできてね」麻子も言葉を返した。

桜川と敏江が、搭乗ゲートに向かって歩みを進めた。十メートルほど歩いたところで、桜川が

立ち止り、振り向いて麻子に手を振る。

「行ってらっしゃい」麻子も、笑顔で手を振った。

見送る麻子の視野の中で、背を向けて歩く両親の姿が小さくなり、やがて搭乗ゲート内に消えていった。

そのときの麻子は、これから自分の身に降りかかる数奇な運命の幕が切って落とされたことに気付く由もなかった。

## 7.

五月三日の朝を迎えた。その日は、朝から生憎の雨であった。

いつもより遅い時間にベッドから起き出した麻子は、眠い目をこすり、コーヒーを入れるためのお湯を沸かした。洗面台の水で顔を洗い、髪を梳く。

キッチンに戻り、フライパンに油を敷き、ハムを載せた。油の跳ね終わるのを待って卵を落とし、フライパンにふたをして蒸し焼きにする。食パンをトースターに入れ、スイッチを入れる。冷蔵庫の中から、昨日のうちに準備しておいた野菜サラダを取り出し、皿に盛り付ける。お手製のモーニングセットの準備が整った。

「今晚帰ってくるんだわ」麻子は、小さく呟いた。

両親を乗せた飛行機が、今日の午後六時に成田空港に到着する。どこかで夕食を済ませてくるにしても、午後九時までには家に帰ってくるであろう。

「お土産楽しみだな」麻子は、旅行ケースの中から一つ一つ土産物を取り出しては説明をする父親の姿を想像し、微笑んだ。娘想いな父親のことである。きっと手渡したリストに忠実に従って土産物選びをしたに違いない。

「善之兄さんの土産も買ったんだろうな」麻子は、旅行中何度か父親からメールを受け取っていた。そのメールによると、母親との話は上手くいったらしい。

母親も、最初は驚愕し、しばらくの間は戸惑いの色を隠せなかったようだったが、旅行を続けているうちにわだかまりもなくなり、善之の存在を受け入れたということであった。最後のメールでは、「旅行から帰ったら、近いうちに、お父さんとお母さん、麻子、善之の四人で会う時間を作るつもりだ」と書かれてあった。麻子も、善之に会える日が待ち遠しくて仕方がなかった。

朝食を食べ終えた麻子は、食器を片づけ、出かける準備に入った。今日は、友人と四人で渋谷の街に繰り出す約束をしていた。いずれも同じ高校のクラスメイトだった。四人の話題の中心はファッションであった。渋谷には、ティーン向けのファッションビルがたくさんある。

麻子は、四月二十日で十七歳になった。四人の中で十七歳を迎えているのは麻子だけである。

「そろそろティーンは卒業して、アダルトファッションにチャレンジしてみようかな……」ティーン向けファッションのブランド話に盛り上がる三人の姿を想像しながら、麻子はアダルトファッションのフロアーにも三人を付き合わせようと考えていた。

友人たちとの楽しい時間は、あっという間に過ぎ去った。気の置けない四人で、ファッション

ビルをはしごする。ファストフードで食事を摂り、カフェでスイーツを楽しみながら話に興じる。そうこうしているうちに夕方の時刻を迎えた。

一緒に早めの夕食を済ませた三人が、麻子のことをカラオケに誘う。

「ごめん。今晚、親が帰ってくるの」申し訳なさそうな表情を浮かべながら、麻子は誘いを断った。

「そうだったよね。麻子の両親、今日ヨーロッパから帰ってくるんだったよね」

「いいなあ。いろいろと土産を買ってきてもらえるんだろうなあ」

「どんな土産があったのかメールで教えてね」

三人が、口々に言葉を発しながら、麻子に手を振る。

手を振り返した麻子は、三人と別れ、渋谷駅に向かった。

時計の針が夜の九時半を指していた。両親は、まだ帰ってこない。電話やメールの連絡もなかった。

「どうしたんだろう？」麻子は首をかしげた。

成田空港から家までは、普通に行けば一時間半くらいで着く。どこかで食事を済ませてくるとしても九時には帰ってこなければおかしい。家で娘が一人で留守番をしているのである。両親の性格からして、一刻も早く帰ろうとするはずだった。

「途中で事故でもあったのかな？」麻子は、空港から家の最寄り駅までの間で鉄道のトラブルが発生したのではないかと考えた。リビングのテーブルの上に置かれたリモコンを手に取り、テレビのスイッチを入れる。

その麻子の目に、緊迫した報道映像が飛び込んできた。腕章を巻いたリポーターが、マイクを片手に緊張した口調で言葉を発する。画面の上部には、「成田空港、エールフランス便着陸失敗！ 乗員乗客二八八人の安否不明！」というテロップが映し出されていた。

「エールフランス便！」麻子の顔が青ざめた。たしか両親は、午後六時に到着するエールフランス便に搭乗しているはずである。

目を見開いた麻子の耳に、絶望的な言葉が飛び込んできた。

「繰り返します。着陸に失敗し滑走路手前の丘陵地帯に追突した午後六時到着予定のエールフランス二七五便ですが、現在、警察と消防による懸命の救出活動が続いておりますが、生存者を確認できたという情報は入ってきておりません。火災は鎮火した模様ですが、機体の損傷が激しく、救出が難航している模様です。繰り返しお伝えします……」

麻子の頭の中が混乱した。両親が乗っているはずの飛行機が墜落したという報道であった。さらに、事故の状況から生存者の発見は厳しいということだ。客観的な状況は理解できるのだが、当事者としての自分がどうしたらよいか分からない。今自分はなにをすべきなのであろうか。誰かにすがりたい。そして、なにをしたらよいか導いてもらいたい……。

そんな麻子の脳裏に、一人の顔が浮かんできた。善之の顔であった。まだ一度も会ったことのない善之であったが、無性に彼にすがりたかった。

我に返った麻子は、父親の書斎に入り、机の中を探した。善之の家の電話番号を見つける。「

お願い、家の中に居て！」麻子は、祈るような気持ちでダイヤルを回した。

何度かの呼び出し音の後に、「はい、千倉ですが」という男の声が出た。実際の声聞いたことは一度もなかったが、麻子は善之の声であることを確信した。今まで頭の中で思い描いていた善之の声そのものであった。

「もしもし、千倉善之さんですか？」

「そうですけど」

「あの、私、桜川麻子と言います」

「えっ？ 桜川麻子さん？ もしかして、桜川善正さんの娘さんですか？」

「はい」

「あっ、どうも、初めまして」どうやら、善之は事故のことを知らないらしい。

「いきなり電話してすみません」麻子が、電話口で詫びる。

「いや、別にいいんですけど……。なにかあったんですか？」善之が問い返す。

気を落ち着かせた麻子が、電話の向こうの善之に向かって哀願した。

「善之さん。善之兄さん。お願い、私を助けて！」

「えっ？ 助けてって、なにがあったのですか？」

「あのね、お父さんとお母さんが大変なことになっちゃったの……」麻子は、涙ぐみながら、事故が発生したことを伝えた。

驚いた善之が、慌てた様子でテレビをつける。事故の報道は続いていた。状況を理解した善之が、麻子に問いかける。

「お父さんとお母さんが乗っていた飛行機は、本当にエールフランス二七五便だったのですか？」

「ええ、間違いないです」

「電話やメールも通じませんか？」

「ぜんぜん」

「マジで……」

「私、どうしたらよいのかわからなくて、善之兄さんに助けてもらいたくて……」

「わかった。これからボクがそっちに行くから、家の中で待っていてください。タクシーを呼んで行くから。三十分位で着くと思うから」

「お願い、早く来て！」泣きながら、麻子は受話器を置いた。

きっちり三十分後、善之がやって来た。

何度も写真で見た顔と同じ顔が麻子の目の前に現れた。

「どうも」切なそうな表情を浮かべながら、善之が第一声を口にする。

「突然連絡してごめんなさい」泣きそうな表情を浮かべながら、麻子は再び詫びた。

麻子の心の中も、やりきれない思いで一杯であった。本来であれば、両親と善之と自分との四人で会うはずであった。四人で楽しく会話をしながら互いに打ち解けあい、楽しい時間の中で過去の溝を埋めていくはずであった。よもや、こんな悲しい出会いをすることになるろうとは思って

もいなかった。

再び、麻子の目から涙が零れ落ちる。善之が、そっと麻子の肩を抱いた。麻子が、善之の胸の中に顔をうずめる。善之の目からも涙が溢れ出た。

やがて、そっと麻子が顔を上げた。善之と麻子の視線が交わる。

「辛いだろうけれども、泣いてばかりいたら物事が前に進まないから、とりあえずやれることをやろう！」善之が、優しい口調で語りかけた。麻子が頷く。

「親戚の人とかには連絡したの？」善之の言葉に、麻子が首を振った。麻子の頭の中では、親戚の人に相談するという選択肢は浮かんでこなかった。

「今日ヨーロッパから帰ってくるってことは、親戚の人たちは知っているの？」

「知らないと思う。誰にも連絡していないと思うし」

「そうか……。じゃあ、これからオレたちで成田空港に行こう」

「現場に行くの？」

「ここに居たって、なにもわからないから。空港に行けば、安否の確認ができると思うし」

「わかった」

「あとさあ、お父さんとお母さんが使っていたものをなにか持って行ったほうがいいと思うよ。遺体の身元確認をするときに、本人のDNAがあれば早く確認ができるらしいから」

「身元確認？ お父さんもお母さんも死んじゃったのかな？」

「オレは、生きていて信じているよ。でも、たとえダメな場合でも、早く事故機から助け出して弔ってあげたいと思うし……。ごめんな、辛いことを言って」

「ううん、いいの。ただ、私一人だったら、冷静に考えられなくて」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

桜川と敏江の持ち物を手にした二人は、タクシーを呼んだ。

成田空港は混乱を極めていた。警察や報道の人間が空港内を右往左往する。乗客の家族たちが続々と詰めかけ、警察の人間や空港職員を質問攻めにした。どうやら、遺体の収容作業が開始されたようであった。生存者が見つかったという話は聞こえてこない。

「乗客のご家族の方がおられましたら、お話を聞かせていただきたいので、こちらにお集まりいただけませんか？」警察の腕章を巻いた背広姿の男が、ハンドマイクで声を張り上げた。男のもとに続々と人が集まる。

警察が、いくつかの班に分かれた。乗客の家族たちが、近くの班をめぐって散らばる。善之と麻子も、家族たちの列に並んだ。

そして二人の順番が回ってきた。二人は、自分たちの両親が事故機に搭乗していることを説明し、両親の名前を告げた。警察が搭乗者名簿を確認する。名簿の中に両親の名前があった。

「ご両親は事故機に乗られておられるようですね。今なにか、ご両親が使っていた物とかをお持ちですか？」両親のDNAが採取できる物を持っているかという質問であった。

善之が、二本の歯ブラシと桜川が愛用していた電気カミソリの入ったビニール袋を差し出した

。警察が中身を確認し、預かり証を善之に手渡す。

「あの、生存者は見つかっていないんでしょうか？」善之が訊ねた。

それに対して警察が、「残念ながら、今のところ発見されていません」と返事をする。

再び「生存者がいる可能性はないのでしょうか？」と訊ねた善之に対して、警察が「厳しいかもしれませんが」と言葉を返した。

8.

二人は、空港のロビーで一夜を明かした。

ロビーは、深夜にもかかわらず続々と押し寄せる乗客の家族や報道関係者らによってごった返していた。一晩中、喧騒が鳴りやまない。

乗客の救助活動は、夜通し行われた。機内から次々と遺体が運び出され、検視会場となった空港近くの体育館に運び込まれる。

二人は、警察から両親の歯を治療した歯科医院の場所を問われた。歯形が入手できれば、早く身元確認ができるということであった。麻子が、記憶に残る歯科医院の名前と所在地を告げる。

「身元の確認作業はもう少し時間がかかりますので、いったん自宅に戻られたらどうですか？」警察が二人に勧めた。両親の身元が判明した場合、警察のほうから連絡を入れてくれるという

。

「どうする？」というように、善之が麻子の顔を見やった。麻子が頷く。警察に麻子の家の電話番号を告げた二人は、いったんそれぞれの家に戻ることにした。

家に戻った麻子は、親戚の人間に連絡を入れた。彼女には、三人の祖父母の他に父方の叔父が一人と母方の伯母が一人いた。それぞれの家に連絡を入れ、事情を説明する。

群馬県内に住んでいる父方の叔父夫婦が真っ先に駆けつけてきた。他の親族たちも、順次集まってきた。

翌日、麻子のもとに警察からの連絡が入った。両親の遺体が発見されたということであった。父方の叔父夫婦や母方の伯母夫婦、祖父母たちとともに、麻子が空港に駆けつける。

親族一行は、警察から状況を説明された。歯科医院から入手した両親の歯形が一致し、DNA鑑定の結果からも本人と断定されたということであった。

遺体は、警察の勧めで、現地で焼いて骨にしてから持ち帰ることになった。空港近郊の火葬場がフル稼働する体制を取っているということである。

やがて、両親の遺骨が納められた二つの骨壺が、親族たちのもとに帰ってきた。白い骨壺を目にした親族たちの目から涙が溢れ出る。

二つの骨壺は、麻子の家に運び込まれた。

二日後、都内の葬儀会場で告別式が行われた。喪主は、父方の叔父が務めることになった。

連絡を受けた弔問客たちが、続々と会場に押し寄せる。どの弔問客の目にも、一人残された麻

子の姿が痛々しく映った。麻子に対する励ましの言葉が投げかけられる。

そんな弔問客たちに対して、麻子は気丈に振る舞った。弔問客たちを前にして、両親に対する感謝の気持ちを綴った弔辞を読み上げる。そんな麻子の気丈さが、弔問客の涙を誘った。

善之も、告別式に列席した。桜川善正は、善之にとっても実の父親であったからだ。しかし、桜川が周囲の人間に善之のことを話していない以上、息子の立場で葬儀の場に臨むわけにはいかなかった。そんなことをすれば、葬儀の場は大混乱に陥るであろう。

麻子と相談した善之は、麻子の友人という立場で列席することにした。

焼香に立った善之が、桜川の遺影に手を合わせ、祈りをささげる。善之の目から涙が零れ落ちる。

「なんで死んじゃったんですか？」善之は、胸の中で桜川に向かって語りかけた。

善之も、桜川と敏江、麻子との四人で会える日を心待ちにしていた。桜川から、妻と二人でヨーロッパ旅行に出かけることになり、そのときにちゃんと話をすると聞かされたときは、いよいよ現実のことになるのだと心躍らせた。それが、こんな悲しい形で四人が顔を合わせる結果になってしまった。

善之は、桜川と敏江の遺影に一礼し、焼香の場を離れた。

桜川と敏江の遺骨は、四十九日法要までの間、麻子の家に置かれることになった。二人の住処でもあり、麻子が遺影とともに見守ることに対して誰も異を唱える者はいなかった。

親戚の人間たちも、順次それぞれの住む街へと帰って行った。

## 9.

葬儀の二日後、桜川と敏江の遺影に手を合わす善之と麻子の姿があった。葬儀の場では麻子の友人という立場で列席せざるを得なかった善之だったが、改めて息子の立場で弔うためにやって来た。

線香に火を灯し、二人で長い祈りを捧げる。

二人が、祈りを終えた。善之が、麻子に語りかける。

「オレたち、二人だけになっちゃったな」

「そうね」麻子が、寂しげな表情で言葉を返す。

善之は、母を亡くして以来、彼のことを構ってくれる親族など一人としていない状態だった。麻子の親族もいずれも遠方に住んでおり、日常的に構ってくれる人はいない。まさに、お互いに一人ぼっちになってしまったのだ。

二人の間に沈黙が流れた。沈黙の間を嫌うかのように、善之が麻子に語りかける。

「でも、お父さんのおかげで、オレたち、こうやって巡り会うことができたんだ。両親はもういないけど、オレたち二人で力を合わせて生きていこうよ」

「うん」麻子の顔に笑みがこぼれた。

麻子は、両親の突然の死をいまだに受け入れることができずにいた。娘想いの優しい両親であった。そんな両親がいなくなり、胸の中に大きな隙間が空いてしまった。自分には、その隙間を

埋めてくれる人が必要であった。そして、心の隙間を埋められるのは善之しかいなかった。

麻子は、初めて写真で善之を見たときから惹かれるものを感じていた。実の兄ということで血を分け合う者同士として惹かれる部分もちろんあったのだが、それだけではない部分もあった。兄妹としてではなく、一人の男性(おとこ)として惹かれる部分も感じていた。

今の自分には、頼れるのは善之しかない。そんな麻子の気持ちに答えるかのように、善之が語りかけた。

「これからいろいろと辛いことがあるかもしれないけど、オレが麻子のことを守ってあげるから、なにかあったらオレのところに頼ってこいよ」

「ありがとう。そうする」麻子が、はにかんだような表情を浮かべる。

「あっ、そうだ」善之が声を上げた。

「えっ？」麻子が聞き返す。

「オレ、まだ麻子のお母さんに、ちゃんとした挨拶をしていなかった」善之が、敏江の遺影に向き直った。麻子も、遺影に顔を向ける。

善之が、遺影に向かって静かに語り出した。

「お母さん、初めまして、千倉善之です。ボクという存在がいることを知って、正直驚かれたのではないですか？ ボクも、お母さんや麻子の存在を知ったとき、最初は驚きました。でもお父さんが、ボクのことをちゃんと説明して四人で会えるようにしてくれると言ってくれたときは本当に嬉しかったです。四人で会える日を心待ちにしていました。それがこんな形で……。お母さん、これからはボクが麻子を守って二人で力を合わせて生きていきますから、ボクたちのことを天国で見守っていてください」善之が言葉を終えた。横で、麻子がすすり泣く。

そして、善之が、桜川の遺影に視線を向けた。再び語り出す。

「お父さん。本当に今までありがとうございました。物心ついたときからお母さんと二人きりの生活でしたが、お父さんがちょくちょくボクたちのもとを訪ねて来てくれたおかげで、寂しい思いをせずに済みました。ボクは、お父さんが来る日を本当に心待ちにしていました。お母さんの口からボクの本当のお父さんであることを聞いたのはお母さんが亡くなる直前のことでしたけれども、ボクはずっと前から本当のお父さんだと確信していました。ボクは、お父さんの子どもであることに誇りを持っています。お父さんのおかげで、今こうやって四人で会うことが出来ました。もうお父さんと話すことはできないけど、ボクの心の中にずっと生きています。これからも天国で、ボクと麻子のことを見守っていてください」善之が挨拶を終えた。

善之が、照れたような笑顔を麻子に向ける。麻子も涙をぬぐい、笑顔を善之に向けた。

「これからも宜しく」善之が言葉を発する。

「こちらこそ宜しく願います」麻子が言葉を返した。

「ちょっとトイレ」善之が立ち上がった。トイレに向かう善之の後姿を、麻子が目で追う。

麻子にとって、善之は、なくてはならない存在になっていた。

1.

「はい。じゃあ、今日はここまで」壇上の教授が、講義の終了を告げた。学生たちがどやどやと席を立ち、教室から退出する。午前中最後の講義であり、次の講義開始までの一時間二十分もの間、学生たちにとって憩いのひと時であった。

学生食堂を目がけて歩みを早める者、友人と連れ立って学外のレストランやカフェで優雅なランチを決め込む者など、学生たちが慌ただしく移動を始める。ここ日本理工大学の赤羽キャンパスにも学生食堂はあるのだが、狭くてメニューも少ないという理由から学生たちの間では不評であった。教室から退出した学生の多くが、大学の正門に向かって歩みを進めていた。

その中に善之の姿があった。六名のクラスメイトとグループになり歩みを進める。

「どこ行く？」グループの一人の川本信吾が、仲間たちに向かって問いかけた。

「バイキングに行かない？」山村俊樹が、駅前のショッピングモール内にある中華レストランの名前を口にする。川本ら男子学生たちが、グループの女子学生たちに視線を向ける。

「いいわよ、バイキングでも」女子学生たちも賛成し、一行は駅前に向かった。

善之は大学二年になっていた。桜川善正と敏江の命を奪った飛行機事故が発生してから二回目の四月を迎えていた。麻子も無事大学受験に合格し、今年から学生生活をスタートさせていた。

あの日から、二人の生活は一変した。

善之は、女手一つで育ててくれた母親を亡くし、心の支えであった父親までも亡くしてしまった。いわば、心のよりどころをいっぺんに失ってしまった形であった。

それと同時に、麻子という存在を得た。しかし彼女は妹であり、自分が支えてあげなければならない立場である。今まで人に支えられて生きてきた人生から、人を支える人生に百八十度転換したのだ。そのことに最初は戸惑いを隠せなかった善之であったが、彼なりに妹を支えてきた。己の存在が社会的に公になっていないために表立って行動できないこともあったが、精神的な支えにはなっていた。

両親を失って以来、法事関係や相続、そして航空会社への賠償交渉など、一人の女子高生の手にも余ることが次々と麻子の身に降りかかっていた。大人の力を借りなければやれないことばかりであった。彼女には、自らが旗振り役となって親族の大人たちを巻き込み、数々の難題を解決していかなければならない役割があった。

そんな中で、大学受験の話も持ち上がる。麻子は、何度も精神的に追い詰められた。そんな彼女のことを、善之は兄として支え続けていた。

善之自身は、日本理工大学を現役で合格し、経営情報学部には籍を置いた。将来は、情報理論を駆使した企業コンサルタントになりたいという志からこの大学を選んだ。

善之は、今でも母と一緒に暮らしていたマンションに一人で暮らしていた。一人暮らしを始めた当初は2LDKの空間がやけに広く寂しく感じていたのだが、今は一人で広い空間を占拠する

ことに違和感を覚えなくなっていた。

マンションを訪れた友人たちも、広い空間を独り占めしている善之のことを羨ましがった。地方から出てきた友人たちは、古いマンションやアパートの狭い一室で生活していた。親と同居しながら大学に通う友人も、親から与えられたプライベートルームのみが自分だけの空間であった。

彼らには、両親を失った人間の心の空洞など知る由もない。住居だけではなく、彼の生活そのものが、友人たちの目には優雅に映っていた。母の遺産を相続した善之は、生活には困らなかった。会社を経営していた祖父の莫大な財産の大半を引き継いだわけであり、マンションも分譲物件であったため家賃も発生しない。

しかし、善之は、母の教えを守り、贅沢な生活に陥らないように心掛けていた。母は口癖のように「一度贅沢な生活に陥ったら、そこから抜け出すことができなくなる。そうなると、考え方も変わり、周囲にも金に飽かした人生しか歩めない人たちがばかりが集まってくるようになる。そうなると、二度と人間らしい生き方ができなくなる」という言葉を、幼いころから善之に対して語っていた。母も、その考えを忠実に守ってきた。

その心は、善之に引き継がれたのである。

中華レストランに到着しオーダーを済ませた善之たちは、バイキングテーブルへと向かった。並べられた料理を互いに品評しあいながら、次々と皿に料理を取り分けていく。

盆に料理が山盛りになった皿を無理やり敷き詰めた善之は、テーブルに戻った。同じく料理が山盛りになった皿を載せた盆を抱えた山村と川本が、善之の両隣の席に腰を下ろした。料理を食べながら、三人が会話を繰り広げる。

話題は、近づいてきたゴールデンウィークの過ごし方であった。彼女、彼氏のいる者は、旅行に出かけるなど楽しみな予定が詰まっているのだが、あいにく三人には彼女がいなかった。善之も、一か月前に、一年間交際していた彼女と別れたばかりであった。

山村が、話の口火を切る。

「なあ、ゴールデンウィーク、京都に行かないか？」

「京都に？」

「なにしに行くの？」

善之と川本が言葉を返す。

「天皇賞を見に行こうよ」山村が、京都行の目的を口にした。

ゴールデンウィーク最初の四月の最終日曜日に、京都競馬場で、競馬の一大レースである天皇賞が開催される。著名なタレントを使ったCMの効果もあってか、近年、若者たちの間で競馬熱が高まっていた。

善之も、山村からの手ほどきを受けて、一年前に競馬を覚えた。それ以来、山村や川本たちと連れ立って、何度も競馬場に足を運んでいた。東京近郊では、府中市にある東京競馬場と千葉県船橋市にある中山競馬場で競馬が開催されていた。

競馬といえば、赤鉛筆を耳に挟んだ親父たちが群れ集まった鉄火場のような雰囲気イメージ

していたのだが、現実とは違っていた。場内は広く、清潔で、おしゃれなレストランやカフェもある。広い芝生や遊具、博物館なども併設されている。競馬をやらない人間でも、十分に楽しめるスペースが確保されていた。

競馬に対するイメージが変わった善之は、山村たちとともに、頻繁に競馬場に足を運ぶようになっていた。そんな彼らと、いずれは東京や中山以外の競馬場へ遊びに行こうと話しをしていた矢先のことであった。

「天皇賞か。いいねえ、行こうよ」善之が声を上げた。川村も行きたいという言葉の口にする。いつの間にか、グループのもう一人の男子学生である佐山誠も話の輪に加わっていた。

男四人は、グループの女子学生三人にも声をかけた。メンバーの中に女性がいたほうが楽しいという思いから誘ったのであったが、期待も空しく断られてしまった。三人とも、なにかしらの予定があるということであった。

男四人の間で、京都行の話が盛り上がる。今年のゴールデンウィークは、カレンダーの並びが良く、連休合間の二日間を休みにしてしまえば最大九連休にすることが可能であった。

「九連休にするしかないでしょ！」川本が、三人に呼びかけた。

「当然だろう」佐山も言葉を重ねる。

「間の二日間もそこそこ休講が入っているし、問題ないんじゃないか？」山村が、善之に顔を向けながら口にした。

「そうだな」善之も頷く。

善之の大学では、講義に出席しなかった場合でも、後日ビデオで補習することが可能なシステムが取り入れられていた。加えて、いつでもノートをコピーさせてくれる気のいいクラスメイトが何人もいる。

善之の脳裏に、五月三日という日付が浮かんできた。桜川善正と敏江の命日だった。

去年の五月三日は、一周忌の法要が済んだ後に麻子と二人で墓参りをした。今年は墓参りの約束はしていなかったが、善之の頭の中では今年も二人で墓参りをしたいという思いがあった。善之が、その気持ちを三人に伝える。善之の気持ちを理解した三人が頷く。

その後、四人の間で旅行計画が話し合われ、四月二十七日の夜に東京を出発し、五月三日の朝に東京に帰ってくる日程が決まった。関西一円を巡る旅であり、行きも帰りも夜行バスを利用することにした。出発日は金曜日であったが、旅先での時間を最大限確保するために、金曜日の夜に出発する計画が立てられた。

宿は、直前に携帯電話の予約システムから申し込むことにした。直前予約のほうが、値段が安くなるからであった。「どこかしら空いているって！」四人は、宿については楽観的だった。

善之は、楽しい気持ちで一杯になった。旅行など、久しくしたことがない。

「麻子にも伝えておこうかな」善之は、携帯電話を取り出した。メールに文章を打ち込む。関西に旅行するというのを伝えた上で、五月三日に墓参りに行かないかという言葉を送った。

そのころ麻子も、女友達と四人で、大学のそばのカフェで昼食を摂っていた。

四人のテーブルには、四人分のランチセットのプレートが並べられていた。パスタとサラダ、洋風総菜が三品盛られたプレートであった。プレートとは別にスープカップも置かれている。

四人は、会話を楽しんでいた。四人とも新入生であり、大学の教授の話題からサークルの勧誘や履修科目の話題など、大学に関する話題が次から次へと繰り広げられた。その後、芸能界やファッションなど大学とは関係のない話題に移り変わる。

そして四人の話題が、ゴールデンウィークの過ごし方に変わった。

「みんな、ゴールデンウィークどうするの？」四人の中の佐久間知美が口にした。

知美は、麻子にとって特に気の許せるクラスメイトであった。

大学入学後、初めての授業に出席したときに隣の席に座ったのが知美であった。意気投合した二人は、その日のランチを共にした。そのことをきっかけに、二人の仲は急速に深まった。まだ知り合ってから半月余りの時間しか経過していないのだが、まるで旧知の仲であったかのような感覚を麻子は抱いていた。知美も、そのような感覚を麻子に対して抱いているようであった。

知美の問いかけに対して、一人の女子学生が、「私、彼氏と旅行に行ってきます」と、照れながら恋人との旅行話を打ち明けた。

「いいなあ」

「私も旅行じゃないけど、ディズニーへ一緒に行くのと、あとドライブへ行く約束をしているんだ」別の女子学生が、恋人との約束話を打ち明ける。

「麻子はどうするの？」知美が訊ねた。

「別に、特に予定はないけど」

「ほんとうに？ っていうか、麻子って、ほんとうに彼氏いないの？」

「おかしいよねえ。絶対に、麻子は男にモテるはずだけどなあ」

仲間の女子学生たちが口々に言葉を発した。

四人グループのうち、麻子と知美以外の二人には現在進行形の彼氏がいた。いずれも高校時代からの付き合いであり、互いに別々の大学に入ってから熱い関係が続いているということであった。さらに知美も、最近ある男性から打ち明けられ、交際一歩手前の状態にあるということも口にしていていた。

そんな三人は、常々、麻子が彼氏いない歴十八年であることを不思議がる言葉を口にしていて。三人曰く、麻子はルックスもスタイルもよく、女らしい雰囲気もあり、男性にモテないはずがないということであった。事実、大学に入ってから、麻子に対してモーションをかけてくる男子学生が何人かいた。

今日もその言葉を口にされた麻子が、「いないもんはいないんだもん」と拗ねたような表情を浮かべながら言葉を返した。

「わかった。そのうちいい男性(ひと)を紹介してあげるから」仲間内からのお決まりの文句で、麻子を取

り巻く話題は終了した。

その後も、ゴールデンウィークの予定話で盛り上がった。

彼氏と旅行に出かけるという女子学生が、やり玉に挙げられた。彼氏との初めての旅行である

ということであり、夕食を食べ終えた後の時間をどのように過ごすのかなど、ドラマ仕立てのストーリーが展開される。

麻子も、時折口をはさみながら、話に耳を傾けていた。

そんな中、麻子の携帯電話のメール着信音が鳴った。メール画面を開く。善之からのメールであった。そこには、四月二十八日から友達と関西方面に旅行へ出かけるという内容とともに、五月三日と一緒に墓参りに行かないかという言葉が記されていた。

メールを目にした麻子は「もう、あれから二年も経つのか……」と胸の中で呟いた。

桜川善正と敏江の墓は、都内のとある霊園の中にあった。善之と麻子が新しく建てた墓であった。

四十九日法要が終わったあと、親戚たちは、一様に桜川家の墓に埋葬することを麻子に勧めた。それが自然であるという理由からであった。

しかし、善之とも相談した麻子は、その勧めを断り、新しく墓を建てた。桜川家の墓が香川県という遠方にあることも理由の一つだったが、なによりも、善之が公然と墓参りをすることができないことが最大の理由であった。

善之にとっても、血のつながった父親が眠る墓である。二人で両親の御霊を見守りたい。そう考えた麻子は、親戚たちに新しく両親の墓を建てることを告げた。

反対する親戚もいたが、麻子は押し切った。彼女のことを批判する親戚もいたが、麻子にとって善之と二人で見守ることが重要なことであった。両親もそうしてもらいたいと思っているはずだと確信していた。

麻子は、五月三日と一緒に墓参りに行きたいという返事を返信した。その後のゴールデンウィーク期間中も特に予定が無いことも告げる。善之に、どこかへ遊びに連れて行ってもらいたいと願う気持ちがあった。

善之はなにかと自分のことを気にかけてくれてはいたが、一緒に食事に行ったり遊びに行ったりすることはあまりなかった。特別おかしなことではないのだが、どこか胸の中で寂しい思いを抱えていた。ともに両親を失い、たった二人残された兄妹なのだ。今まで以上に強い結びつきを、麻子の心は求めている。

「これからいろいろと辛いことがあるかもしれないけど、オレが麻子のことを守ってあげるから。なにかあったら、オレのところに頼ってこいよ」葬儀の後、自宅に戻ってきた両親の遺影に二人で祈りを捧げたときに善之が口にした言葉を麻子は思い返していた。

「会いたいな……」麻子の胸の中に、善之の笑顔が広がった。

## 2.

四月二十八日、善之たち四人を乗せた夜行バスは、予定通り朝の七時十七分に京都駅前に到着した。

四人は、京都の地に降り立った。京都駅前は、柔らかな朝の陽ざしに包まれていた。気象庁の

週間天気予報では、ゴールデンウィーク期間中は安定した晴れの日が続くということであったが、予報通りの一週間であることを予告するような青空が広がっていた。

四人は、今日と明日の二日間、京都市内に宿泊する予定を立てていた。宿は、すでに携帯電話からの予約で確保してある。今日は京都市内を観光し、明日は京都競馬場へ遊びに行く予定を立てていた。

荷物を駅構内のコインロッカーに預け、朝食を食べるためにファストフード店に足を踏み入れた四人は、テーブルの上に用意したガイドブックを広げた。それぞれが、観光したいエリアやジャンルなどを主張しあう。

佐山が、四人の要望がミックスされた観光ルートと大よそのスケジュールを組み立てた。細かい計算が得意な佐山は、これまでもグループで行動するときのスケジュールを何度も組み立てていた。

スケジュールを確認した四人は、地下鉄の京都駅に向かった。京都市内を観光するには、市内を網の目のように走る市バスを利用するのが便利である。四人は、地下鉄とバスが乗り放題になる一日乗車券を購入し、最初の目的地である大原へ向かった。

四月二十九日の朝を迎えた。

前の日に神社仏閣を中心とした京都市内の観光施設を余すところなく巡り、夜は遅くまで酒を飲んだ四人は、一様に浮腫み上がった顔をしていた。昨晚の酒が残っている上に寝不足気味なのである。

四人は、ビジネスホテルのツインルームを二部屋取り、二人ずつに分かれて宿泊した。善之は、山村と同じ部屋であった。一度起き上がった善之が、再び布団に潜りこむ。

「起きろよ！」山村が、善之の体を揺すった。

「もう少しだけ」善之が、布団をはがされまいと抵抗する。

「早く並ばないと、いい場所を取れなくなるぞ！」山村が、声を張り上げた。

いい場所とは、京都競馬場のゴール板に近いポジションという意味であった。レースで走る競走馬を間近で見ると、観客はコースと屋外スタンドとの間に設けられた柵の近くに集まる。中でも、ゴール板に近い場所に多くの観客が集中する。一早く良い場所を確保した者が、ビニールシートを敷き、マイポジションを主張していた。

天皇賞のような大きなレースになると、朝早くから大勢の観客が入場門の前に並び、開門と同時にダッシュし、ポジション争いを繰り広げる。ぐずぐずしていると、ゴール板から遠く離れた場所で観戦しなければならなくなる。そのために、四人は早めに京都競馬場に行って並ぶことを決めていた。

しびしびといった表情で善之は起き出した。トイレを済ませ、顔を洗い、着替えを済ます。山村は、すでに出かける準備が整っているようであった。

善之の準備が整ったのを確認した山村が、部屋の鍵を持ち、ドアのチェーンを開けた。

午前九時、京都競馬場の入場門が開いた。朝早くから列をなしていたファンが入場ゲートをく

ぐり、一斉に走り出す。屋内スタンドの自由席や屋外スタンドのゴール板に近いポジションを確保するための競争であった。

善之たち四人も駆け出した。足の速い川本が一步抜きん出る。他の三人も、川本の姿を見失わないように懸命に走る。四人は、ゴール板から二十メートルほど離れた柵沿いのポジションを確保することができた。

地面に敷いたビニールシートが風で飛ばされないように固定した四人は、柵にもたれながら、初めて来た京都競馬場の全容を眺めた。目の前には、広大なコースが広がっていた。芝コースを一番外側にして砂が敷き詰められたダートコース、障害レース専用のコースが三重になり、大きな楕円形を描く。正面に巨大なビジョンが設置され、レースの様相やオッズの表示を映し出す。その向こう側には池が広がり、水面を白鳥たちが優雅に羽を休めていた。

雄大なコントラストに、四人はしばしの間見とれた。

「白鳥か……」善之は、幼いころの記憶を思い起こしていた。母に連れられて旅行をしたときの記憶であった。あれは、まだ自分が小学生の頃のことだったのであろうか。

目の前に大きな湖が広がり、水面に水鳥たちが戯れる。その中でも、ひと際優雅な姿を映し出していたのが白鳥であった。上空から静かに舞い降り、白い羽をすぼめながら着水する。その後、湖を支配する王者のような風格で、湖面の緩やかな流れに乗りながら水面と戯れる。幼い善之の目が、吸いこまれるようにその姿を追った。

「あれはね、白鳥っていう鳥なのよ」善之の顔を覗きこんだ母が、白鳥という種類であることを口にした。

「ハクチョウ？」

「そう。白鳥はね、夏は外国で暮らして、秋から冬になると、こうやって日本に飛んでくるのよ」

「へえ、外国から飛んで来たんだ。でも、なんで外国からわざわざ日本にやってくるの？」

「冬を越すためよ。外国の冬はとても寒いでしょ。だから、寒いときは、温かい日本にやってくるの」

「そうなんだ」

善之の脳裏に、母と交わした幼き日の会話が断片的に甦った。目の前の池が幼き日の記憶の中の湖へと変わり、次々と白鳥が舞い降りてくる。

「そろそろ予想しようぜ！」第一レースの予想を促す仲間の声に、善之は我に返った。

京都競馬場は、朝から盛り上がりを見せていた。時間が経つにつれ、屋外スタンドを覆い尽くす観客の数が増える。

四人もレースを楽しんだ。馬券を握りしめ、周囲の観客とともに熱い声援を送る。第四コーナーを回り直線コースに入ってきたサラブレッドたちが、騎手の鞭に答えて懸命に最後の力を振り絞る。四人の目の前を、サラブレッドが一団となって駆け抜け、ゴールになだれ込む。レースごとに、四人は興奮を味わった。

そして天皇賞の時間がやって来た。四人ともメインレースで大きく勝負するタイプであり、そ

れ以外のレースでは少額ずつしか馬券を購入していなかったが、それでも四人が四人とも負け越していた。あともう一步のところで馬券を外してしまうレースが続いていたのだ。

「よし、天皇賞は絶対取るぞ！」山村が、こぶしを握りながら声を張り上げた。山村は、四人の中で一番大きく負け越していた。天皇賞では、密かに穴馬を狙っているようだった。

「結局、どうしたんだよ？」佐山が、山村の馬券の中身を詮索した。

「サウスエンブレムからの三連単で勝負。⑬や⑮あたりが絡んでくれたら嬉しいんだけどな」サウスエンブレムは五番人気の馬であり、山村の希望通り⑬か⑮が馬券に絡んだ場合かなりの高配当になる。

「お前は、なに買ったの？」川本が、佐山の馬券を覗き込む。

「オレはスーパー軸」

スーパーとはスーパーエクシードという馬のことであり、今回の天皇賞でも堂々の一番人気におされていた。細かい計算が得意な佐山らしく、どの馬券が的中しても同じような払戻金額になるように買い目ごとの購入金額を設定していた。

川本は、レインボーファイターという人気薄の馬を中心とした馬券を買っていた。山村が軸にした馬よりもさらに低人気の馬であった。的中すれば、どの馬券が入ってもそれなりの配当になると川本は力説した。

「お前は？」川本が善之の馬券を覗き込んだ。

「オレはサニーガーデンから」善之は、三人の目の前に購入した馬券を掲げた。

「理由は？」

「また名前で選んだんじゃないのか？」

三人が、善之のことを茶化す。

彼らの言う通り、善之は名前で馬を選ぶことがあった。考えても閃かないときは、好きな名前の馬から買う習慣がついていたからだ。

今回の天皇賞も、善之には難解に映った。ビッグレースであり、出走馬たちはいずれも実績のある馬ばかりである。出馬表を眺めながら目移りした善之は、サニーガーデンという温かそうな響きに惹かれて、その馬を軸とした馬券を購入した。

「名前で選びました。それがなにか？」善之は、三人に対しておどけた表情を向けた。

ファンファーレが鳴り天皇賞のゲートが開いた。十八頭の出走馬たちが、一斉にゲートを飛び出し、隊列を組む。

天皇賞は三千二百メートルの距離を走るレースであり、芝コースを一周半走る。

向こう正面のスタート地点から第三コーナー、第四コーナーと回ってきた馬たちが、隊列を守りながら一周目の直線コースに入ってきた。四人の目の前を十八頭の馬が駆け抜ける。屋外スタンドを埋め尽くした観客から声援が湧き上がった。ゴール板を通過した十八頭の姿が、第一コーナーから第二コーナーへと小さくなっていく。

観客たちの視線が、正面の巨大ビジョンに移った。巨大画面に、第二コーナーを回り向こう正面に差し掛かった馬たちの姿が映し出される。長丁場であり、依然として隊列は乱れない。先頭

集団を走る馬たちは、余力を残そうとしてペースを落ち着かせる。後方集団の馬たちも、直線での最後のラストスパートに備えて脚を貯める。

やがて十八頭が、二周目の第三コーナーに差し掛かった。二番人気の馬が動き始めた。それにつられたように何頭かの馬がペースを上げる。京都競馬場の第三コーナーには傾斜のきつい上り坂と下り坂が設けられており、その坂を利用してスパートをかけてくる馬もいた。

たちまち隊列が崩れた。一番人気のスーパーエクシードはまだ動かない。鞍上の騎手が、がちりと手綱を押さえている。

坂を下り切った十八頭が第四コーナーに差し掛かった。そのままカーブを曲がり、最後の直線コースに足を踏み入れる。

ゴール板を目指したデッドヒートが繰り広げられた。先頭集団を走っていた馬たちが、ずるずると後退する。その合間を縫うように、レインボーファイターが先頭に躍り出た。川本が軸にした馬である。

「そのまま！ そのまま！」川本が、渾身の声を張り上げた。「行け！ 差せ！」他の三人も、負けじと声を張り上げる。周囲を埋め尽くす観客たちからも歓声が湧き上がった。屋外スタンド全体がゴーツという大きな声援で覆われる。

先頭に踊り出たレインボーファイターを追うように五頭の馬が差してきた。その中には、サウスエンブレムもスーパーエクシードもサニーガーデンもいた。それぞれが軸にした馬である。そんな中、六頭の馬がもつれるようにゴール板を駆け抜けた。

レース結果は写真判定に持ち込まれた。優勝したのは一番人気のスーパーエクシードであり、掲示板の第一着の位置に馬番号が点滅していた。第二着から第五着までの位置に、写真判定中であることを示す写の文字が点滅する。観客たちは、固唾をのんで結果が出るのを見守った。善之たち四人も、手の中で汗を握りながら結果が出るのを待った。四人ともに的中する可能性があったからだ。

レース終了から五分が経過したが、結果が発表されない。観客たちの間にざわめきが広がる。

そしてついに、待ちに待った結果が確定した。第二着の位置にはレインボーファイターの馬番号が点滅し、第三着の位置にはサニーガーデンの馬番号が点滅した。川本と善之が馬券を的中させた。佐山も優勝したスーパーエクシードを軸にした馬券を買っていたのだが、第二着に入った人気薄のレインボーファイターを買っていなかった。

巨大ビジョンに、払戻金額が映し出された。川本と善之が買っていた三連単馬券の配当欄に二十五万八千円という数字が表示される。それぞれの的中馬券を百円ずつ購入していた二人の懐に、二十五万八千円という大金が転がり込んできた。

3.

「ゴチになります」

「同じくゴチになります」

山村と佐山が、早々と今晚の宴席は川本と善之の奢りであることを宣言した。

「任せなさい！」

「普段食べられないようなものを食べようぜ！」

川本と善之が、胸を張りながら言葉を返す。

その日の夜、京都河原町のとある京懐石料理店の個室に四人の姿があった。二人が天皇賞で大勝ちしたことを受けて、旅の思い出に二人の奢りで京懐石料理を堪能することになったのだ。四人は、一番高い一万五千円のコース料理を注文した。それとは別に酒も注文し、個室の中で盛り上がる。話題は、今日の天皇賞から始まった。

山村が、やたらと悔しがった。「なんでハナ差なんだよ……」山村の軸馬のサウスエンブレムは、善之の軸馬であったサニーガーデンとの写真判定に敗れ四着となってしまった。三着までに入らないと馬券の対象にはならない。ハナ差というのも一番小さな着差であり、まさに紙一重の結果であった。サウスエンブレムが三着に入っていれば、山村一人が的中していた。配当も三十万円を超える金額であった。

山村が、顔をしかめながら目の前のビールを飲み干す。「お代わり！」勢いよく、山村がジョッキを善之に差し出した。

「もっとゆっくり飲めよ。これから料理がどんどん出てくるんだぞ！」善之が、笑いながら山村のことをたしなめる。

「奢ってやるけど、潰れるのだけは止めろよな」川本も、笑いながら釘を刺した。

「わかっているよ」山村も、空のジョッキをテーブルに置きながら言葉を返した。

コース料理が進んだ。高い食材を使った上品で独創的な料理が、次々と四人のもとに運ばれてくる。四人が、舌鼓を打ちながら京懐石料理を堪能する。料理のおいしさが酒を進めた。

山村の表情が怪しくなった。異様なテンションで声を張り上げる。

「ホテルにチェックインするときの年齢、ごまかしておくべきだったかな？」川本が、言葉を発した。四月生まれの善之はすでに二十歳になっていたのだが、他の三人はまだ十九歳である。四人とも、ホテルの宿泊カードに本名と実年齢を記入していた。あまりにも泥酔した状態で帰ると、ホテルの人間が良い顔をしないのではないかという懸念から出た言葉であった。

「だよなあ。飲み過ぎちゃうとやばいよな」善之も同調する。

そのとき、山村が声を張り上げた。

「んなこと言ったって、そもそもほんとうは馬券も買っちゃいけなかったんだから、酒くらい、なんてことないって！」意味不明な解釈ではあったが、本来馬券が買えないことも事実であった。未成年者は、法律上馬券を買うことが禁止されていた。

「なにも問題を起こさなかったらいいんだよ」川本が、強引に話をまとめる。その話題はそこで終わりになり、四人の間で次から次へと話題が移り変わった。

「うちのお袋さあ、うざいことばかり言うんだよ」佐山が口にした。

「なんだよ、うざいことって」川本が聞き返す。

「今回旅行に行くって言ったらさあ、メールでもいいから、一日一回状況連絡しろなんて言いやがるんだよ。だれがそんなことするかよ。子どもじゃないんだし」佐山が声を張り上げる。

「いいじゃん、メールくらいしてあげろよ。お袋さん、お前のことが心配なんだよ」山村も、

声を張り上げた。川本や善之も、山村に加勢する。

佐山は一人っ子であった。しかも、母親が三十七歳のときに生まれた子どもである。母親が気にかけるのも無理はなかった。三人の声に押された佐山が、しぶしぶメールを打ち始める。佐山の動きにつられたように、三人も、懐から携帯電話を取り出し、画面を覗く。

善之の携帯電話に、一通のメールが届いていた。麻子からのメールであった。旅行を楽しんでいるかと問いかける文面であった。しばしの時間、善之がメール画面に目を当てながら、返信メールの文章を思案する。

そのとき、川本がメール画面を覗き込んできた。

「誰からのメールだよ？」はやし立てるように声を張り上げる。

「新しく彼女ができたのか？」山村や佐山も寄ってくる。

「違うよ！」慌てたような口調で善之が否定した。

「でもハートマークとかあるし、どう見ても男から来たメールじゃないんだけどな」川本が、追及の手を緩めない。

「妹からだよ」善之は、妹からのメールであることを説明した。

善之の家庭環境のことを三人は知っていた。一歳年下の妹がいるということも三人には話してある。

三人からは、なぜ一緒に住まないのかということは何度も聞かれた。お互いに親を亡くし寂しい思いをしているのであり、一緒に暮らしたほうが寂しさがまぎれるのではないのかという考えからであった。

それに対して善之は、もともと別々の家庭で暮らしてきた兄妹であり、生活習慣なども異なるため、

別々に暮らしたほうが互いに気を使わずに済むからだという理由を口にした。実際に麻子がどのように思っているのかはわからなかったが、善之は、麻子もそのように感じているのではないかと思っていた。

「なあ、妹さんの写真を見せてよ」佐山が、善之に体を寄せてきた。

「オレも見たい」山村と川本も体を寄せてくる。

善之は、携帯電話のデータフォルダーに保存してある麻子の写真を開いた。一番最近の写真は、ぬいぐるみを抱いた写真であった。

麻子は、四月二十日に十九歳の誕生日を迎えた。善之がぬいぐるみをプレゼントしたのだが、そのときの写真であった。善之が、携帯電話の画面を三人に向けながら、麻子の姿が写った写真をゆっくりとスクロールしていく。

三人が、写真を覗き込んだ。「うっそ、めっちゃ可愛いじゃん！」佐山が言葉を発した。山村や川本も、可愛いという言葉で連発する。

三人が、データフォルダーの写真を見終わった。善之が携帯電話を閉じる。

「妹さんって、彼氏いるの？」佐山が問いかけてきた。

「さあ、よくわからないけど。でも、彼氏がいるとかっていう話は聞いたことないなあ」善之は言葉を返した。

善之と麻子は、互いのプライベートのことも口にしていた。ついこの間まで善之には彼女がいたが、そのことも麻子には話していた。彼女に贈るプレゼントのことをアドバイスしてもらったこともある。しかし、麻子の口から付き合っている彼氏がいるという話を聞いたことはなかった。

善之の返事を耳にした山村が問いかけてくる。

「お前が知らないだけで、ほんとうは彼氏がいるんじゃないのか？」

「もし彼氏がないんだったら、オレに紹介してよ」半ば真剣なまなざしで川本が言葉を重ねる。

「オレも会ってみたい」佐山も、紹介してほしいという言葉を出した。

その場の雰囲気、麻子と合わせろという雰囲気に包まれる。

「そのうちにな……」善之は、三人に向かって言葉を返した。

「そうだ。店の人にオレたち四人の写真を撮ってもらって、妹さんに送って見たらどうだ？」川本が善之を促した。

「ついでに、佐山のお袋さんにも送らしましょう」山村が、話しに乗っかってくる。

善之と佐山は顔を見合わせた。

そのとき、タイミングよく店員が四人の個室にやってきた。すかさず川本が、写真のシャッターを押してほしいことを願う。カメラは善之の携帯電話が使われた。フレームに四人が収まり、店員がシャッターを押す。

善之は、写真を三人の携帯電話に転送した後、麻子に対する返信メールを打ち込んだ。京都市内観光をしたことや京都競馬場へ遊びに行き天皇賞を大勝ちしたこと、そして京懐石料理を食べながら仲間と酒を飲んでいることを文章にした上で、四人で撮った写真を添付し送信する。

「こいつら、本気で言ってそうだな」麻子と合わせるとせがんできた三人の言葉を善之は思い返した。彼の知る限り、三人とも彼女はいない。

「三人のうちの誰かと麻子が付き合うようになったとしたら、なんか変な感じだよな……」善之は、胸の中で呟いた。適度に酔いが回った頭の中で、三人のうちの誰かから「妹さんと結婚させてください」と頭を下げられ、どうしたらよいかかわからずにいる自分の姿が浮かんでいた。

4.

翌朝、ホテルを出た四人は神戸に移動した。JRの京都駅から新快速電車に乗り三ノ宮駅で降りる。

神戸の街は、若者たちであふれ返っていた。京都の街は、古都としての風格を保ちながらシックな雰囲気の中で国際観光都市としての賑わいを演出していたが、神戸の街は、港町らしい異国情緒あふれるモダンな雰囲気の中で垢抜けた賑わいを演出していた。

四人は、どこか横浜と似たところのある神戸の街歩きを楽しんだ。

その後大阪に移動し、二日間かけて上方芸能や浪速の食文化などを満喫した四人は、大阪駅前のバスターミナルから夜行バスに乗り、予定通り五月三日の早朝に東京に到着した。

新宿駅前に到着したバスから降りた四人は、そこで解散した。それぞれ帰る方向が異なるか

らだ。

三人と別れた善之は、自宅へと向かう電車に乗った。寝不足もあってか、頭と体が重い。帰りの夜行バスの中は、ゴールデンウィークの後半四連休を利用して東京方面へ遊びに行く若者たちでいっぱいであり、熟睡できなかった。

今日は、午後から麻子と墓参りに行く約束をしていた。午後二時に、墓地の最寄り駅で待ち合わせることになっている。善之は、一分でも長く仮眠時間を確保すべく家路を急いだ。

けたたましいベルの音で善之は目覚めた。枕元の目覚まし時計は、昼の十二時を告げていた。仮眠を取ったせいか、頭の中はすっきりしている。

ベッドの上に胡坐をかき二つ三つ顔をたたいた善之は、顔を洗い外出着に着替えた。駅前の牛井店で昼食を済ませ、新宿方面へ向かう地下鉄に乗る。新宿からはJR線に乗り換え、武蔵境駅を経由して、西部多摩川線の多磨駅で降り立った。

改札口の外には、麻子の姿があった。改札の内側から麻子に向かって手を振る。善之の姿に気が付いた麻子も手を振りかえしてきた。

駅前の商店でお供えの花と線香を買った二人は、墓地に向かって歩き出した。両親の眠る墓は、多磨駅から歩いて十分ほどのところにある。この界限は、新しく区画開発された墓地が多い。

二人がこの墓地を選んだのは、永代供養を謳い文句にしていることや宗教不問であることに加えて、霊園内の随所に季節の花が植えられたガーデニング霊園をコンセプトにしていたからであった。霊園は、いつ来ても明るい雰囲気にもまれていた。霊園内の清掃も行き届いており、枯れた花や線香の燃えカスが放置された墓は一つとして存在しない。

二人の父親の桜川善正は綺麗好きな人間であった。麻子の母親の敏江も花が好きであり、このような両親が眠るのに最適な墓であった。

善之が墓石を洗い、麻子が花立てに花を供える。線香に火をつけた後、二人は墓石に向かって手を合わせた。心の中で天国の両親に向かって語りかける。善之は、健康な毎日を過ごしていることや麻子と仲良くしていることを語りかけた。

祈りを終えた二人は、墓を後にし、多磨駅の方向に向かって歩き出した。西部多摩川線に乗り、武蔵境駅で下車する。このまままっすぐ帰るのであれば、新宿方面に向かうJR線に乗り換えである。

「お茶でもしていくか？」善之は、麻子に声をかけた。

「うん」麻子が頷く。

二人は、武蔵境駅前のカフェに入った。ケーキと紅茶のセットを二人分注文する。

「もう、あれから二年も経ったんだな」善之が呟いた。

「そうね」麻子も小さな声で答える。

あっという間の二年間であったと善之は感じていた。麻子の表情からも、そのように感じることが窺える。

「お父さんとお母さんに、なんて話しかけたの？」善之が、祈りの内容を麻子に問うた。

「ちゃんとした毎日を過ごしていますってということと、お兄ちゃんと仲良くやっていますって

ことくらいかな。お兄ちゃんは、どんなことを話したの？」

「全く同じ」

「へえ、そうなんだ」二人は、顔を見合わせながら笑った。

二人は、目の前の紅茶のカップに手を伸ばした。口の中に、レモンの酸味のしみた紅茶の香りとコクが広がる。二人は、同じようなタイミングでカップを置いた。麻子が、善之に向かって語りかける。

「旅行、楽しかった？」

「まあな」善之は頷いた。

「どんな旅行だったの？ 詳しく教えてよ」麻子がせがむ。

「どんなんて言われてもなあ……。じゃあ、最初から話そうか」そういうと、善之は、順を追って旅の思い出話を聞かせた。京都市内巡りのときは移動のバスの中が常に観光客で一杯だったことや街の至る所で外国人の姿が多く見られたこと、神戸では海側も山側も異国情緒あふれる街並みが一杯で外国にいるような気分がしたこと、大阪では漫才のような関西弁があちらこちらに飛び交っていたことや食べ物がおいしかったことなど、それぞれの地における思い出に残る話を口にする。

「へえ、そうなんだ」、「おもしろい」などと言葉を挟みながら、麻子が善之の話に耳を傾ける。

善之は、京都競馬場の話も聞かせた。四人でレースに熱中したことを熱く語る。競馬は楽しいということを何度も口にした。

「競馬って、そんなに楽しいんだ」麻子が、競馬に興味を示す。

「オレも競馬を始めて一年しか経っていないけど、こんなに楽しいものだとは思わなかったなあ」

善之は、一年前に山村に連れられて競馬場に行ったときのことを思い返していた。最初は競馬場に対して鉄火場のようなイメージを抱いていたのだが、実際は綺麗かつオシャレで、若者でも充分楽しめるところであるということを目の前の麻子に口にする。懸命に馬券を予想し、ダイレクトにレースを観戦している中で、予想した馬券が的中したときの爽快感は格別であるということも力説した。

「私も競馬場に行きたいな」麻子が、甘えるように口にする。

「連れて行ってやろうか？」

「ほんとうに！ 行きたい。ねえ、ゴールデンウィーク期間中って、競馬はやっているの？」

「やっているよ」

ゴールデンウィークの後半は、五月五日と五月六日に東京競馬場で競馬が開催される。連休最後の二日間であった。

善之が、そのことを麻子に告げた。麻子が競馬場に行きたがる。

「行くとしたら、どっちがいい？」善之は聞いた。麻子の予定がわからなかったからである。

「どっちでもいい」麻子が答える。

「じゃあ、五月六日にしようか。その日も大きなレースがあるんだ」五月六日は、東京競馬場

でNHKマイルカップという大きなレースが開催されることになっていた。三歳の若駒たちによって争われるレースであった。

「うん、そうしよう！」麻子が、はしゃいだように返事をする。

こうして、二人の間で、五月六日に東京競馬場へ遊びに行く約束が交わされた。

5.

五月六日、好天の空の下、東京競馬場で競馬が開催された。朝早くから、たくさんの観客が競馬場に詰めかけた。

善之と麻子も、午前九時半に府中競馬正門前駅に到着する電車で競馬場に乗り込んだ。競馬場と直結している地下道を通り、正門ゲートをくぐり抜ける。二人の目の前に、東京競馬場の全景が広がった。

「広い！」麻子が、キョロキョロと周囲を見回しながら声を張り上げる。東京競馬場は、広いことで有名な競馬場であった。

競馬場では、すでに第一レースに出走するサラブレッドたちがパドックを周回していた。パドックに向かう人の流れが二人を包み込む。善之は麻子を促し、人の流れとは反対方向へと歩みを進めた。

「馬に乗ってみるか？」善之は、並んで歩く麻子に声をかけた。

「えっ、乗れるの？」

「うん」

東京競馬場には無料の体験乗馬センターがあった。午前の部と午後の部に分かれており、いずれも先着順で馬に乗ることができる。善之は、麻子の手を引きながら乗馬センターに誘導した。

乗馬センターには、すでに乗馬を体験してきた人たちが列をなしていた。体験乗馬は、係の人に曳かれた馬の背にまたがり馬場内を一周するものであった。乗馬用の馬は、いずれも現役を引退したサラブレッドである。

二人も列に並んだ。周回を終えた体験者が下馬し、次の体験者が馬の背にまたがる。馬場内では、六頭の曳馬が等間隔で周回していた。

やがて、二人の順番が回ってきた。係りの誘導に従って順番に馬の背にまたがる。馬が、ゆっくりとしたスピードで歩き出した。前に行く麻子が後ろを振り向いた。大きく目を見開いた顔を善之に向ける。馬に乗るのは初めてであるということであり、興奮しているのだろう。

馬場を囲む柵沿いに馬が歩みを進める。スタート地点に戻ってきた二人は、馬から降りた。

「乗馬って、ものすごく気分爽快！」麻子が、余韻の言葉を口にする。

「次は博物館に行こうか」善之が、博物館を指差した。

体験乗馬センターから歩いてすぐそばのところに、競馬博物館があった。館内には、競馬に関する様々な写真や資料などが展示され、映像が流されていた。競馬が初めての人でも、競馬の魅力を感じ取ることができるような仕掛けが施されている。

二人は、館内を見学した。馬の写真を展示したギャラリー展の前で麻子が足を止めた。そこには、ホースフォトグラフ専門のカメラマンたちの作品が展示されていた。牧場で戯れる馬の

姿や仔馬が出生するシーンを写した写真など、躍動的な作品が並べられている。

「馬って可愛いでしょ」善之は、麻子に視線を向けた。

「うん。特に目が可愛い」麻子も、目元を緩める。

二人は、時間をかけて、すべての展示を見終えた。

競馬博物館を出た二人は、ショップコーナーに足を踏み入れた。ショップには、競争馬に関する様々なグッズやぬいぐるみなどが売られている。

「可愛い、これ！」馬名入りのゼッケンを付けたぬいぐるみを手に取った麻子が声を上げた。ぬいぐるみが好きな麻子の寝室は、様々な動物のぬいぐるみで埋めつくされている。

「欲しいぬいぐるみがあったら買ってあげるよ」善之は声をかけた。

「ほんとうに？ どれにしよう……」麻子が、迷った表情を浮かべながら、ぬいぐるみを見比べる。

やがて、麻子が一体のぬいぐるみを手にした。五年前に現役を引退した有名な競走馬のぬいぐるみであった。善之が、レジでぬいぐるみを購入する。

「ありがとう」麻子が、善之からぬいぐるみを受け取った。

「腹減らないか？」善之が声をかける。

「うん、お腹すいた」麻子も、空腹を覚えていた。

二人は、屋内スタンド内のカフェテリアに足を向けた。焼き立てパンと特性ヒレカツサンド、ドリンクを注文する。

二人は、テラス席に腰を下ろした。眼下にパドックが見渡せるテラス席であった。

「競馬場って楽しい」パンを頬張りながら麻子が口にする。

麻子の頭の中で、競馬場に着いてからの行動が思い返されていた。乗馬を楽しみ、競馬博物館を見学し、ショッピングもした。今までの競馬場のイメージとは程遠い世界が、そこにはあった。

「でも、まだ肝心の馬券は買ってないよ」善之が、笑いながら言葉を返す。

「ねえ、馬券の買い方教えて」麻子が、善之の顔を覗き込んだ。

「いいよ、教えてあげる。いろいろな買い方があるんだけど、まず一着に来る馬を当てる買い方、これって単勝って言うんだけどさあ……」善之は、テーブルの上に競馬新聞を広げながら、馬券の種類と内容を一つ一つ説明した。麻子が頷きながら、わからないところを聞き返す。善之も、実例を上げながら馬券の買い方を説明した。

「大体わかった」麻子が、説明を理解したことを口にする。

「じゃあ、昼から馬券に参戦するか？」

「うん」

午後のレースから、二人は馬券を買うことにした。

屋外スタンドには、柔らかい春の日差しが降り注いでいた。暑くもなく寒くもなく、ちょうど心地よい気候であった。

二人は、馬券を懐に忍ばせレースを観戦した。目の前のコースをサラブレッドたちが疾走する

。初めて馬券を買った麻子も、自分が選んだ馬に声援を送っていた。善之の声援にも力が入る。

「当たったかも！」麻子が歓声を上げた。単勝と複勝を買った馬が一着でゴールを駆け抜けていた。単勝は一着になる馬を当てる馬券であり、複勝は三着以内に入る馬を当てる馬券であった。指名した馬が一着に来たことにより、両方の馬券が的中した。

「よかったなあ！」善之が麻子の馬券的中を喜ぶ。

麻子が的中馬券を換金した。自動払い戻し機から三千三百円の現金が吐き出される。元手は六百円であり、二千七百円の儲けであった。

「今度は、違う種類の馬券を買ってみようかな」払戻金を手にした麻子が、言葉を発した。

メインレースの時間を迎えた。NHKマイルカップである。

麻子は、あれからもう一レース的中し、収支はプラスの状態であった。善之は一つも的中していない。

「このレースは絶対に当ててやるからな！」善之が力を込める。

「ねえ、この馬とこの馬、どっちが強いと思う？」

「うーん、オレ的にはこっちの馬だと思うけど、でも今日のオレ勤が冴えてないから、あてにしないほうがいいよ」

「うん、じゃあこっちの馬にする」麻子が、善之が口にしたのとは違うほうの馬を指差した。その馬を軸とした馬単馬券を購入するということであった。馬単馬券とは、順位も含めて一着と二着の馬を当てる馬券である。善之も、自分が口にした馬を軸にした馬券を購入した。

東京競馬場内に、NHKマイルカップのファンファーレが鳴り響いた。場内に、ウォーという歓声が鳴り響く。ビッグレース特有の光景である。

ゲートが開き、十八頭の馬が一斉にスタートを切った。向こう正面を一団となって疾走する。天皇賞のときとは異なり距離が短いため、隊列も短くペースも早い。

あっという間に、十八頭が第四コーナーのカーブに差し掛かった。あとは、五百二十五メートルある長い直線でのデットヒートであった。

先頭を走っていた馬が、内堀沿いに粘り腰を見せた。外から覆いかぶさるように、七、八頭の馬が一団となって追い出す。場内が、耳をつんざくような声援に包まれた。ゴールが迫る。善之の軸馬は後方のままだ。

「だめだ！」善之は、諦めたような声を張り上げた。

そのとき、内堀沿いからすると一頭の馬が脚を伸ばしてきた。麻子の軸馬であった。その姿を見た麻子が、「お願い、来て！」と声を張り上げる。

そしてレースが終了した。優勝したのは、麻子の軸馬であった。

「ひょっとして、私当たり？」麻子が、善之に馬券をかざした。二着に入った馬の馬番も馬券に表示されている。

「おめでとう」善之が、的中していることを告げた。

「やったあ！」麻子が、歓声を張り上げる。

やがて払戻金が発表された。二着に入った馬が人気薄であり、馬単馬券は二万八千五百円とい

う配当が表示された。麻子は的中馬券を二百円分購入しており、五万七千円の払い戻しであった。

払戻金を受け取った麻子の顔は上気していた。

6.

東京競馬場を後にした二人は、池袋駅に隣接するデパートの中のイタリアンレストランに立ち寄った。

池袋までは帰る方向が同じであったが、そこから先は方向が異なる。善之は西武池袋線の練馬駅から徒歩五分の分譲マンションで暮らしており、麻子はJR埼京線の板橋駅から徒歩十分の賃貸マンションで暮らしていた。

飛行機事故の後、麻子は両親と暮らしていた家を引き払い、今のマンションに引っ越した。両親の温もりや持ち物が残ったままの家に一人で暮らすことが耐えられなかったからであった。そのとき、両親の持ち物の大部分を処分した。善之も、持ち物の中から桜川善正の形見を分けてもらっていた。

レストランのテーブルに着いた二人は、料理を注文した。パスタやアラカルト料理など、それぞれが食べたい料理を注文する。

「ワインでも飲むか？」善之が問いかけた。

「飲む」麻子が首を振る。

善之は、ワインのフルボトルを注文した。注文したボトルがテーブルに運ばれ、店員の手で二人のグラスにワインが注がれる。

「じゃあ、とりあえず麻子の競馬デビューに乾杯」

「乾杯」

二人は、グラスを口に運んだ。一口、二口、ワインを喉に流し込み、グラスをテーブルに置く。

「どう、競馬楽しかった？」善之が話しかけた。

「うん。すごく楽しかった」麻子が、今日一日を楽しめたことを口にする。

二人は、今日のレースを思い返しながら、レース回顧に花を咲かせた。麻子も、自分の軸馬が最後に内堀沿いをするすると抜け出してきたときの興奮を思い返していた。

二人の会話が、レース回顧から日常的な話題へと移り変わった。明日から大学の授業が再開することについて口にしよう。二人とも、一限目から出席しなければならなかった。

「なんだか、授業に出る気がしないなあ」善之がぼやいた。九連休にしてしまったため、頭がすっかり連休ボケしてしまっていた。

「私も」麻子が言葉を合わせる。

麻子も、連休の合間こそ授業に出席したが、その後の四連休で気分がすっかり休みモードに染まっていた。

「麻子は、一限目って、なんの授業なの？」

「一限目は、たしか基礎会計学だったかな」麻子は、都内のとある私立大学の商学部に通って

いた。

「お兄ちゃんは？」

「オレ、英語」善之が、嫌そうに顔をしかめる。

善之は、英語が大の苦手であった。しかし企業の世界進出が進んでいる今日、英語のマスターは必須だった。

「この間旅行に行ったときもさあ、京都で外国人に道を聞かれちゃって参っちゃったよ……」善之が、旅先で外国人に道を聞かれて往生したときのことを口にした。道を聞いてきた外国人も日本語が不慣れならしく、片言の日本語で話しかけてきた。聞かれている意味はなんとなく理解できたのだが、英語で答えようとしたときに、どのように言葉を返せばよいのかがわからなかった。目で救いを求めてきた善之に対して、四人の中で唯一英語の得意な山村が受け答えをし、道を教えることができた。善之は、そのときのシーンを昨日のこのように思い返していた。

「へえ、そんなことがあったんだ」麻子が、善之の話に耳を傾ける。

「旅行のときの話、もっといろいろと聞きたいな」という麻子のリクエストに答えて、善之は、旅行の思い出話を語った。京都駅前バスを降りた後のできごとを、携帯電話に保存した写真を見せながら、順を追って説明する。写真には、三人の友人たちの姿も収められていた。

「そういえばさあ、京都で飲んでいるときに麻子の写真を見せたら、みんなが一度会わせろってうるさくってさあ」

「ひょっとして、四人で映っている写真を送ってきたとき？」

「そう。店員さんに撮ってもらったんだけどね」

「へえ」

「特にこいつがうるさくてさあ」善之が、川本の顔を指示した。三人の中でも、特に川本が麻子に対して興味を示していた。

「どうしよう。明日会ったとき、また会わせろって言われたら……」善之が、不安を口にする。

「麻子、そんなの嫌だよな？」

「別に、嫌ってわけじゃないけど」

「どうせだったら合コン形式がいいかな。こっちは四人とも彼女がいないから、麻子が彼氏のいない友達を三人誘ってきてさ。ていうか、ちなみに麻子って、今彼氏はいるんだっけ？」

「いない」麻子が首を振った。

「へえ、そうなんだ。てっきりいるのかなって思っていたんだけど。じゃあ、もしあいつらが会わせろって言ってきたら、合コン協力してくれないか？」

「わかった。彼氏のいない友達もいるから」

食事を終えた二人は、池袋駅に向かった。西武池袋線の改札に到着する。善之が、懐から通学定期券を取り出した。

「じゃあ、またな」善之が、麻子に声をかけた。

「うん」麻子が頷く。

「また適当に連絡するから」

「私も」

「気をつけて帰れよ」

「はい」

善之が、改札口に向かって歩き出す。

改札内に入った善之が、後ろを振り向き、軽く手を振る。麻子も、手を振り返した。

再び前を向いた善之が人混みにのまれた。

麻子は、立ちつくしたまま、じっとその後ろ姿を目で追いつけていた。

7.

翌日、善之は気だるさを抱えながら登校した。一緒に旅行をした三人も、気だるそうな表情を隠せずにいる。「よう」、「おう」四人が短い言葉で挨拶を交わす。

一限目の授業が始まった。善之の苦手な英語だった。教壇に立った講師が、小難しい英文法の説明を始めた。善之の目が重くなる。必死に授業についていこうとするのだが、彼の意思に反して頭は睡魔を受け入れていた。

午前の授業が終了した。学生たちが、勢いよく立ち上がり教室を飛び出す。待ちに待った昼食休憩であった。

善之も、教材を鞆の中にしまった。席から立とうとしたそのとき、誰かが肩を叩いた。善之が顔を向ける。目の前に川本が立っていた。

「ちょっと相談したいことがあるんだけど、二人で飯行かないか？」川本が、相談したいことがあるということをする。

「いいよ」善之は応じた。

二人は、大学から少し離れた所にある定食屋に入った。夜は居酒屋を営んでいる店だった。ボリュームがあって味も美味しいのだが、大学から離れているせいか、足を向ける学生はほとんどいない。

二人は日替わり定食を注文した。ほどなく定食が二人のテーブルに運ばれた。二人が、黙々と定食に箸をつける。

やがて、二人は定食を食べ終えた。定食とセットになったコーヒーが運ばれてくる。一口コーヒーをすすりカップを置いた善之が口を開いた。

「ところで、オレに相談したいことがあるって、なんだよ？」

「うん……」川本は口ごもった。

善之は、川本がしゃべり出すのを待った。しばらくして、意を決したような表情を浮かべながら川本が口を開いた。

「あのさあ、実はお前の妹さんのことなんだけどさ、できたら一度会いたいなと思って」

「ああ、その話ね」善之は、昨日麻子と食事をしたときに仲間から会わせろと言われたことを話したときのことを思い返した。そのときは三人全員に会わせることを想定し、合コン形式で対

応することを考えていた。しかし、予想に反して川本一人が個別に話を持ちかけてきた。

「こいつ、マジだったのかよ」と心の中で呟いた善之は、川本に返事をした。

「別にいいけどさ」

「そうか」川本が、嬉しそうな表情を浮かべる。

「ひょっとして、マジに好きになった？」善之が、川本の顔を覗き込んだ。

「まあ、なんというか、可愛いなと思ってね……」川本が、照れたような表情を浮かべる。

「たしかにな」善之も頷いた。麻子は、善之の目にも可愛く映っていた。しかも、見た目が可愛いだけではなく、内面的な可愛らしさも際立っていた。

「聞きたいんだけど、妹さんって、付き合っている人いるの？」川本が、真剣な眼差しで問いかけてくる。

「いや。実は、昨日一緒に食事したときにそのことを聞いてみたんだけど、彼氏はいないって言っていたよ」

「そうか……。ちなみに、妹さんのタイプってわかるか？」

「さあ。悪いけど、そこまではわからないな」

「そうだよな。普通、兄妹でそんな話しはしないよな」

「まあな」

「それじゃあ、オレに協力してくれるか？」

「いいよ、オレにできることだったら」

「具体的に、どうしたらいいのかな？」川本が、善之の顔を覗き込んだ。善之の協力を取り付けたものの、具体的にどのような形でアプローチをすればよいのか頭に浮かばなかったからだ。

「そうだな……」善之も思案顔になる。

「いずれにしても、いきなり二人きりで会うのは上手くいかないだろうからな。だから、最初はオレとお前と妹の三人で会って、そこでいい雰囲気になったら、お前が妹の連絡先を聞き出してさ、それで後日二人で会えばいいんじゃないのかな」善之は、二人で会うきっかけ作りのために最初は三人で会うことを提案した。川本が、その考えに賛同する。

「三人で会うとして、どのようなシチュエーションがいいのかな？」川本が、再び善之の知恵を借りにきた。

「そうだなあ、三人で遊園地っていうのも変だしなあ。いきなり食事っていうのも、なんだか見合いみたいで緊張しちゃうし……。そうだ、東京ドームのナイター観戦なんかいいかもしれないな。たしかお前、ジャイアンツファンだっただろう？」

「うん」

「オレもそうなんだけど、妹もジャイアンツファンなんだよ。だから、ジャイアンツファン同士で東京ドームのナイターを見に行こうっていう話だったら、スムーズに行くかもしれないな」

「うん、それで行こう。頑張ってチケット取るからさあ」

「今度の東京ドームの巨人戦っていつだっけ？」

「ちょっと待ってよ」川本が、モバイルサイトを検索した。

「来週の金土日だ。まだチケットも残っている」川本が、声を張り上げる。

「じゃあ、店出たら妹の都合聞いてみるよ」善之が返事をし、二人は店を出た。

店を出た善之は麻子に電話を入れた。電話に出た麻子に対して、東京ドームでのナイター観戦の話をした上で都合を確認する。その結果、来週の土曜日に三人でナイター観戦に行くことが決まった。

ナイター観戦のときがやって来た。運よく一塁側の内野指定席を三席分取ることができた。善之が、川本と麻子を引き合わせる。

「妹の麻子です」

「あっ、川本といいます」

二人の間に緊張感が漂う。

「お見合いじゃないんだしさあ、そんなに緊張するなよ」善之の一言で、その場の緊張がほぐれた。川本も麻子も笑顔を見せる。三人は、麻子を間に挟んで並んで座った。

一塁側の内野指定席は、オレンジ色のメガホンで一杯であった。今日の試合は、巨人対広島だった。東京ドームは巨人のホームグラウンドであり、外野の広島ファンの応援席こそ赤一色で染まっていたが、それ以外の席にはオレンジ色が目立っていた。

試合が開始された。両チームともエース同士が先発し、緊迫した投手戦が展開される。

零対零で迎えた四回裏の巨人の攻撃で、ワンアウトから打者がヒットを放ち、一塁に出塁した。三回までノーヒットに抑えられており、初めての出塁であった。周囲から歓声上がる。三人の応援のボルテージも上がった。

続くバッターがフォアボールを選び一塁二塁となった。送りバントが成功し、ツーアウト二塁三塁となる。バッターボックスには、最近売り出し中の気鋭の若手が入った。善之がメガホンを叩き始めた。つられたように麻子と川本もメガホンを叩く。

バッターが相手エースの球をレフト方向に打ち返した。レフトとセンターが背を向けて打球を追う。「よっしゃ、先制点!」、「抜けて!」三人が興奮気味に声を張り上げる。しかし、三人の祈りも空しく打球はセンターのグラブの先っぽに収まった。

「あーあ」麻子と川本が、顔を見合わせながら残念がった。

「絶対抜けると思ったんだけどなあ!」

「あと、もう数センチよね!」

二人が言葉を交わす。先制点のチャンスを逃したことが、二人の距離を縮めた。

その後も緊迫した投手戦が続いた。先に広島が先制点を取った。一対零のまま、八回裏の巨人の攻撃を迎える。

ツーアウトから、本日二本目のヒットが飛び出した。迎えるバッターは四番打者だ。初回から投げ続けている相手方のエースが、腕を振り、渾身の一球をキャッチャーミットめがけて投げ下ろす。バッターボックスの打者が懸命に食らいつく。その九球目、芯を捕らえた打球がライト方向に飛んだ。ライトが打球を追う。しかし、途中で打球を追うのをあきらめたかのように走るのを止め、外野席を見上げた。

あきらめたライトの頭上を飛び越えた打球が、巨人ファンで埋め尽くされた外野席に突き刺さった。逆転のツーランホームランであった。

「やったー！」三人は、歓喜の声を上げた。麻子と川本がハイタッチをする。それを見終えた善之が二人とハイタッチをした。

その後、九回表を抑え投手が三人できっちりと締め、その日の試合は巨人の勝利で終わった。場内に、逆転ホームランを放った四番打者と好投した先発投手のヒーローインタビューが流れる。

ヒーローインタビューが終了し、観客がぞろぞろと出口に向かった。三人も、出口に向かう観客の列に加わる。東京ドームの外は、人であふれかえっていた。JRと地下鉄の方向に進む長蛇の列が、三人の視界に飛び込んでくる。

「お茶でもしていくか？」善之は、二人に声を掛けた。今から駅に向かっても、通勤ラッシュ並みの車両に閉じ込められるだけである。それに麻子と川本もだいぶん打ち解けてきたようであり、二人の仲を取り持つ意味で善之は口にした。

「オレは構わないけど」

「私も」

二人も、首を縦に振った。

三人は、東京ドームに併設されたカフェに入った。カフェの中も、今日の試合を観戦した観客たちの姿で一杯であった。

三人は、四人がけのテーブルに案内された。善之と麻子が並んで席に着き、反対側の麻子の正面の席に川本が着くように善之が誘導する。

三人の前にアイスティが運ばれてきた。三人が、美味そうに冷えた紅茶を喉に流し込む。

「しかし、感動したよなあ」川本が、逆転ホームランのシーンを口にした。

「一瞬体がしびれたわ」麻子も、川本に対して感動を覚えたことを口にする。

「麻子さんって、昔からずっと巨人ファンだったんですか？」川本が問いかける。

「ええ。父親の影響で、気づいたときは巨人ファンをやっていました」麻子が、昔を懐かしむような表情を浮かべながら答えた。

「オレもだよ。たまに親父が家に顔を出したときなんかも、よく一緒に巨人戦のナイター中継を見ていたもんな。当時の巨人軍選手のグッズとかカードなんかを買ってもらった記憶もある」善之も、子どものころの記憶を思い浮かべながら口にした。

「私も、お父さんに巨人軍のマスコットのぬいぐるみを買ってもらった記憶があるわ。川本さんも、やっぱり親の影響ですか？」

「ボクは違うんですよ。うちの親父は阪神ファンだし。ボクの場合は、小学校のときに猛烈な巨人ファンの同級生がいて、そいつの影響で巨人を応援するようになりました」

「お父さんが阪神ファンじゃ、家の中が大変なんじゃありません？ しょっちゅう喧嘩してそう」

「マジに喧嘩していますよ。特に、家の中にボクと親父が一緒にいるときに巨人阪神の中継が流れていたら陰悪な空気が流れますもん。たいがい、親父は酒を飲みながら中継を見ているし。」

この間、ついにお袋から、テレビをもう一台買ってあげるから、野球中継を見るときは自分の部屋で見なさいって言われちゃいましたよ」

「そうなんですかあ」麻子が、笑い声をあげた。川本の顔もほころぶ。いい雰囲気二人の会話が弾んでいた。

二人の雰囲気を目にした善之は、「ちょっとトイレに行ってくる」と席を立った。トイレに入り、用を足す。便器に水を流した後、手を洗い、鏡に向かって髪の毛の乱れをセットする。髪の毛のセットを終えた善之は、洗面台にもたれかかった。

善之は、二人に気を利かせるつもりで席を立った。自分がいたら川本が麻子の連絡先を聞きづらいたらと感じた善之は、二人が打ち解けてきたのを見て、川本に時間を与えるために席を立った。

頃合いを見計らった善之は、席に戻った。善之が席に着くのと入れ替わりに、麻子がトイレに向かうために席を立つ。

麻子の姿がトイレに消えたのを確認した善之は、「連絡先を聞けたか？」と川本に訊ねた。川本が、満足げに親指を立てる。麻子の携帯電話のメールアドレスを聞くことに成功したということであった。

「なあ、麻子さんの好きな食べ物を教えてくれないか？」川本が、料理の好みを聞いてきた。

「好みなあ……」善之が、思いつく限り麻子が好きそうな料理の種類を口にする。川本が必死にメモを取る。

やがて、二人の視界に麻子の姿が現れた。川本が、慌ててメモを懐にしまう。

「あとは自分でなんとかしろよ」善之は声をかけた。

「わかった。今日は、ほんとうにありがとう」川本も言葉を返した。

## 8.

「木曜日にさあ、二人で食事に行くことになったよ」週が明けた月曜日、大学内で顔を合わせた善之に、川本が嬉しそうに声をかけてきた。あれからメールで麻子を食事に誘い、木曜日の晩に食事をするようになったということであった。

善之は、川本が食事に誘ったということは、昨日の夜に麻子から送られてきたメールですでに知っていた。

「よかったな。頑張れよ」善之が声をかける。

「もちろん」川本が、気合を込める。

「どうしたんだよ。なにかいいことでもあったのかよ」二人の様子を目にした山村や佐山が近寄ってきた。

「別になんでもねーよ」川本が、不自然な口調で否定する。

川本は、麻子と会ったことを二人に話していなかった。「抜け駆けした」というような言われ方をされるのが嫌だったからだ。善之も、昨日買った馬券が的中したという話であるかのように取り繕い、川本をフォローした。

しかし、善之の応援も空しく、川本の恋に終止符が打たれた。

金曜日の朝、元気のない顔で川本は善之の前に現れた。

「昨日の晩、なにかあったのかな？」気になった善之は、川本を昼食に誘った。麻子と会わせてほしいと頼まれたときの定食屋に連れて行く。

川本の顔は沈んでいた。

「どうしたんだよ。昨日、デートじゃなかったのか？」

「うん……」川本は口ごもった。

「どうした？ ひょっとして振られたか？」

「振られたってわけじゃないんだけど……。麻子さんから、好きな人がいるって言われちゃったんだ」

食事が終わり、「これからも二人で会いたい」という言葉を川本が口にしたところ、麻子から「好きな人がいる」ということを打ち明けられたということであった。その日は、今後も友達としてのお付き合いをしましょうという形で別れたということだった。

「へえ、そういう風に言われたんだ」善之自身も、麻子の口から「好きな人がいる」という言葉を聞いたことはなかった。

「そうか。でも、嫌われたわけじゃないんだし、友達として付き合えばいいんじゃない？」

「そうなんだけどな……」川本がうなだれる。彼にとっては、真剣な恋だったのである。

「よし、代わりに俺が慰めてやるよ。今晚飲みに行くか！」

「ありがとう、有難く奢ってもらうことにするよ」

「奢るって言った覚えはないんですけど……。まあ、いいっか！」二人の間で今晚飲みに行くという約束が交わされた。

翌日、善之の携帯電話に麻子から電話がかかってきた。特に用事はないが、なんとなく声を聞きたくなって電話をしたということだった。その電話で、善之は、昨晚川本と二人で飲みに行ったことを告げた。

「好きな人がいるって言ったらしいな」善之が口にする。

「うん」

「マジに、あいつショックを受けていたみたいだぜ。結構酔っ払っちゃってさ」

川本は、昨晚、いつもより早いペースで酒を口にした。最後は、半分正体を無くし、善之が肩を貸して両親と同居する家まで連れて帰った。両親は、善之に対してしきりに恐縮した。

「そうだったんだ。ごめんなさい」話を聞いた麻子が、電話口で謝る。

「別に気にすることはないよ。ただ、あいつの気持ちがマジだっただけだし。変に気を持たせるよりも、ちゃんと言ったほうがよかったと思うよ」

「そうかな」

「そうだよ。しかし、好きな人がいたんだ。その人と上手くいけばいいのにな」

「うん……」

「川本のためにも頑張れよ」

「うん」

二人は電話を終えた。

電話を終えた麻子は、動揺した気持ちを押しさえられずにいた。「その人と上手くいけばいいのにな」と言う善之の言葉が脳裏をこだました。

東京ドームでの光景が甦ってくる。あの日川本の誘いに乗ったのは、応援している巨人の試合を見られるということもあったのだが、善之と一緒に試合を見に行けるという理由からだった。

その後の流れで、川本と二人で食事をするようになった。善之がセッティングした出会いであり、むげに断れなかった。

麻子の胸を、複雑な思いが駆け抜けた。川本に対して口にした好きな人とは、善之そのものであった。父親から初めて善之の写真を見せられたとき以来、日増しに強くなる想いであった。

麻子は、机の上に飾ったフォトフレームに視線を移した。そこには、善之の笑顔が収められていた。

善之の写真を見つめる麻子の目に、涙が伝った。

### 第3章 超えられない愛

---

1.

新宿の紀伊国屋書店の料理本コーナーを物色する二人の若い女性の姿があった。麻子と友人の佐久間知美であった。告白された男性と付き合うことになった知美が、彼に振る舞う手料理を覚えるために、料理本を買うことにしたのだ。

麻子は、自分自身も料理本を買うつもりで、知美に付き合い書店にやって来た。

麻子は、以前善之が「料理が好きな女性が好きだ」と言っていたことを覚えていた。善之とは、メールは頻繁に交わしていたが、なかなか二人で会う機会を作れずにいた。知美から誘われたときに、自分自身も料理を覚えて、手料理を振る舞うことを口実に善之のもとを訪ねることを思い立った。

二人が数々の料理本を手に取り、わかりやすさやレパートリーの広さなどを論評し合う。結局二人は、料理本を二冊ずつ買った。

「お茶でもする？」知美が誘い、二人は近くのカフェに入った。同じケーキセットを注文する。

二人は、買ったばかりの料理本を、互いに見せ合った。料理本のページを眺めながら、麻子は、善之と二人で楽しく食事をしているシーンを思い浮かべていた。

「でも、ほんとうに美味しいかどうかは、誰かに食べてもらわないとわからないしな……」麻子は、今まで他人に料理を振る舞ったことがなかった。自分が作った料理を自分で食したことはある。自分では決して料理は下手ではないと思っていたが、腕前のほどは自分ではわからない。

「そうだ！」思い立った麻子は、知美に対して、互いに手料理を振る舞い、味を評価しあうことを提案した。同じような心配を抱いていた知美が、提案に賛同する。

こうして、二人の間で、料理の腕を磨くことに関して協力しあうという約束が交わされた。

最初は、麻子の手料理を知美が品評することになった。約束した時間に知美が麻子のもとを訪ねる。

テーブルの上には、すでに何皿かの料理が並べられていた。

「あともうちょっとで出来上がるから、座って待っていて」知美をリビングのソファに誘った麻子は、料理の仕上げに取り掛かった。

完成した料理がテーブルの上に並べられた。知美がテーブルに着く。「すごーい！ 美味しそう」感嘆の声を発した知美が、ナイフとフォークを手を取った。

メニューは、チキンをメインにした洋風料理であった。スープとお手製のサラダも添えられ、中央の籠にはバゲットが盛られている。

知美が、メインのチキン料理をナイフで切り分け、フォークでひと口すくい、口の中に入れた。

「どんな感じ？」麻子が、知美の顔を覗き込む。

「お世辞抜きで美味しいよ！」知美が、最高の評価を口にした。

「他の料理も食べてみて」麻子は、メイン以外の料理も勧めた。二人がナイフとフォークを動かす。知美からの評価は上々であった。

「今度は和風料理に挑戦するから、また評価してね」

「オッケー」

麻子が、次回は和風料理を振る舞うことを宣言した。

料理を終えたテーブルの上に、プリンとハーブティのポットが並んだ。プリンは、知美が土産に持ってきたものであった。

二人は、プリンの滑らかな舌触りとハーブティの香りを味わいながら会話を繰り広げた。知美が、付き合っている彼氏のことを口にする。彼氏から手料理が食べたいとリクエストされ、近いうちに振る舞うことを約束したということであった。

話題が、知美の彼氏の話から麻子の恋愛話へと移り変わる。

「麻子、ほんとうに彼氏いないの？」知美が問い質した。

「うん」麻子が頷く。

「そうか……。でも、好きな人はいるんでしょ？」

「うん」再び、麻子が頷く。

「ねえ、好きな人ってどんな人？ 教えてよ。うちの大学の人？」

「違う」

「じゃあ、どんな人なの？」

「その……」麻子が言いよどんだ。いくら仲の良い友人とはいえ、ストレートな気持ちを打ち明けるわけにはいかなかった。麻子が、口元を噛みしめる。

「そんなにびっくりするような人？」

「そうじゃないけど」

「気になるなあ。教えてよ」

「うん。そのね……。お兄ちゃんの友達」麻子は、友達という言葉をつけ加えて誤魔化した。

「へえ、そうなんだ。その人には、気持を伝えたわけ？」

「ううん」

「その人には、彼女いるの？」

「よくわからないけど、でもないような気がする」

「それじゃ、今がチャンスじゃない。思い切って告白しちゃいなさいよ。なんなら、私が仲を取り持ってあげようか？」

「うん、ありがとう。でも自分でやる」

「そうよね。じゃあ、陰で成功を祈っている。ところで、お兄さんとはよく会うわけ？」

「たまに」

「そうなんだ。お兄さんと会う機会を増やせば、好きな人と会えるチャンスが広がるかもね」

「そうね」麻子が、切なそうな笑顔を浮かべた。

気持ちを察したのか、知美が話題を変えた。

その後も、二人による互いの手料理の品評活動は続けられた。麻子は、和風料理や中華料理にも挑戦し、知美に食べさせた。いずれの料理も、知美からの評価は上々であった。

麻子は、料理の腕に自信を持った。知美も、麻子からの評価を受けて料理の腕に自信を持ったようであり、ついに彼氏に対して手料理を振る舞ったということであった。

「私も、そろそろ振る舞ってみよう」知美に刺激され善之に手料理を振る舞うことを決意した麻子は、最初に振る舞う手料理のメニューを思案した。

## 2.

ある日の夜、自宅のリビングでくつろぐ善之のもとに一本のメールが舞い込んできた。メールの相手は麻子であった。ここしばらく、麻子とは顔を合わせていなかった。電話の声も聞けていない。「どうしている」と近況を問うメールを送ろうかと考えていた矢先のことであった。

メールには、最近料理にはまっているということが書かれてあり、善之にも味見をしてもらいたいという言葉が綴られていた。

「そういえば麻子の手料理、一度も食べたことなかったな」善之は、過去を振り返った。互いの部屋を行き来したことは何度もあるのだが、手料理を食べたことはなかった。そもそも、善之自身が母親以外の女性が作った手料理を食べたことがなかったのだ。

善之にとって、女性の手料理は憧れであった。いつしか、料理の上手い女性が好きであるという価値観が出来上がっていた。麻子は身近な存在であり手料理を振る舞われるというイメージが湧かなかったのだが、久しく手料理の味に飢えていた善之は、「楽しみにしている」というメールを返信した。

善之からの返信メールを目にした麻子は、ほっと胸をなで下ろした。押しかけるような印象を与えて引かれてしまうことを恐れていた麻子は、あえて趣味で料理を覚え友人にも振る舞ったが、好評だったので善之にも食べてもらいたいというニュアンスでメールを送信した。

善之からは、「楽しみにしている」という内容のメールが返ってきた。二人の間で、次の土曜日の夕食を麻子が作りに行くことが約束された。

「メニューどうしよう……」麻子の頭の中で幾多のメニューが浮かんでは消えた。あれから日夜料理作りに励んだ麻子は、和食、洋食、中華、エスニックと幅広いレパートリーのメニューに対応できるようになっていた。知美を始めとした料理を試食した何人かの友人たちも、口を揃えて「美味しい」という言葉を口にした。

問題は、善之の好みであった。一緒に食事をしたことは何度もあったが、麻子の印象ではなんでも食べるというものであった。とくにこのジャンルの料理が好きであるといったような印象は感じられない。しかし善之は、高校生のときに母親を亡くし、それ以来孤独な生活を送ってきたのだ。家庭的な味に飢えているのかもしれない。そう思った麻子の頭の中で、和食のイメージが広がった。

そして、善之と約束した土曜日がやって来た。その日は、午後四時に善之の家へ行くことになっていた。

最寄り駅である西武池袋線の練馬駅に降り立った麻子は、駅ターミナルに併設された食品スーパーに足を踏み入れた。頭の中に、今日振る舞う和食メニューのレシピが浮かんでくる。揃える食材もメモしていた。

メモを見ながら、棚に陳列された食材を手に取り、買い物籠の中に入れていく。野菜、根菜、イモ類、パックにくるまれた肉など、色とりどりの食材が籠の中を埋め尽くす。

鮮魚コーナーに差し掛かったとき、「奥さん、美味しいサバ入っているよ！」という掛け声が飛んできた。麻子が、声のしたほうに顔を向ける。声の主は、鮮魚コーナーの大将であった。周囲には、奥さんと呼ばれるような買い物客の姿は見当たらない。

「えっ、もしかして私のこと？」麻子は、大将と視線を合わせた。

「奥さんじゃなかったでしたか。お姉さんでしたか」大将が、笑いながら声をかけてくる。

麻子も、敢えて否定はせず、はにかんだような笑顔を浮かべながら売り場の前に立った。大将が、お勧めの食材を説明する。大将の説明に耳を傾けた麻子は、サバが二切れ入ったパックを籠の中に入れた。

食材を買い揃えた麻子は、スーパーのレジ袋を両手に提げ、善之の住むマンションに向かった。

信号待ちをする麻子の脳裏に、鮮魚コーナーの大将が発した「奥さん」という言葉がこだまする。麻子は、甲斐甲斐しく善之の世話をしている自分の姿を想像していた。

信号の色が青に変わった。人の波が、信号の向こう側に向かって動き出す。はっと我に返った麻子は歩みを進めた。横断歩道を渡りながら、想像を膨らませていたことに顔を熱くしていた。

マンション入り口のオートロックの前に立った麻子は、五〇五号室のボタンを押した。モニター画面を覗き込む。インターホン越しの「今開けるよ」という声とともに、扉がするすると開いた。

エレベーターを五階で降り、五〇五号室のドアホンのチャイムを押す。間髪入れずドアは開かれた。ドアの向こうで麻子が上がってくるのを待っていたのだろう。

両手にレジ袋を提げている姿を目にした善之が、「駅に着いたときに連絡してくれれば、迎えに行ったのに」と声をかけてきた。

「ううん、大丈夫、これくらい。駅からも近いし」麻子が、笑顔で答える。

部屋に上がった麻子は、キッチンテーブルの上にレジ袋を載せ、食材を広げた。善之が、所在なさにその場をうろつく。

「出来上がるまで少し時間かかるから、休んでいて」麻子は、声をかけた。

「うん、わかった。仕上げなければならないレポートがあるから、勉強部屋にいるから、出来上がったら声かけてよ」

「わかった」

善之が、勉強部屋に引っ込んだ。善之の住まいは2LDKの間取りであった。キッチンに併設された広いリビングがあり、それ以外に二つの洋室がある。そのうちの一つを、善之は勉強部屋兼寝室に使用していた。

「ごはんできたよ！」麻子が、勉強部屋に顔を覗かせた。

「おう、ちょうどいいタイミングだ」机に向かっていた善之が顔を向ける。レポートが仕上がったところであった。

キッチンからは、食欲をそそる匂いが漂っていた。善之の腹から「ぐーっ」という鈍い響きが発せられる。

「麻子が張り切って晩御飯作るって言っていたから、昼飯を軽くしたんだよね」善之が、意識的に食事の量をコントロールしたことを口にした。

「たくさん作っちゃったけど、全部食べてね」麻子も、言葉を返した。

キッチンのテーブルの上には、あふれ返らんばかりの料理が並べられていた。肉じゃが、サバのガーリックトマトソース煮込み、野菜の和え物、カボチャのソテー、卵で炒った豆腐料理、味噌汁というメニュー構成であった。麻子が、茶碗にご飯をよそう。

「なんか、凄くないか？」善之は目を見張った。麻子が、照れたような表情を浮かべる。

「じゃあ、いただきます」

「どうぞ」

「なにから食べようかな……」善之は、迷い箸をしながら肉じゃがに箸を付けた。じゃがいもと人参、白滝、こま切れ肉を一掴み箸につまみ、口の中で頬張る。麻子が、不安げな眼差しを善之の顔に注ぐ。

善之が頷いた。二人の視線が合わさる。

「どう。口に合う？」麻子が、心配げに善之の顔を覗き込んだ。

「うん、最高。お世辞抜きに美味しい！」善之の口から出てきた言葉は、麻子の料理の腕前を最高に評価する言葉であった。

「ほんとう！ 嬉しい！」麻子が、ほっとしたように口にする。

「違う料理も食べてみようかな」善之は、並べられた料理に順番に箸をつけていった。一口ずつ口の中に入れ、ゆっくりと味わう。そのたびに、善之の口から「美味しい！」という言葉が発せられた。

麻子も、料理を口にした。自分で作った料理なのだが、食べてもらいたい人と差向いで味わう料理は格別であった。

二人の間に、楽しい会話が繰り広げられた。

「お代わり！」善之が、空の茶碗を差し出した。麻子が、茶碗にご飯をよそう。結局、善之はご飯を二回もお代わりした。

「もう死にそう」すべての料理を食べ終えた善之が腹をさする。テーブルの上の食器は、すべ

て綺麗に空になっていた。

麻子は、テーブルの上の片付けに入った。善之も、空の食器をシンクに運ぶ。

「食器洗い、手伝うよ」善之が声をかけた。

「大丈夫。一人でできるから、リビングで休んでいて」麻子が言葉を返す。

「わかった。じゃあ、向こうで待っている」善之は、リビングのソファに腰を埋めた。

皿洗いを終えた麻子は、カップに紅茶を入れ、リビングに運んだ。一つを善之の前に置き、もう一つを自分の前に置く。

善之が、カップの紅茶をすすった。

「ほんとうに美味しかったよ。ありがとう」善之の言葉に、麻子ははにかんだ表情を浮かべる。

「オレ、死んだお袋以外の手料理を食べたことがなかったから、手料理に憧れていたんだよなあ。だから、こういうのって幸せな気分だよ」

善之の言葉を聞いた麻子は、ほっと胸をなで下ろした。手料理を振る舞いに来てよかったという思いが胸の中で広がる。

「あのさ……」

「えっ？」

「また、料理作りに来てもいい？」麻子は、恐る恐る問いかけた。

「もちろん、大歓迎だよ」すぐさま善之が言葉を返す。

「じゃあ、今度は洋食を作ってあげるね」麻子は、胸の中で小躍りした。

リビングでの会話が弾んだ。お互いの身の回りで起こった出来事など、普段のメールのやり取りでは伝えきれないことを語りあう。

善之が、ふと壁の時計を見た。時計の針は夜の十時を回っていた。

「そろそろ帰ったほうがいいのかな？」善之が声をかけた。帰宅時間が深夜になることを心配する言葉であった。

「うん、そうね」麻子も、時計に視線を送る。時間は気になってはいたが、この場を離れがたい気持ちのほうが強かった。

帰り支度を始めた麻子に対して、善之があるものを差し出した。

「これ、あげるよ」善之の手のひらの上に、一本の鍵が載っていた。

「えっ、これって？」麻子が、善之の顔を覗き込む。

「オレの家の鍵。また料理を作りに来てくれるんだろう。一本渡しておくよ」

「ありがとう」麻子は、鍵を受け取った。

「でもさあ、作りに来てくれるときは、前もって教えてほしいな。そうじゃないと、外で食事を済ませてきちゃうかもしれないし、帰りが遅くなるかもしれないし」

「わかった、前もって連絡してから行くね」麻子は、言葉を返した。

マンションを出た二人は、練馬駅に向かって歩いた。あっという間に、駅の改札口に到着する

。

「今日は、ほんとうにありがとう」

「うん」

「気をつけて帰れよ」

「わかった」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

切符を手にした麻子が、改札を通った

「じゃあな！」善之が手を振った。麻子も、手を振り返す。

背を向けた善之が、家に向かって歩き出した。

麻子は、しばしの時間、遠ざかる善之の背中を見つめていた。

3.

家に戻った麻子は、ベッドに腰掛け、鍵の束ねられたキーホルダーを掌の上で弄んだ。

キーホルダーには、新たな鍵が一本加わっていた。善之から預かった鍵であった。鍵束の中から善之の家の鍵を指でつまみ、右手のこぶしで握りしめる。左手の手のひらで握りしめたこぶしを包み、そのまま胸に押し当てる。

麻子は、不思議な感覚にとらわれていた。彼氏と鍵を交換しあっているという話を、友人から聞いたことがあった。お互いの行き来が自由になり、家に帰ったときに彼氏が部屋の中で自分の帰りを待っていたことや休みの日に思い立ったように彼氏の部屋へ掃除をしに行くことがあるのだという。鍵を交換しあうことで、二人がステディな関係であることを互いに確認しあっているのだ。

麻子は、次に手料理を作りに行ったときに自分の家のスペアキーを善之に預けるつもりでいた。善之も受け取ってくれるであろう。そうなれば、お互いに行き来が自由になる。家に帰ったときに部屋の中に善之がいることもあるのだろうし、気の向いたときに善之の部屋を掃除しに行くこともできる。

しかし、自分たちはステディな男女関係ではなく、兄妹としての男女関係である。善之も、兄としての気安い気持ちで鍵を預けてくれたのだろう。

鍵を預かったことで一段と善之との距離が近くなったことを感じた麻子であったが、胸の中で切なさが湧いていた。

一週間後の土曜日、善之の家のキッチンで料理を作る麻子の姿があった。家の中は麻子一人だった。料理を作りに行く約束は前もって交わしていたのだが、善之が昼間友人との約束があり、帰るのが午後五時過ぎになるということであった。

練馬駅前の食品スーパーで食材を買い込んだ麻子は、レシピを書き移したメモを脇に置き、調理を始めた。今回は、洋風料理を振る舞うことにしていた。

前回初めて料理を作りに行ったときは、和風料理を振る舞い好評であった。やはり、麻子の推測通り善之は家庭の味に飢えていた。家の鍵をもらった麻子は、これからも定期的に料理を作りに行くつもりでいた。その都度料理のジャンルを変え、善之に楽しんでもらおうと考えていた。

今日のメニューは、トマトとアンチョビを使った前菜サラダ、チキンのソテー、白身魚と野菜のグリル、野菜たっぷりのミネストローネ、バゲットの組み合わせであった。ちょっとしたコース料理を意識したメニュー構成である。善之の好む白ワインも買ってきて冷蔵庫の中に冷やしておいた。

前もって頭の中で整理しておいた段取りを追いながら、麻子は調理を進めていった。

ほぼ予定と違わぬ時刻に善之は帰宅した。玄関を開けた途端、キッチンから食欲をそそる匂いが漂ってくる。それとともに、ジューツという肉か魚を焼くときのような音も伝わってきた。

「ただいまあ！」玄関を上がった善之が、キッチンに向かって声をかけた。

「おかえりなさい」麻子が振り向く。

「お腹ペコペコだよ！」

「今日も、お昼あんまり食べなかったの？」

「控え目」善之は、昼食を軽めにしたことを口にした。

友人の買い物に付き合うために昼前に待ち合わせをした善之は、友人と二人で昼食を食べたのだが、ボリュームのある料理をがつく友人の姿を尻目に女性の好みそうな軽めのメニューで食事を済ませたということだった。善之は普段はたくさん食べるほうであり、「体調が良くないのか？」と心配した友人に対して、「妹が晩御飯を作りに来ることになっているのだが、量が多いので、昼は軽めにしている」と答えたということであった。

空腹であるという言葉を繰り返す善之に対して、麻子は「今日も、リクエスト通りボリュームのあるメニューにしているから安心して！」と、笑いながら返事をした。

完成した料理がテーブルの上に並べられた。今回は和風料理ということもあり表面積が小さく深さのある椀状の食器が多く並べられたが、今回は洋風料理であり、表面積が大きく平べったい皿状の食器がたくさん並べられた。テーブル一面に皿が広がる。ナイフとフォークの横にはワイングラスが置かれ、テーブルの中央に置いた氷を敷き詰めたワインクーラーの中ではボトルワインが冷やされていた。

「本格的だなあ！」善之が、感嘆の声を上げた。

「頑張ってみました」麻子が、照れながら答える。

「よし。じゃあ、栓を抜くか！」善之が、ワインボトルのコルクにワインオープナーを差し込んだ。コルクがじわじわと引き上げられる。ポンという心地よい音とともに、コルクがワインオープナーに吸い取られた。

善之が、二人のグラスにワインを注ぐ。二人が、ワイングラスを手にした。

「なにに乾杯したらいいんだらうな？」善之が問いかける。

「なんだらうね」麻子も思案顔になる。

「それじゃ、とりあえず麻子の作ったコース料理に乾杯！」

「乾杯！」

グラスを上げた二人は、ワインを一口喉に流し込んだ。口の中に芳醇な香りが広がる。

「すごく飲みやすいワインだけど、麻子が自分で選んだの？」善之が問いかけた。善之好みの甘くて渋みのあるワインであった。

「酒屋さんで料理の内容を言ったらね、このワインが合うんじゃないかって選んでくれたの」麻子が、ワインを選んだ経緯を口にする。

「そうなんだ」善之が頷いた。

ワイングラスをテーブルに置いた善之が、前菜サラダをフォークですくった。アンチョビをトマトの上に載せ、ソースを絡ませながら口に入れる。

「うん、美味しい」善之が言葉を漏らす。

前菜サラダを口にした善之は、他の料理にも手を伸ばした。料理を口にするたびに、「美味しい」という言葉を連発する。麻子も、美味しそうに料理を頬張る善之の口元を眺めながら顔をほころばせた。

善之のワインを飲むピッチが速まる。

「お前って、ほんとうに料理上手だなあ」

「そうかな？」

「うん。そんじょそこらの料理人より上手だよ。店を開いても絶対繁盛するよ」

「それは大袈裟じゃない？」

「いや、冗談じゃなくてマジで」

少々アルコールが回り饒舌になった善之の口から突いて出る賛美の言葉に対して、麻子もまんざらではないような気になっていた。

二人が料理を食べ終えた。

麻子を買ってきたワインボトルは空になり、もともと冷蔵庫の中に冷やしてあった白ワインのボトルも半分以上が空になった。

買ってきたバゲットも、すべて平らげた。前回同様に、善之が「満腹だ」と言いながら腹をさする。

食器をシンクに運んだ麻子は、ハーブティのポットをテーブルの上に置いた。茶葉の入ったポットにお湯を注ぎ、カップにハーブティを注ぐ。辺り一面にハーブの香りが広がった。料理の余韻を楽しむかのように、善之がカップに口をつける。

そのとき、「あっ、そうだ」と何事かを思い出したかのように麻子が言葉を発した。善之が、視線を向ける。

「あの、これお兄ちゃんにあげる」麻子が、一本の鍵を差し出した。家のスペアキーであった。

「私の家の鍵も預けとこうかなあと思って。いつでも好きなときに来て使ってくれていいから」麻子が言葉を添えた。

「そうか。じゃあ、もらっておくよ」善之が、鍵を受け取った。

「コンパとかで家に帰るのが怠くなったときに、麻子の部屋に泊まらせてもらおうかな」善之が呟く。

善之が通う大学の最寄り駅はJRの赤羽駅であり、自宅マンションに帰るためには池袋駅で西武線に乗り換えなくてはならない。麻子の住むマンションは、赤羽駅と池袋駅の間にある板橋駅が最寄り駅であるため、立ち寄るのに都合がよいという話であった。

「泊まることがあるんだったら、パジャマなんかも用意しておかなければならないな」善之が言葉を続ける。

「新しいパジャマ、買っておくね」返事をした麻子は、部屋に善之が泊まりに来ることを想像し顔を赤らめた。善之に気づかれないよう顔をうつむける。そして、いつかは自分も善之の家に泊まることになるのだろうと思った。

#### 4.

年が明けた。善之の通う大学は、一月六日が授業の開始であった。

帰省する先のない善之は、年末年始は、何人かの友人とスキーに出かけた。麻子も、叔父夫婦の家で正月を過ごした。

正月休み最後の日に二人は会い、東京での初詣を済ませ、外で食事をした。そのときも、いつものように二人で楽しい時間を過ごしたのだが、善之は、胸の中である心情の変化が生じていることに気づいていた。麻子の存在を大事にしたいという思いが日増しに強くなっているということだった。

麻子と初めて出会ったときから、たった一人の肉親として、また妹として大事にしていきたいという気持ちを抱いていた。そのときから、兄妹としての絆を築いてきたのだが、時を経るにつれて、ただの妹としてだけではなく麻子の存在そのものを大事にしたいという思いが善之の胸の中に芽生えてきた。

麻子は、自分の身の回りの世話を甲斐甲斐しくしてくれていた。毎週のように手料理を振る舞ってくれ、掃除や洗濯などもしてくれている。

風邪をこじらせて寝込んだときには、泊りがけで看病をしてくれた。週末に一緒に遊びに出かけることもあり、精神的に落ち込んだときには懸命に励ましてくれた。

そんな麻子は、善之にとって、家庭的な温もりを与えてくれる女性(ひと)であり、女性らしさを感じさせてくれる女性(ひと)であり、癒しを与えてくれる女性(ひと)でもあった。気がつくやうに、善之の中で特別な存在となっていた。心の中で、なくてはならない存在になっていた。

異性に対する恋愛感情とは異なるのだが、心の中のオアシスとして守り続けていきたい存在であり、また愛おしい存在でもあった。善之が求める、内面的な面での理想の女性像でもあった。

善之も人並みの器量を持った男であり、彼の生き様や経済力に興味を示して言い寄ってくる同年代の女性もいたが、善之は積極的になれずにいた。常に、麻子と比較してしまうからだ。内面的な面だけではなく、麻子の外見も善之の理想像であった。愛らしさと美しさの同居する顔立ちや均整のとれたスタイルを麻子は持っていた。

単なる妹として接しているときには外見を意識することはなかったのだが、麻子の内面的な面が善之の心の中で特別な存在になるにつれて、外見的な美しさも意識するようになっていた。

善之は、そんな自分の心情の変化に戸惑いを覚えていた。

戸惑いの日々は続いていた。とくに、麻子の外見的な美しさを意識する自分があることへの戸惑いを強く感じていた。麻子と顔を合わせたときなどに眩しさを感じることもあった。麻子ももうすぐ二十歳であり、大人としての魅力を兼ね備えてきたのだろう。

最初は、そう思うことで心の変化を見て見ぬふりをしようとしていたのだが、それだけではないことに善之は気づいていた。今まで意識の外にあったものが、次から次へと意識の対象になる。麻子の一つ一つの小さな仕草までもが、可愛らしく魅力のあるものに映るようになっていた。

自分にとってみれば、麻子は妹でしかありえない。それ以外の何物でもないわけなのだが、意識をして見てしまう自分があることが理解できずにいた。異性に対する恋愛感情とは異質なものであったが、不思議な感情であった。

麻子と過ごす時間は、善之の生活の中でもとくに楽しく充実した時間であった。自然と心が安らぐ。麻子と会うときが近づくにつれて、善之の胸の中に安らぎが広がるような状態が生じていた。

戸惑いはあったが、善之は、このことを他人に対して話すことはなかった。仲の良い友人と酒を飲むときなどに現在抱えている悩みを口にすることもあったが、このことだけは口にしなかった。友人の中にも女兄妹がいる者もいたが、このような話題が上ったことはない。意識する対象にはなり得ないからだ。

友人との会話の中で、麻子の話題が上ることもあった。旅行を共にした三人の友人の口から麻子の存在が広まり、善之は、何人かの友人に麻子の写真を見せた。写真を目にした友人たちは、口を揃えて容姿が良いという意味の言葉を口にした。川本のように、半ば本気な表情で一度会わせてほしいと頼み込んでくる者もいた。

さらに、「こんな可愛い妹がいて、意識することはないのか？」というようなことを、善之に対して問いかけてくる友人もいた。以前は、「妹だし、意識の対象にはならない」と普通に答えていたのだが、最近では、そのようなことを聞かれたときに胸がドキッとするようなこともあった。心の中の恥部を覗かれてしまったような感覚に陥ったからであった。

そのようなときは、善之は、ことさら自然体を装いながら意識などしていないことを強調し、話題を他に逸らせようとしていた。

心の中で戸惑いを覚えながらも、善之は、麻子に対して今までと変わらない態度で接し続けた。一緒にいるときは、戸惑いを覚えることなどもなく、気の使わない楽しい時間を過ごした。

しかし、待ち合わせの場所に立つ麻子のことを遠目から見たときや話をしているときの何気ないぐさが目に止まったときなどに、眩しさを感じることもあった。麻子と別れた後に、充実感と寂寥感の交じり合った複雑な思いを感じることもあった。

5.

そんな善之の胸の中で、最近、沸々と湧き上がってくる思いがあった。麻子に対して、なにかをしてあげたいという思いであった。

善之は、麻子に対して感謝の気持ちを抱いていた。一人暮らしをしている善之にとって、たまに訪ねてくる麻子が手料理を振る舞い、掃除や洗濯などの家事をしてくれることが、ことのほか助かっていた。麻子の協力がなければ、部屋の中は散らかり放題となり、偏った食生活を送り続けることにもなっていた。

「なにかしてあげたいな……」思考を巡らす善之の脳裏に、麻子の誕生日を盛大に祝う構想が浮かび上がってきた。次の誕生日で麻子は二十歳になる。人生の節目の年でもある。その節目の誕生日を盛大に祝ってあげたい。

善之の頭の中に、二十歳の誕生日を祝うイメージが浮かんできた。記憶の中にある、過去に友人や付き合っていた女性の誕生日を祝ったときのシーンを組み合わせた壮大なイメージが頭の中に広まっていく。

「でも問題は……」問題は、麻子の予定であった。

麻子も、もう二十歳になる。彼氏という存在がいても決しておかしくはない。ボーイフレンドの一人や二人はいるだろう。日常的な会話の中でそのような話を直接聞いた記憶はなかったが、あえてそのような話題を口にしていないだけなのかもしれない。

二十歳の誕生日は、特別な日である。彼氏や大事にしているボーイフレンドがいるのであれば、当然そのような異性と行動を共にするはずだ。善之は、麻子の予定を確認することにした。

ひな祭りの季節がやって来た。街の至る所にひな人形が飾られ、スーパーマーケットの特設コーナーもひな祭りムード一色であった。

例年ならば春の訪れを確実に感じさせる季節であったが、今年はシベリアから押し出してきた寒気団が長く居座り、春の訪れを感じさせない桃の節句となった。東京も、朝から粉雪がちらつく寒い一日だったが、土曜日ということもあってか、街中は着飾った若い女性や家族連れの姿で賑わっていた。

今日は、麻子が晩御飯を作りに来てくれる日であった。食卓には、手毬寿司やハマグリのお吸い物などが並んだ。ひな祭り特性のレシピということである。

食事をしながら、麻子が、ひな祭りの日の思い出を語った。幼き日の彼女は、家の中にひな壇が飾られるのが待ち遠しく、飾られるやいなや、ひな壇の前に座り込み、母親から教えられたひな人形の名称を一つ一つ諳んじていたということだった。

ひな人形とは縁のなかった善之は、黙って麻子の話に耳を傾けた。

食事を終えた二人は、リビングに移動し、紅茶を飲みながら会話を楽しんだ。

そして、頃合いを見計らった善之が、誕生日の予定を確認する言葉を口にした。

「あのさあ。来月の二十日って、もう予定入っているの？」麻子の誕生日は、善之の誕生日よ

りも十日遅い四月二十日であった。

「来月の二十日？」麻子が聞き返す。

「うん。麻子の誕生日だろう？」

「あっ、そうだったね」今思い出したというような表情で、麻子が頷く。

「もう、すでになにか予定が入っている？」善之が、再度確認する。

「今のところ、なにもないけど」

「ほんとうにないの？」

「うん」

「そうか……。じゃあ、オレが予約を入れてもいいかな？」

「予約って？」

「四月二十日は二十歳の誕生日だろう？ 大人の仲間入りをするわけだしさ。だから、盛大に祝ってあげようかなと思って」

「ほんとうに！」麻子が、瞳を輝かした。

「オレでよければなんだけど」

「嬉しいな……」麻子の顔には、心の底から喜んでいる表情が浮かび上がっていた。

「ちなみに、その次の日は、なにか予定入っている？」善之は、翌日の予定を確認した。今年の四月二十日は土曜日であった。それに対して、麻子が予定のないことを口にする。

「それじゃ、誕生日の次の日も開けておいてくれるかな？」

「わかった。開けておく」こうして、善之が麻子の二十歳の誕生日を祝うことが決定した。

「次の日も開けておけて、なにがあるんだろう？」麻子が、善之に確認する。

それに対して、善之は、「そのときのお楽しみ」と返事をした。

善之は、麻子の二十歳の誕生日を祝う計画を立て始めた。善之の頭の中では、大まかなプランが立てられていた。いくつかのサプライズを盛り込んだプランであった。あとは、一つ一つのことについて、具体的なことを決定するだけである。

善之は、インターネットやツイッター、フェイスブックを通じて、様々な口コミを集めた。気になる口コミをピックアップし、サイトにアクセスして内容を確認する。さらには、電話やメールを通じて、詳細な情報も集めた。集めた情報を絞り込み、何通りかのプランを立てる。

母親からの教えもあって日常は質素な生活に努めていたが、今回は金に糸目をかけないつもりでいた。金額よりも、麻子に対する日ごろの感謝の気持ちを表すこととサプライズを演出することを重要視した。候補にあげた店や場所を偵察し、気になるところを自分の目で確認する。予約が必要なところへの予約を済ませる。

こうして、麻子の二十歳の誕生日を祝うプランが完成した。

## 6.

新年度を迎えた。

善之は大学三年に、麻子は大学二年になった。それぞれの履修科目が一新される。共通基礎科

目が減り専門科目が増えた。人により選択する科目が異なり、仲の良い友人とも別々の教室で授業を受ける時間が多くなった。

そんな中、善之は二十一歳になった。四月十日生まれの善之は、新年度が始まるとすぐに誕生日を迎える。二十一歳の誕生日は、友人たちが祝ってくれた。レストランの個室で、善之を中心としたパーティが開かれた。

麻子からもプレゼントをもらった。ネクタイとネクタイピンだった。

大学三年になった善之には、就職活動が待ち構えている。彼のような理系の学生も、昔のように教授推薦だけに頼ることはできなくなっていた。企業のほうも、採用に対して慎重な姿勢を示してくるようになっていた。時間をかけてでも優秀な学生を採用しようとする考えを前面に押し出してくる。

そのこともあって、理系の学生も、企業訪問をする機会が増えていた。そんな善之の境遇を意識した麻子からのプレゼントであった。

そして、四月二十日を迎えた。

その日、二人は、午後四時に池袋駅で待ち合わせをしていた。駅東口のパルコ前が待ち合わせ場所であった。

お気に入りの装いで身を固めた麻子は、早めに家を出た。待ち合わせ時間の三十分前にパルコに到着する。麻子は、そのままその場で待つことにした。

周囲には、人待ち顔をした人間たちが等間隔で並んでいた。目の前を、ひっきりなしに人が横切る。土曜日ということもあり、カップルの姿が多かった。

「待ったか？」と言葉をかけてきた男に向かって、「今着いたところ！」と待っていた女が駆け寄る。空いたスペースに別の人間が体を入れ、壁に背を向けて立つ。そんな光景を目にするたびに麻子が時間を確認する。時計の針は、なかなか進まなかった。麻子は、ぼんやりと周囲の待ち人たちの様子を眺めていた。

そんな彼女に声をかけてくる男たちがいた。いわゆるナンパであった。「ねえねえ、今一人？」男たちが、決まり文句のような言葉を投げかけてくる。そんな男たちを、麻子は適当に往なした。

ナンパ目的ではない男も声をかけてきた。小綺麗なジャケット姿に身を包んだ男が、スカウトと称して麻子に名刺を差し出す。「主演女優として作品に出演してみませんか？ 出演料も高額ですよ」女優という言葉を連呼する男であったが、中身はAV女優であった。

名刺を押し返そうとした麻子の手を押しとどめた男が、「気が変わったらいつでも連絡ください」という言葉とともに、再び名刺を押し返す。未練げな視線を残しながら、男はその場を立ち去った。

再び、麻子が時間を確認する。

そのとき、麻子の肩がポンとたたかれた。麻子が顔を上げる。そこには、善之の笑顔があった。

「なんか、声をかけられていたみたいだね」AV女優にスカウトされそうになった場面を善之は目にしていた。

「えっ、見ていたの？」麻子が、驚いたような表情を浮かべる。

「女優になりませんかみたいな言葉が聞こえてきたけど」善之が、断片的に聞こえてきた言葉を口にした。

「うん」

「すごいじゃん、女優にスカウトされるなんて」

「でも、女優って言っても、普通の女優じゃなくて、その……、エッチな女優だから」

「エッチな女優？ ひょっとしてAV系か？」善之の問いかけに対して、麻子が、恥ずかしそうに頷いた。

「えっ、それで、なんて返事をしたの？」

「なんてって、断ったに決まっているでしょ！」麻子が、拗ねたような表情で善之のことを睨む。

「そりゃそうか」善之は、笑いながら軽く麻子の肩を叩いた。

「行こうか」善之が、麻子を促した。二人が並んで歩き出す。

善之の横顔に視線を当てた麻子が、言葉を発した。

「腕組んでもいい？」

「えっ？ 別にいいけど」

善之が、左ひじを軽く曲げ、手のひらを腰に当てた。腕と脇腹の隙間に開いた空間に、麻子がそっと腕を絡ませる。そのまま、二人はサンシャイン通りに向かって歩き始めた。

通りは、ショッピングや街歩きを楽しむ歩行者たちであふれ返っていた。そんな歩行者たちに訴えかけるように、ビルや店舗が個性的なファサードを演出する。そんな中、善之は立ち止ることなく目的地に向かって歩を進めた。腕を組んだ麻子も、曳かれるように歩調を合わせる。

やがて、二人の目の前にカラフルな外壁のファッションビルが現れた。ショーウィンドウの内側から、最新ファッションに身を包んだマネキンが通りに顔を向けてくる。

「入るよ」善之が声をかけた。

二人はエレベーターホールに向かった。エレベーターに乗り込み、七階のボタンを押す。七階はジュエリーフロアーであった。

エレベーターが七階に到着し、二人はフロアーに足を踏み入れた。二人の目の前に、アクセサリーや貴金属類が収められた陳列ケースが広がる。戸惑いの表情を浮かべる麻子に対して、善之が、ここが第一目的地であることを告げた。

「まずは、誕生日のプレゼントを買います」

「プレゼント？」

「うん。麻子、指輪とか全然はめていないだろう？ でも、麻子の指綺麗だし、指輪が似合うと思うんだ。だから、買ってあげようかなと思ってね」

「ほんとうに？」

「うん。値段とか気にしなくていいから、自分が好きな指輪を選べよな」そういうと、善之は麻子の腕を曳いた。

二人は、順番に陳列ケースの中を覗き込んだ。気になるリングを目にするたびに、店員に声をかけ、陳列ケースから取り出したリングを麻子の指にはめる。そのたびに、「似合う?」、「似合っているよ」という会話が、二人の間で交わされた。

三十分近く迷った末に、麻子がプレゼントのリングを選んだ。プラチナ素材で作られたリングであり、台座部分には小さく散りばめられたダイヤの中央に青い輝きを放つラピスラズリがはめ込まれていた。

「メッセージリングの刻印はできますか?」善之は、店員に確認した。

「できますが」

「この場でしてもらえるのですか?」

「はい。三十分ほど、お時間を頂戴いたしますが」

「それじゃ、お願いします」善之は、メッセージリングの刻印を依頼した。メッセージの内容は、今日の年月日とY t o Mのイニシャルであった。

リングにメッセージが刻印された。店員が、注文通りのメッセージが刻印されたことを二人に確認させる。

「今すぐおはめになりますか? それとも、いったんケースにしまわれますか?」店員が、麻子に向かって指輪をすぐにはめるかどうかの確認を行う。

「もうはめます」そう答えた麻子が、指輪を摘まみ、右手の薬指にはめた。空のケースをバッグの中にしまう。

二人はエレベーターに乗り込んだ。エレベーターの中には、他の乗客の姿はなかった。一階のボタンを押す。エレベーターが、静かに動き出した。

善之は、そっと麻子の右手を取った。指輪のはめられた薬指を眺める。

「似合っているよ」善之が、満足そうに声をかけた。

「ありがとう」麻子も、薬指に視線を向ける。

善之が、麻子の右手からそっと手を放した。静かに降下したエレベーターが、途中どこのフロアーにも停車しないまま、一階に到着した。

7.

ファッションビルを出た善之は、麻子をサンシャインシティの横に立つセンチュリータワーホテル最上階のイタリアンレストランに誘った。五年前に建てられた地上四十五階建てのホテルであり、最上階のフロアーにはイタリアンの他にフレンチ、中華、和食懐石、鉄板焼きの店が入居していた。いずれも高級店ばかりである。

善之は、ここのイタリアンレストランに午後六時から予約を入れていた。店の入り口で名前を告げる。白地のシャツに黒の蝶ネクタイをつけ黒地のスーツに身を包んだ店員が、恭しく二人を席に案内した。

二人には、夜景の見える窓際のテーブルが用意されていた。百八十度見渡せる視界には、都会のネオンが織りなす光の海が広がっている。

店員が、コース料理の説明を始めた。飲み物の注文を聞かれた善之が、シャンパンリストを手に取り、シャンパンを注文する。

店員が、注文したシャンパンのボトルをテーブルまで運び、二人のシャンパングラスに注いだ後、栓をしたボトルをシャンパンクーラーにセットした。それと同時に、一品目の前菜の皿が運ばれてくる。カルパッチョや生ハム、チーズといった前菜が盛合さったオードブルセットであった。

二人は、シャンパングラスを手を取った。「麻子の二十歳の誕生日を祝して乾杯！」善之が、乾杯の音頭を取る。グラス同士が触れ、チャリンという澄んだ音を立てた。二人の喉を、甘さとキレの合わさったシャンパンが心地よく潤す。

「美味しい！」グラス半分のシャンパンを飲み干した麻子が、グラスを置いた。

「もう二十歳になったんだから、大っぴらに酒が飲めるね」善之が、悪戯っぽく笑う。

「そうかあ。もう、二十歳になっちゃったんだ」

「二十歳になりたくなかった？」

「ううん、そうじゃないけど。でも、もう十代が終わっちゃったのかと思うと、なんか寂しくて」

「そんなものなのかな……」善之は、自分が二十歳の誕生日を迎えたときのことを思い返していた。あのときは、素直に大人になれたことを喜んだ。しかし、男と女では感じ方が異なるのであろう。麻子の顔には、複雑な表情が広がっていた。

「ねえ、私って二十歳に見える？」善之の瞳を覗き込むように麻子が問いかけた。

「そうだなあ……、見えるかな」麻子の顔全体を眺めた善之が返事をする。

「どんなところが二十歳に見えるの？」

「たとえば、そうやってグラスを口にしているところなんかは、大人の女っぽく見えるかな」

「今までの私と、どこが違うのかな？」

「なんだろうな。なんとなく様になっているというか……」善之は、そう口にした。

麻子とは、今まで何度か酒を共にしたことがあった。手料理を作りに来てくれたときに部屋で一緒に飲んだこともあり、二人で外食をしたときに酒を注文したこともあった。今までは、どことなくぎこちなさの残るような飲み方のように感じていたのだが、今日の前でグラスを手にする麻子の表情には、ぎこちなさは感じられなかった。

店内の高級感や美しい夜景の広がるムードがぎこちなさを掻き消しているせいもあるのだろうが、二十歳になったということを意識した自分自身が自然と大人の女性をイメージしてしまっているせいもあると善之は思った。

麻子のシャンパングラスが空になった。善之が、麻子のグラスにシャンパンを注ぎ、その後、自分のグラスにもシャンパンを注ぐ。グラスを手にした麻子が、シャンパンを口元に運んだ。

「今日は、飲むピッチが早いね」善之が、いつもより酒を飲むペースが速いことを指摘する。

「なんか美味しくて、ついつい……」麻子が、言い訳を口にした。

「あんまり飲みすぎたら、料理の味がわからなくなるぞ」

「わかりました。気をつけます。でも、私、こんなにすごい店に来たのは初めて」

「そうなんだ」

「お兄ちゃんは、こういう店よく行くの？」

「よくは行かないけど、何度か行ったことはあるかな」

「へえ。こういう店に行くときは、やっぱり女の人と行くの？」

「まあな。こういう店に男同士で入るのがって変だろう？」

「そうかもね」笑いながら言葉を返した麻子であったが、心の中は、ジェラシーが駆け抜けていた。再び、善之に問いかける。

「この店も、前に来たことあるの？」

「いや、この店は初めてだよ。今日のために、いい店がないかなって必死に探したんだ」

善之は、インターネットやツイッター、フェイスブック上の口コミをかき集めながら店を探し当てた経緯を説明した。麻子が、耳を傾ける。そこまで手間をかけて自分のために店を探してくれたという言葉に耳にした麻子の胸の中に、心地よい風が吹き抜けていった。

料理のコースが進んだ。シャンパンのボトルが空になり、善之は、追加の白ワインを注文した。

グラスが交換され、ワインクーラーにセットされた白ワインのボトルが運ばれてくる。最初の一杯目は、店員がサーヴした。シャンパンとは異なる、酸味とコクのある風味が口の中に広がった。

麻子が、指輪をはめた右手の薬指に視線を落とした。その様子を目にした善之が、声をかける。

「その指輪、ほんとうに麻子の指に似合っているよ」

その言葉に、麻子のはにかんだように右手をかざした。そんな麻子に、善之が話しかける。

「指輪と違って、持っていなかったの？」

「おもちゃみたいな指輪はあるけど、こんなちゃんとした指輪は初めて」

「買ってくれる男性(ひと)とかいなかったのか？」

「うん」

「ふうーん。そうなんだ」善之は、麻子の顔に視線を当てた。善之の胸の中で、意外だという思いが広がっていた。

麻子は、内面的にも外見的にも魅力的な女性である。かといって、そのようなことを鼻にかける風でもなく、とっつきにくさも感じられない。そんな彼女に言い寄ってくる男性もたくさんいたのではないだろうか。そのような中から、指輪を送る男の一人や二人いても不思議ではないと思っていた。

しかし、以外にも男性から指輪などをプレゼントされたことはないという。そればかりか、二十歳の誕生日という特別な日を一緒に過ごすような男性の姿も感じられない。

善之の胸の中で、麻子のことをミステリアスに感じる思いが広がっていた。

「そろそろ出ようか」善之が、言葉を発した。

コース料理最後のドルチェも食べ終え、二人は、空のコーヒーカップを弄びながら静かに会話を楽しんでいた。時計の針は、午後八時四十五分を指していた。

麻子は知らなかったが、善之は、ディナーの後のサプライズも用意していた。

会計を済ませた二人がエレベーターに乗り込む。善之は、二階のボタンを押した。「二階？」麻子が訝しげな表情を浮かべる。来たときは一階のホールからエレベーターに乗ったはずである。

「二階になにがあるんだろう？」麻子は、思考を巡らせた。横にいる善之もなにも語らない。答えの出ないまま、エレベーターは二階に到着した。そこは、ホテルのロビーであった。

「ここで待っていてくれないか」声をかけた善之が、ゆっくりとした歩調で、フロントカウンターに向かって歩き出した。麻子の目線の先に、フロントスタッフとやり取りをする善之の背中が映る。

やがて、善之が麻子のもとに戻ってきた。指先でキーホルダーのついた鍵を摘まみ、チラチラと振って見せる。

「実は、ここのホテルの部屋を取っておいたんだ。高層階のジュニアスイートルーム。夜景がばっちりの部屋のはずなんだ。たまには麻子と、こういうところで過ごすのもいいのかなと思ってね」善之が、第三のサプライズの種明かしをした。

善之の言葉を聞いた麻子の胸の鼓動が高鳴った。呼吸が息苦しくなる。今まで善之と二人で一夜を過ごしたことがないわけではなかった。自分が善之の家に泊まったこともあり、その逆もあった。

初めて善之の家に泊まったときは多少の緊張は感じたものの、息苦しさを覚えるようなことはなかった。勝手を知った家で一夜を明かすだけのことだったからだ。善之も、普段通りの態度で接してきた。

今の善之も、普段通りの態度である。家の中で食事を済ませたのちにお酒かお茶を飲み、しばしの時間会話を楽しみ、その後眠りにつくときの感覚でいるはずだ。

しかし、麻子は、そのような感覚でいることができなかった。男性経験がなく、もちろんのこと男性とホテルに泊まった経験もなかったが、男女がホテルで一夜を過ごすことの意味は理解していた。

特別な日に指輪をプレゼントされ、夜景の美しい最上階のレストランで高級ディナーを堪能したのちにホテルの部屋で一夜を過ごすというシチュエーションに、否が応でも男としての善之を意識せざるを得なかった。そんな気持ちのまま二人で一夜を過ごすと、自分がどのような言動を取ってしまうかわからない。

麻子の胸の中に、これから二人で甘い時間を過ごせることへの喜びと自分の言動への不安が交錯し、渦を巻いていた。

フロントでアサインされた客室の前に立った善之が、ルームキーを鍵穴に刺し込んだ。カチッという音とともに、ドアが開錠する。

目の前に、開放的な空間が広がった。広い窓の外で東京の夜景が幻想的な輝きを放ち、その夜景を堪能できるような位置にソファとテーブルがセットされている。

二人は、ソファに腰掛けた。しばしの時間、夜景を堪能する。

「この部屋はね、いろいろなカクテルが楽しめるんだ」善之が、夜景とは反対方向を指差した。視線の先にはバーカウンターらしきものがあった。カウンターの奥に据え付けられた小棚に、缶に入れられたカクテルドリンクやカクテルグラスが並べられている。

「カクテルを飲みながら夜景を堪能するっていうのもいいでしょ」善之が、麻子に視線を向けた。

「そうね」麻子が頷く。

「飲む前にシャワーを浴びようか。オレから先に浴びるね」そう言うと、善之はシャワールームに姿を消した。静かな部屋に、善之のシャワーを使う音が漏れ聞こえる。

麻子は、胸の中の渦を治めるように、じっと夜景の一点を見つめていた。

善之がシャワーを終えた。バスローブに着替えた善之が、ソファに腰を落とす。入れ替わるように、麻子がシャワールームに向かった。

一息ついた善之は、ソファから立ち上がり、カクテルタイムの準備を始めた。テーブルにカクテルグラスを二つ並べ、カクテルメニューとマドラー、アイスクラッシャーを用意する。

しばらくして、麻子がシャワールームから出てきた。洗面ルームでドライヤーを使用する音が聞こえてくる。

麻子がシャワーを終えたのを確認した善之は、フロアーごとに設置された製氷機から氷を取り出し、アイスペールに詰めた。部屋に戻り、氷の詰まったアイスペールをテーブルの上に置く。

間がなく、洗面ルームからバスローブに着替えた麻子が出てきた。カクテルタイムの準備が終了されたソファに腰を落とす。

カクテルメニューを手にした善之は、麻子に飲みたいカクテルを問うた。麻子が、モスコミュールをリクエストする。

善之は、棚からモスコミュールとドライマティーニを一缶ずつ手に取り、アイスクラッシャーで砕いた氷をカクテルグラスに敷き詰め、その上に缶のカクテルを流し込んだ。二人のカクテルが出来上がる。

「飲もうか」ドライマティーニのグラスを手にとった善之が声をかけた。麻子も、モスコミュールのグラスを手取る。

「じゃあ、改めて、二十歳の誕生日おめでとう！」善之が、グラスを差し出した。

「ありがとう」麻子が、グラスの淵を合わせる。

二人は、静かにカクテルを喉に流し込んだ。遠くを見つめるような目をした善之が語りかける。

「お父さんとお母さんが今の麻子を見たら、きっと驚くだろうな」

「どんなふう？」

「三年間で、ずいぶんと大人っぽくなったねって」

「そんなに三年間で変わったかしら？」

「そりゃ変わったよ。仕草とか雰囲気とかがね」

「そうかな」

「うん、自分では気づかないだろうけれども。オレ、お父さんに初めて麻子の写真を見せてもらったとき、たしか高校に入ってすぐの麻子の写真だったと思うけど、そのときの麻子は、いかにも少女っていうような顔つきだったもんな」

「どのときの写真を見たのかな？」

「たしか、ブルーっぽいワンピースを着た写真だったかな。背景に山や河原が映っていたような気がするけど」

「じゃあ、夏に家族で旅行をしたときの写真かもしれない。高校一年の夏に、家族で上高地に旅行したから」

「そうなんだ。ちなみに、麻子が初めてオレの写真を見たのって、幾つぐらいの時？」

「中学二年のときだったと思う。お父さんの書斎を掃除していたら偶然お父さんとお兄ちゃんが一緒に映っている写真を見つけて、それでお父さんに聞いたら事情を話してくれたの」

「びっくりしただろう。いきなり兄がいますなんて言われて」

「そのときは驚いたけど、でも、なんとなく他に兄弟がいるような気がしていたんだ。たまにお父さんが、男の子が喜ぶようなおもちゃとか漫画を買って帰ってきたのを見たこともあったし」

「女の勘は鋭いな。お母さんはどうだったんだろう？ 感づいていなかったのかな？」

「たぶん感づいていなかったように思う……」

二人は、しばしの時間、昔の思い出話に花を咲かせた。

二人の会話が途切れた。テーブルの上に、カクテルの空き缶が並ぶ。アイスペールの中の氷が解け始めた。

中身の薄くなったグラスを弄ぶ善之の心に、麻子のプライベートなことを聞いてみたいという思いが湧き上がってきた。ディナーのときに交わした会話が思い浮かんでくる。「男性から指輪をプレゼントされたことなどない」と言った麻子の声が甦ってきた。そのとき、麻子のことをミステリアスに感じる思いを抱いたのである。

善之は、軽い口調でしゃべり始めた。

「これから、麻子に関することの質問タイムに入ります」

「えっ、それってなに？」意味がわからないというような表情で、麻子が聞き返す。

「麻子のプライベートな話も聞いてみたいなと思ってね」

「プライベートな話って、いつもしているけど」

「でも、恋愛話とか聞いたことないしさ。それとも、こういう話に触れられるのは嫌か？」

「そんなことはないけど」

「じゃあ、たまには恋愛に関する質問をしてみようかな。質問その一、彼氏いない歴何年、あるいは何カ月ですか？」

「……二十年」

「えっ、に、二十年？　じゃあ、今まで男の人と付き合ったことがないってこと？」

「うん……」麻子が、恥ずかしそうにうつむいた。善之が、驚きを隠せない表情で言葉を続ける。

「ほんとうに？　信じられないなあ。麻子は、ほんとうに可愛いし、女らしいし、スタイルもいいし、男が放っておくはずがないと思うんだけどな。付き合ってくれて言われたこととかはあるんでしょ？」

「……何回かは」

「でも、付き合わなかったんだ」

「付き合いたいと思わなかったし」

「ふうーん。ちなみに、今、好きな人はいるの？」

善之に聞かれた麻子の胸の鼓動が早まった。息苦しくなる。

自分の好きな人とは善之のことである。その好きな人から、「好きな人はいるのか？」と聞かれている。麻子は、息苦しさの中から声を絞り出すように「うん」という言葉を発した。

麻子の苦しみに気がつかない善之が、さらに追い打ちをかけるような質問を投げかける。

「その人は、麻子の気持ちに気がついているの？」

「たぶん……、気がついていないと思う」

「そうか。その人との仲が上手くいけばいいのになあ」

その言葉を聞いた麻子の瞳から涙があふれ出した。胸の中を切なさが支配し、押しつぶされそうになる。

そんな麻子の変化に、善之は気がついた。動揺したように、「ごめん、辛いことを聞きちゃったか」と口にしながら、麻子の髪をなでる。「辛いことがあるんだったら、オレでよかったら話を聞くからさ」と声をかけながら、善之が麻子の肩を軽く抱く。

そんな善之の優しさに、麻子の心の中でせき止めていた思いが破裂した。顔を上げ、涙で濡れた顔を善之に向ける。

「お兄ちゃん。私がなにを言っても、私のことを嫌いにならない？」

「なるわけがないだろう。オレが、麻子のことを嫌いになるはずがないじゃないか！」

「絶対？　絶対に私のことを嫌いにならない？」

「ならないよ」

「約束して」

「約束する」

善之は、麻子が立てた小指に指を絡ませた。麻子が、押し出すように言葉を口にする。

「私、私、お兄ちゃんのが大好き。好きで好きでたまらない。でも、そんなことを言ったら、お兄ちゃんに嫌われると思って言えなかった。でも、もう、心の中にしまっておくのが辛い……」

「麻子……」

「私、ずっとお兄ちゃんのそばにいたい。お願い、そばにさせて」

「……麻子。ずっとオレのそばにいろよ」善之は、麻子の身体を抱きしめた。麻子が、善之の胸に顔を埋める。善之の鼻腔に、麻子から発せられる甘い香りが広がった。

そのとき、善之の身体を熱い衝撃が突き抜けた。心の奥底で密かに封印されていた本能的なマグマが、なにかをきっかけとして噴火したような感覚であった。善之の両手が、麻子のうなじを抱える。

「麻子、顔を上げてごらん」善之が言葉を発した。麻子が顔を上げる。

「目をつむっていて」善之の言葉に、麻子は目をつむった。善之が、そっと唇を重ねる。左手で麻子の頭を抱え、右手で身体を抱える。

二人の舌が絡まりあった。善之の麻子の身体を抱きしめる力が強まる。麻子も、善之の背に手をまわしながら力を込めた。

## 第4章 永遠(とわ)のメッセージ

---

1.

二人が、長い口づけを終えた。互いの唇が離れる。麻子が、善之の首筋に手を回し、肩に顔を埋める。そんな麻子の髪を、善之は優しく撫でた。

言葉を口にしないまま、二人は甘い余韻に浸っていた。静かな時間が二人を包み込む。

再び善之が、麻子のことを力強く抱きしめた。麻子も、首筋に回した手に力を込める。その体制のまま、二人は、しばしの時間身体を密着させた。

しばらくして、善之が「そろそろベッドに入るか？」と声をかけた。

リビングルームに隣接したベッドルームには、クイーンサイズのベッドが二つ並んでいた。歯を磨いた二人が、リビングルームの電気を消し、ベッドルームに移動する。善之は、左側のベッドに潜り込んだ。そんな善之に向かって、麻子が甘えるように声を出した。

「私も、お兄ちゃんのベッドと一緒に寝てもいい？」

「いいけど、狭くないか？」

「一緒に寝たいの」

「わかった」善之が、身体をずらす。もともとクイーンサイズの大きさがあり、善之の横に一人分のスペースができた。

一緒にベッドに入った麻子が、善之の身体に密着する。そのまま、向き合った善之の胸に顔を埋めた。善之は、そっと麻子の背に腕を回した。

「おやすみ」麻子がささやいた。

「おやすみ」善之がささやき返す。

しばらくして、麻子の寝息が聞こえてきた。吹き付ける甘い体臭や肌越しに伝わる身体の感触に男としての戸惑いを覚えた善之であったが、やがて眠りの世界に誘われていった。

その日以来、二人は、逢うたびに口づけを交わすようになった。

一見、今までと何ら変わらないような時間が二人の間を流れていた。別々の家で暮らし、逢わないときはメールのやり取りを行う。週に一度か二度は、麻子が善之のもとを訪れ、料理や掃除、洗濯をする。善之の家に泊まる頻度は増していた。

善之も、大学の用事で帰りが遅くなったときなど、ときたま麻子の家で一夜を明かした。

月に何度かは、二人で、ショッピングやレジャー、外食を楽しんだ。

麻子の顔からは、心の荷が降ろせて楽になったというような表情が窺えるようになった。以前よりも、二人でいるときの麻子の口数が増える。

しかし、それとは逆に、善之は、胸の苦しみを覚えるようになっていた。

二人で過ごす時間の中で、最初に顔を合わせたときに、あるいは別れるときに、二人は熱い口づけを交わした。唇が離れた後も、しばしの時間熱い抱擁を交わした。しかし、そこから先はなかった。

善之は、逢うたびに女としての麻子を意識するようになっていた。彼女は、外見的にも魅力的

な女性であった。整った美しさの中に可憐な面影が同居し、そのルックスをスタイルの良さが引き立てている。抱きしめたときに、常に甘い体臭を発する。熱く抱擁を交わしたのちにそっと身体を離すことに、善之はジレンマを感じていた。

今や、麻子は、妹ではなく女になりつつある。そのまま、女としての麻子を抱いてみたい。麻子も、善之に抱かれることを願っているはずである。善之には確信があった。

しかし、善之は、麻子を抱くことができずにいた。道徳的な観点から躊躇しているのではなかった。一線を越えてしまった先に、なにか取り返しのつかないような結果が待ち受けているのではないかという不安を覚えていたからだ。

今は、二人は精神的な絆でしっかりと結びついている。たとえ今のような状態で二人寄り添って生きていったとしても、間違いなく精神的に支え合っていける。

しかし、今以上の関係を持ってしまった場合、二人の絆は、どのように変化していくのだろうか。肉体関係を持つことが、精神的な結びつきを破壊し、怠惰で成り行きの関係をズルズルと続けてしまうことにつながっていくのではないだろうか。

麻子が、将来的に二人の関係をどのようにしていきたいと思っているのかは善之にはわからなかった。男としての気持ちは、麻子のことを抱きたい。心のみならず、身体も支配したい。間違いなく、自分が求めれば麻子も拒まないだろう。

しかし、麻子のほんとうの気持ちを知らないまま流れで行きつくところまで行ってしまうと、結果的に麻子のことを破壊してしまうのではないかという気が善之にはしていた。

麻子と逢うたびに、善之は葛藤を繰り返していた。口づけの後の抱擁で、背中に回した手が、何度も麻子の腰に動きかけては止まった。そのままの状態、麻子の身体から腕を離す。

善之には、麻子のほんとうの気持ちを知る時間が必要だった。しかし、日常的な時間の中では、そのようなきっかけは作りづらい。反面、日常を離れた環境でまとまった時間を二人で過ごすことができれば、麻子のほんとうの気持ちを知ることができるのかもしれない。

「一度、麻子と旅行がしたいな……」ある程度のまとまった時間を麻子とともに旅をし、日常を離れた環境の中で、これからのことについて互いの心の内を明かし合うことが必要なのではないかと善之は感じていた。

## 2.

五月の終わり、麻子が、友人と四人で一泊二日の旅行をすることになった。

父親に車を買ってもらった友人の一人がドライブに行こうと誘ったのがきっかけであった。誘われたのは、麻子と親友の佐久間知美、最近になって仲良くなったクラスメイトの三人であった。行き先は、千葉の館山に決まった。

ドライブに誘った友人の姉夫婦が館山でペンションを営んでおり、前々から一度遊びに来るようと言われていたこともあり、四人で泊まることにした。東京からのドライブを楽しみ、ペンションで美味しい手料理をご馳走になる。

二日目は、姉夫婦の勧めで、コインペンダント作りを体験することになった。ペンションの近くにある雑貨店が最近になって体験教室を始めたということであり、四人は、東京に帰る前にペ

ンダント作りを体験することにした。

ペンダント作りは、表に一種類の花の図柄が刻印された直径五センチほどの円形のコインに好きな花の図柄を彫り、チェーンを通して完成させるものであった。館山は、年間を通して花が咲き誇ることで有名な街である。そのことを意識した体験教室であった。

四人は、ベースとなるコインを選んだ。麻子は、中央にチューリップの図柄が刻印されたコインを手にした。

作業台の上には、体験者が花の図柄を彫るときのために、何種類もの花の写真とともに彫り方を説明した解説本が置かれていた。四人は、彫る花を決め、解説本を手にとった。コインの大きさとの関係上、選べる花は、せいぜい三種類までであった。

麻子は、善之にプレゼントするためのペンダントを作るつもりでいた。

麻子の心も揺れ動いていた。

二十歳の誕生日の夜、善之に想いを打ち明けた。善之も自分の想いを受け止めてくれたようであり、二人の絆は一層強くなった。

今や、自分にとって、善之がすべてであった。常に善之のそばにいたかった。一人の女として善之に愛されたいという思いが強かった。

あれから二人で過ごす時間を意識して増やしているわけではなかったが、一回一回の時間が濃密になった。胸の中の重しがなくなり、麻子は、精神の充実を感じていた。

しかし、麻子の本心は、善之が幸せな人生を歩むことであった。善之は、自分と同様早くに両親を亡くし、自分以外の身寄りもない。そんな善之には、人として幸せな人生を歩み続けてほしいと心から願っていた。自分も、善之が幸せな人生を歩むための手助けをし続けたい。

そんな麻子の心に、迷いが生じるようになっていた。

自分という存在が、善之にとって心身の安定を与えていることを確信していた。これからも与え続けられる自信もある。しかし、自分たちは兄妹だ。この事実、一生消えることはない。互いに支え合うことはできても、一緒に家庭を持つことはできない。善之が男としての人生を歩み続けるとき、家庭という存在が必要になるときが来るのではないだろうか。

善之もまだ若い。これからも、いろいろな出会いがあるだろう。今の善之を支えることはできても、今後男として充実した人生を歩んで行こうとしたときに、自分という存在が邪魔をしてしまうときが来るのではないだろうか。

善之と初めて口づけを交わしたときから、麻子の心の中で葛藤が生じていた。それ以来、自問自答を続けていた。

そして、最近になって、麻子は気持ちの整理をつけた。善之の人生を邪魔することなく、そして自分自身も後悔しない生き方を見つけたのだ。その思いを胸に、麻子はペンダントの図柄を選んだ。

「ねえねえ、彫る花を決めた？」隣で解説本に目を通していた知美が麻子に問いかけてきた。バラの図柄が刻印されたコインを選んだ知美は、スズランとりんどうの花を彫ることにしたとい

うことであった。

「うん。カキツバタと葉牡丹にする」

「カキツバタと葉牡丹？ なんだか、ちぐはぐな感じがするけど」中央のチューリップとの一体感が感じられないという意味の言葉であった。

「三つとも好きな花だから」麻子が、言葉を返す。

ほんとうは、三つの花を選んだ理由は別のところにあったのだが、口にしなかった。親友の知美には、好きな人に想いを打ち明け、そして受け入れられたという話はしていた。しかし、相手は、あくまでも兄の友人ということになっていた。

麻子の恋の進展を喜んだ知美は、ことあるごとに積極的に行動するようにと意見した。麻子も、彼女の言葉に真剣に耳を傾けていた。

しかし、今の自分の気持ちは、ある意味知美の意見とは反対方向の内容であった。その気持ちを表すための図柄選びだったのだが、そのことを口にしても理解されることはないだろうと思い、口にしなかった。

ペンダント作りは、思いのほか時間がかかった。コインを彫るための彫刻刀を手にし、一つ一つの細かい作業を積み上げる。四人とも、一言もしゃべることなく、一心不乱に彫る作業を進めた。

表の図柄を彫り終えた四人は、ペンダントの裏面に刻印を入れた。それぞれ、今日の日付やイニシャルなどを刻印する。

麻子も、善之が指輪をプレゼントしてくれたときになって、今日の日付とM t o Yのイニシャルを刻印した。友人たちが、互いの刻印の意味を詮索しあう。麻子も、好きな人にプレゼントするために作ったことを打ち明けた。

### 3.

館山から戻った麻子は、さっそくペンダントを善之に渡すことにした。手料理を振る舞う目的で善之のもとを訪ね、旅行の土産話とともにペンダントを手渡す。

「ありがとう。大事にするよ」善之は、嬉しそうにペンダントを首からぶら下げた。胸元で揺れるペンダントを手に取り、表の図柄のことを麻子に問う。

「この図柄ってなに？ 中央にあるのはチューリップだと思うけど、両サイドにある花は、なんの花かわからないな」

「カキツバタと葉牡丹よ」

「カキツバタと葉牡丹？」善之は、首をかしげた。彼には馴染みのない花の名前であった。

麻子が、カキツバタと葉牡丹について説明する。カキツバタは初夏に咲くアヤメ科の多年草であり、葉牡丹は冬に咲くアブラナ科の越年草だった。麻子の説明に、善之が相槌を打つ。

「なんでまた、チューリップとカキツバタと葉牡丹の組み合わせなわけ？」説明を聞いた善之が、三種類の花を選んだ理由を問う。

「私の好きな花だから」親友の知美に聞かれたときと同じ答えを麻子は口にした。善之の何気

ない質問に、麻子の心は動揺していた。

この花の組み合わせには、これからの二人の関係に対する自分の思いが込められていた。しかし、今その思いを上手く説明できる自信はなかった。

幸い、善之が動揺に気づくこともなく、ペンダントにまつわる会話は終了した。

館山旅行の話をつかされた善之は、二人で旅行をしたいという話を切り出した。

「今度、オレたち二人で旅行に行かないか？」

「旅行に？」

「うん。考えてみれば、二人で旅行をしたことは一度もないし、館山に行った話を聞いていて、麻子と二人で旅行に行きたいなって思ったんだよ」

「うん、行きたい」

「行くなら、計画を立てなければならないな。今からだと、やっぱり夏かな」

「そうね。どうせ旅行するならできるだけ長く行っていたいから、やっぱり夏休みにならないと無理かもね」麻子が、夏休み期間中が望ましいという意見を口にした。

こうして二人の間で、夏休み期間中に一週間程度の時間をかけて旅行をすることが決まった。

「問題は場所だな。どこか行きたいところある？」

「国内？」

「もちろん」二人は、パスポートを取得していなかった。加えて、善之は大の飛行機嫌いであった。

「具体的にどこがっていうわけじゃないんだけど、人気のない場所で、ゆっくりと日本海を眺めてみたいなっていう気持ちはあるわ」麻子が、漠然とした希望を口にした。

「人気のない日本海か。でも、そんなところたくさんあるしな。イメージ的には、どのあたりがいいの？」

「そうだなあ。北陸か東北辺りかな」

「北陸と東北か。ネットで調べてみるか」善之がパソコンに向かい、ネットで検索を始めた。ネット上に、個人の旅の記録や感想などを綴ったページがたくさん公開されていた。

その中から、善之は、北陸や東北地方の日本海沿いを旅した人のページを探した。表示された個人のページにアクセスする。その中で、能登半島を一周した人のページが二人の目に止まった。周囲の景色を写した写真が何枚も映し出されている。そこには、荒々しい日本海を写した写真もあった。

「能登地方って、前から憧れていたのよね。金沢とか輪島に行ってみたいな」能登半島一周のページを堪能した麻子が、甘えるように口にする。

「よし、わかった。それじゃ、能登を満喫する旅にしようか？」

「うん、そうしよう」行き先は能登に決定した。行き先を決めた二人が、旅行計画作りに取り掛かる。

「どっちにしても、まずは金沢に出なきゃいけないね」

「東京から金沢って、どうやって行くの？」

「上越新幹線で越後湯沢まで行ってそこから在来線の特急に乗っても行けるし、東海道新幹線で米原か京都まで行ってそこから在来線の特急に乗っても行けるし、たしか高速バスもあったと思う。でも、バスはしんどいよな？ 時間もかかるし」

「そうね。長時間バスに乗るのは避けたいな」話し合いの結果、二人は、上越新幹線と在来線特急で金沢に行くルートを選択した。

続いて、宿泊地の検討に入る。観光は、金沢でレンタカーを借りて能登半島を一周することにした。

「ということは、初日と最終日は金沢に泊まるのがいいのかな……」善之が、金沢を起点として観光する形がよいということを示唆する。

「温泉にも行ってみたいな」麻子も希望を加える。

その結果、旅行期間中の宿泊地が確定した。六泊七日の旅であり、初日は金沢、二日目は輪島、三日目は穴水、四日目と五日目は和倉温泉、そして最終日に金沢に宿泊する計画であった。

宿泊地を決めた二人は、宿泊地ごとに宿泊施設を調べた。宿泊予約サイトで、ホテルや旅館の検索を行う。旅行シーズンということもあり、価格設定もまちまちであった。施設やサービス内容、混み具合などを比較しながら、宿泊施設を絞り込む。決定した宿泊施設に予約を入れる。

こうして、七月二十八日に出発する六泊七日の旅の旅行計画が完成した。

二人は、まだ見ぬ能登の光景に想いを馳せた。

#### 4.

能登巡りの旅行が決まった後、二人は、顔を合わせるたびに旅行の話題を口にしていた。

麻子は、心の底から旅行を心待ちにしているようであり、早々にガイドブックを買い観光情報を調べ始めた。目新しい発見をするたびに、善之に知らせてくる。

善之も、インターネットでの検索を繰り返した。

二人の間で、能登巡りのイメージが肉付けられていく。

しかし、旅行が近づくにつれて、あることが善之の心を悩ますようになっていた。それは、旅行を共にすることで、麻子との間で一線を越えてしまうのではないかということであった。

旅行に行けば、日常感覚を離れた環境で時間を共にすることになる。夜を過ごす場所もホテルや旅館である。男と女が自然に身体を合わせられるムードや設備が整っている。そのような場所で一夜を共にすることで、成り行きで麻子のことを抱いてしまうかもしれない。

男としての善之は麻子の身体を求めたかった。もはや、妹という意識よりも女という意識の方が勝っていた。麻子も、そうなることを望んでいる節がある。

しかし、今回旅行に行くことを切り出した一番の目的は、二人の関係に対する麻子の本心を知ることであった。そのためには、自然に話しのできる雰囲気が必要である。日常生活の中でいきなりこのような話題を切り出しても、麻子も答えに窮するであろう。

また、麻子の気持ちを問うのであれば、自分自身の気持ちも整理がついていなければならない。

善之は、麻子との関係に関して、気持ちの整理ができていなかった。今だけの気持ちを問われ

れば、彼女なしでは生きていけないと答えるであろう。精神面の支えでもあるし、女としての魅力も充分すぎるからだ。

麻子から想いを打ち明けられたとき、「ずっとそばにいさせて」という言葉を投げかけられた。そのときは「そばにいろよ」という言葉を返したのだが、今は「そばにいてくれ」という気持ちであった。これから先、二人で支え合いながら生きていきたいという気持ちが強くなっていた。

しかし、自分たちは兄妹である。血のつながりだけは、消したくても消すことができない。今はこのような関係でよいのかもしれないが、お互いが大学を卒業して社会人になり、その後歳を重ねていく中で、麻子との関係をどのように維持していけばよいのかが善之にはわからなかった。

一線を越えてしまえば、男としての責任が生じる。ましてや、彼女自身の言葉によれば男性経験がないということであった。

麻子には、これから様々な出会いがある。容姿が端麗で人間としても魅力的な彼女の周囲には、今後たくさんの男性が現れるだろう。その中には、家庭を持つのにふさわしい男性もいるはずだ。

今ならまだ、心の絆を持ち続けながら、いつの日か互いに家庭を持った上で人間らしい人生を歩んでいくことは可能である。しかし、一線を越えてしまえば、それ以降どうになってしまうかわからない。墮ちるところまで墮ちてしまうのかもしれない。そうなれば、女性である麻子のほうが大きな代償を背負うことになる。

本能と理性との狭間で、善之の心は揺れ動いていた。

七月に入った。気象庁の発表によると、今年は梅雨明けが平年よりも早くなりそうだということであり、七月の下旬は全国的に晴天になる可能性が高いということであった。

大学が夏休みに入るのは七月二十日を過ぎてからだが、休みに入る前に学内での試験があった。麻子が通う大学も同じような状況であり、二人は試験勉強に追われていた。旅行のことが一時的に意識から遠のき、頭の中が試験一色になる。深夜まで、教科書やノートと格闘する日々が続いた。

そして試験が終了した。あとは、いくつかのレポートを作成して担当教授に提出すれば夏休みに入るのである。試験が終了すれば、実質授業はない。善之は、早めにレポートを作成し、担当教授に提出した。正式な夏休みの開始日までは五日ほど間があったが、善之は、早めの夏休みに入った。

そんな善之に、再び旅行を巡る葛藤が襲ってきた。今回の旅行では、お互いの本心を確認したい。そのためにも、まずは自分自身の気持ちに整理をつけなければならない。

しかし、善之は、いまだに気持ちの整理をつけられずにいた。ずっと麻子のことを手元に置いておきたいという気持ちがある反面、彼女のことを束縛してはいけないという気持ちもあった。

ずっと手元に置いておくのだというふうに気持ちが整理でき、麻子にもその覚悟があるのであれば、躊躇なく彼女のことを抱きたい。でも、どちらの気持ちがほんとうの自分の気持ちなのか

がわからない。自分自身がこんな状態では、旅行へ行っても、麻子の本心確かめるためのきっかけすら作ることができないのではないだろうか。

善之は、決して相容れぬことのない本能と理性との狭間で悩み続けていた。

5.

旅行まで一週間と迫った。日本列島は、すっぽりと夏の高気圧に覆われ、晴天が続いていた。

その日、善之は、朝一番にJRの窓口に出向き、インターネットで予約をしておいたJRのチケットを受け取った。午後からは、麻子が訪ねてくることになっている。

テーブルの上にJRのチケットを並べた善之は、麻子に向かってJRでの移動についての説明をしている自分の姿を想像しながら、二人で旅行を楽しんでいる光景を頭の中で思い描いた。

しかし、楽しみにしていた能登巡りの旅行は、実現することはなかった。

それは、善之のもとにかかってきた一本の電話から始まった。コンビニで買って来た弁当で昼食を済ませ、リビングでうたた寝をしていた善之は、けたたましい電話の音で目が覚めた。気だるそうな表情を浮かべたまま受話器を取る。

「もしもし、千倉ですが」電話に出た善之に対して、電話の主が、警察の人間であると名乗った。

「警察ですか？」善之が聞き返す。

「はい。板橋警察署刑事課の藤本と申します。千倉善之さんでいらっしゃいますか？」

「はい、そうですが」

「桜川麻子さんをご存知ですか？」

「はい」

「失礼ですが、どのようなご関係でいらっしゃいますか？」

「桜川麻子は妹ですけど」

「そうでしたか……」

「妹が、どうかしたのですか？」

「実は、大変申し上げにくいのですが、お亡くなりになりました」

「はっ？ 亡くなったって……。どういう意味ですか？」

「犯罪被害に遭われまして、先ほど、板橋警察署にご遺体が搬送されました」

「えっ？ はい？」善之の頭の中が混乱した。電話の相手がしゃべっていることの意味がわからなかった。なにかの悪い冗談であると思った。もしかしたら、悪友たちが自分のことを担ぎ上げているのではないだろうか。

善之は、受話器を握ったまま押し黙った。

「もしもし、もしもし」電話の相手が、何度も何度も呼びかける。はっと我に返った善之は、受話器を耳に押し当てた。

「もしもし、聞いておられますか？」

「はい、聞いていますが……」

「お手数をおかけして申し訳ないのですが、これからすぐ、板橋警察署のほうまでお出でいただけないでしょうか」

「はあ」

「詳しいことは、署でお話ししますので」詳しい話は善之が警察署についてから説明するということであった。

善之は、タクシーを捕まえ、板橋警察署に急行した。頭の中が混乱し続ける状態の中で、タクシーが板橋警察署の入り口に横付けされる。

善之は、受付で藤本の名前を告げた。連絡を受けた藤本が受付に現れ、善之を応接室に案内した。

応接室に足を踏み入れた善之は、ソファに腰を下ろした。反対側のソファに、藤本ともう一人男が腰を下ろす。もう一人の男は、刑事課長の石井であると名乗った。初対面の挨拶もそこに、善之が事情の説明を求める。

「妹になにがあったのでしょうか？」

善之の問いかけに対して、石井と藤本が、互いに目を見合わせた。石井が、藤本に向かって頷く。善之のほうに向き直った石井が口を開いた。

「実は、妹さんは、本日午前十時二十五分ごろに、自宅マンション近くの路上で、刃物を持った男に刺されました。近くにいた人の通報で救急車が駆けつけましたが、残念ながら病院に到着する前に死亡が確認されました」

「刺されたって、誰に……。犯人は、犯人は捕まったのですか？」

「はい。現場付近で血の付いたナイフを持ってうろついていた男を逮捕しました。男も、犯行を認めています」

「誰ですか！ 誰が妹のことを刺したのですか？」

「逮捕した男は、妹さんと同じ大学に在籍する二十一歳の学生でした。所持していた学生証で確認しました。詳しい動機は捜査を進めてみないとわかりませんが、本人の口からは、妹さんが自分のことを振り向いてくれないから刺したみたいなことを供述しています。おそらく、ストーカー的な殺人だと思われます。ストーカーの被害に遭われているというような話を、妹さんからお聞きになられたことはありませんか？」

「いえ、そんなことは……。それより、刺されたのは、ほんとうに麻子、桜川麻子なのですか？」

「被害者の女性は、桜川麻子さんの学生証を所持しておりました。また、所持品の手帳の緊急連絡先の欄に千倉善之さんの名前と連絡先が書かれておりましたので、連絡させていただいたのです」

「……」

「ご遺体は、署内の霊安室に安置されております。妹さんかどうかを確認していただけないでしょうか？」石井が、善之に遺体の確認を求めた。藤本が立ち上がり、善之を促す。

善之は、のろのろとした動作で立ち上がった。石井と藤本に付き添われて、霊安室に足を向

ける。

霊安室には、一体の遺体が安置されていた。顔には、白いガーゼがかけられている。

「取りますね」声をかけた石井が、ガーゼを外した。善之が、遺体の顔に視線を向ける。そこには、紛れもない麻子の顔があった。苦悩の表情ではなく、安らかな眠りに満ちたような顔であった。

そっと遺体に近づいた善之が、遺体の頬を手で撫でる。そこには、何度も何度も口づけを交わしたときに触れた柔らかい感覚があった。体温が無くなり、温もりは感じられなかったが、柔らかい感覚は紛れもなく麻子のものであった。

「麻子！ 麻子！」善之は、遺体の顔を揺すった。遺体の首が静かに揺れる。決して目を覚ますことはない。

善之は、顔を揺するのを止めた。知らず知らずのうちに頬を涙が伝う。善之は、遺体の一点を見つめた。石井も藤本も、うつむきながら、善之が顔を上げるのを待った。

やがて、善之が顔を上げた。石井が語りかける。

「妹さんで間違いないでしょうか？」

「はい。妹です」

「そうですか……。ご愁傷様です」

「……」

「とりあえず、こちらへ」石井が、霊安室から出るよう善之を促した。善之の全身から力が抜け落ちる。藤本に肩を支えられながら、善之は応接室に向かった。

応接室のソファに腰を下ろした善之に向かって、石井が遺体の引き渡しについての説明を始める。

「ご遺体ですが、これから検死の作業に入らせていただきます。死因に関しては、犯人が所持していたナイフで刺されたことによるものであることは明らかですし、解剖の必要もないと思いますので、少なくとも明日には、ご遺体をご遺族の方に引き渡させていただきます」

「……」

「ご遺体の引き渡し先は、お兄様でよろしいのでしょうか」

「……はい」

「こんなときにこんな話もなんなのですが、ご葬儀を上げられる先とか、そういったものは決まっておられるのでしょうか？」

「葬儀ですか？ いきなり言われても……」

「そうですね。そういうことに関しては、こちらの藤本が相談に乗らせていただきます。犯罪被害者の方のご葬儀をきちんと取り仕切ってくれる業者もありますので。もし差支えなければ、警察の方できちんとした業者を紹介しますが……」善之は、遺体引き渡し後のことを藤本に相談することにした。

6.

麻子の葬儀は、藤本から紹介された葬儀業者の手を借りて行うことになった。

善之は、桜川方の主たる親族へ連絡を入れた。電話では、自分と麻子の関係を詳しく説明せずに、麻子が犯罪に巻き込まれ、都内で葬儀を挙げることを伝えた。

突然の訃報に驚いた親族が、続々と東京に駆けつけた。集まった親族に対して、善之は、自分と麻子との関係を打ち明けた。自分と桜川善正との関係が記された戸籍謄本も見せる。突然の善之の出現に、親族たちは驚きの声を上げた。

「そういえば、兄と敏江さんの葬儀のときにも参列していただいていたでしたね？」麻子の叔父にあたる男性が問いかけてきた。あのときは、麻子の友人という立場で参列していた。そのときのことを思い出しながら、善之は、そうであると返事をした。

善之は、麻子の両親が事故死したのち、兄妹として二人で支え合って生きてきたことを集まった親族たちに伝えた上で、葬儀の喪主を務めることについての理解を求めた。それに対して、親族たちからも異論の声は出なかった。

今回の事件はニュースでも報道されたため、麻子の携帯電話や警察署に対して、友人や知人たちからの問い合わせが相次いだ。善之は、麻子の友人の何人かに葬儀日程を伝え、周囲に伝えてくれるように依頼した。

通夜と告別式は、しめやかに行われた。

式場には、麻子の友人知人が大勢駆けつけた。男女にかかわらず、人目をはばからずに泣きじゃくる人間が何人もいた。それだけ、麻子が周囲から愛されていたのであろう。

善之は、参列者たちの前で気丈に振る舞った。喪主としての務めを着々とこなす。

善之には、麻子がこの世からいなくなったという現実感がなかった。人から頼まれて、喪主の役を演じているような感覚であった。

また今回の事件は『美人女子大生ストーカー殺人』というタイトルでセンセーショナルな報道がなされ、マスコミも葬儀会場に駆けつけた。麻子の叔父からマスコミ対応は一手に引き受けるという言葉ももらっていた善之であったが、マスコミの求めに応じて取材にも対応した。

現実感の湧かないまま、時間だけが過ぎてゆく。

告別式が終了し、麻子の亡骸は火葬場に搬送された。遺体が焼かれ、骨になって戻ってくる。遺骨は、白い骨壺に収められた。骨壺を納めた桐の箱が、白い絹の布で覆われる。

遺骨は、善之の手で、麻子の暮らしていたマンションに持ち帰られた。

遺骨を急遽こしらえた祭壇に祀った善之は、遺影に向かって手を合わせた。

告別式を終えた後、桜川方の親族たちは全員帰郷した。四十九日法要までの期間、善之が遺骨を弔い、その後、桜川善正と敏江の眠る墓に納骨することになった。

すべてを終えた善之の胸に、麻子がいなくなったという現実が重くのしかかってきた。

善之は、寂寥感に打ちひしがれていた。麻子の部屋から一步も外に出ることができずにいた。食欲も湧かない。テレビを見る気にもならない。

板橋警察署の藤本から犯人を送検することにしたという連絡を受けた善之は、携帯電話の電源を切った。麻子の部屋の固定電話も消音にし、留守番電話をセットする。その後すぐに留守番電

話のボタンが点滅し始めたが、メッセージの再生は行わなかった。誰ともしゃべりたくなかったからだ。

善之は、麻子の遺影と向き合いながら、ボーっと時を過ごした。頭の中で、二人で築き上げた数々の思い出が駆け巡る。初めて麻子と出会った時のことや、その後二人が高校を卒業し大学に入るまでのこと、初めて二人で行った東京競馬場や友人と三人で観戦した東京ドームでの巨人戦、麻子が手料理を作りに来てくれたことや二十歳のバースディの夜の思い出などが、走馬灯のように善之の頭の中を駆け巡った。

思い出の中の麻子は、常に笑顔を振り向けていた。善之の心を癒し、温もりを与えてくれた女性(ひと)であった。麻子と交わした抱擁も、善之の心を熱くした。麻子は、善之のすべてであった。

しかし、そんな麻子も、もうこの世にはいない。一言も別れの言葉を口にしないまま、善之の前から去って行った。

善之は、この現実を受け止めることができなかった。今でも、目の前に麻子がいるような気がした。

「だめよ、ちゃんと食事を摂らなきゃ」、「今晚は、お兄ちゃんの大好きな肉じゃがを作るから、リビングで待っていて」遺影の中の麻子が、善之に語りかけてくる。

「麻子、なんで死んじゃったんだよ！俺一人で、どうすればいいって言うんだよ！」善之は、遺影の中の麻子に語りかけた。

「麻子！」善之は、自分の声で目を覚ました。うなだれていた顔を上げる。目の前に遺影があった。善之は、遺影の前で座ったまま眠っていた。

夢の中で、麻子が何者かに追われていた。麻子のことを追いかける男がナイフを振りかざす。それを見た善之が、男を捕まえようとする。しかし、善之の手が男に届くより前に、男が振りかざしたナイフが麻子の身体に突き刺さった。

麻子が道端に倒れ込む。ナイフを持った男が、その場から逃げ去る。「麻子！ 麻子！」善之は、懸命に麻子の身体を揺すっていた。

「夢か……」善之は、荒い息をついた。額から汗が滴り落ちる。クーラーをつけていない部屋の中は、蒸し風呂状態になっていた。クーラーのリモコンを手に取り、スイッチを入れる。

善之は、傍らに置いた腕時計に目をやった。日付は、七月二十六日を表示していた。時計の針は午前七時を指している。葬儀を終えてから丸一日半の時間が経過していた。

その間、善之は、まんじりともせずに麻子の部屋で過ごしていた。ペットボトルの水を口にしたほかはなににも食べていない。なにをするのも億劫であった。

善之は、目の前の遺影に顔を向けた。遺影の中の麻子が、柔らかい視線を投げかけてくる。

善之の脳裏に、インターネットで見た能登の風景が甦ってきた。壁に貼られたカレンダーに視線を向ける。

「明後日か……」善之は呟いた。

何事もなければ、明後日、麻子と二人で能登に向かって旅立つはずであった。善之は、ホテルや旅館のキャンセルはしていなかった。急な出来事でバタバタしており、そこまで頭が回らなかった。

「どうしようか……」善之は、キャンセルの連絡を入れることを面倒臭く感じていた。麻子がいなくなった今、予約を続けていても仕方がないのだが、連絡を入れるのが億劫であった。

「放っておくか……」投げやりになった善之だったが、胸の中に、ある思いが芽生えてきた。麻子は、あれだけ能登の旅行に行くことを楽しみにしていた。金沢や輪島は、名指しで行きたいと口にしていた。麻子の肉体は存在しなくても、魂は善之の心の中に生き続けている。麻子の魂とともに能登を巡ってみるのもよいのではないだろうか。

善之の目に輝きが戻った。善之は、麻子の遺影に顔を向けた。「予定通り旅行に行こうか？」善之が、遺影に問いかける。「予定通りいこうよ！」遺影の中の麻子が、言葉を返してくる。

何度か頷いた善之は、ゆっくりと立ち上がった。

## 7.

二日後の七月二十八日、上越新幹線に乗り込む善之の姿があった。胸には、麻子からもらったペンダントが光っていた。切符に表示された号車に乗り込み、指定された座席番号に向かって歩みを進める。

座席番号を確認した善之は、通路側の席に腰を下ろした。窓際の席は、麻子が座るはずの席であった。

善之は、麻子の切符の払い戻しはしなかった。あくまでも二人で行く旅行だったからだ。

座席に座った善之は、旅行ケースの中から巾着袋を取り出した。巾着の紐を緩め、隙間を空け、巾着袋をそっと窓際の座席の上に置く。巾着袋の中には、麻子の遺骨の一部を移し替えたビンと善之が贈った指輪、普段麻子が愛用していた定期入れが入っていた。定期入れの片側には通学定期券が納められ、反対側には二人が並んで映った一枚の写真が納められていた。

新幹線が、軽快にスピードを上げた。車窓に、のどかな田園風景が流れる。「麻子、今日もいい天気だよ」善之は、巾着袋に向かってそっと呟いた。

上越新幹線と在来線を乗り継いだ善之は、定刻通り、午後一時半に金沢駅に降り立った。

金沢駅に到着した善之は、当初の計画通りレンタカーを借りた。六泊七日分の料金を支払う。そのまま、金沢市内観光に繰り出した。

最初の目的地である長町武家屋敷跡エリアに到着した善之は、旅行ケースを車の中に残し、巾着袋だけを携えて車から降りた。巾着袋を片手に下げ、付近の散策を行う。周囲には、外国人観光客の姿が目立った。

主だった観光スポットを巡った善之は、駐車場に戻り、ひがし茶屋街に向けて車を走らせた。

ひがし茶屋街には、茶屋を改築した風情のあるカフェや雑貨店などが数多く存在した。その中でも、金箔入りのパフェと紅茶を楽しめる店のことを麻子は何度も口にしていた。

車から降りた善之は、地元の人間に店の名前を告げ、目指す店を見つけた。店内に入り、麻子

が口にしていた金箔入りのパフェと紅茶を注文する。

テーブルに、金箔がふんだんに塗さったパフェと紅茶のセットが運ばれてきた。善之は、巾着袋の中から定期入れを取り出し、二人が映った写真が納められた面を上に向けた。写真の中の麻子と胸の中で会話をしながら、善之はパフェを口に入れた。

ひがし茶屋街の観光を終えた善之は、金沢駅に戻った。

予約しておいたホテルは金沢駅前にあった。車を駐車場に入れ、旅行ケースを手にフロントへ向かう。フロントで名前を告げチェックインの手続きを行う。

「お連れ様は？」とフロントスタッフから尋ねられた善之は、「都合で来られなくなりました」と言葉を返した。

チェックインを済ませ部屋で一息ついた善之は、市内バスで香林坊に向かった。香林坊は金沢随一の繁華街であり、新鮮な幸を味わえる飲食店が随所にあった。その中から、善之は一軒の寿司屋に入った。金沢は寿司が美味しいことでも有名であり、麻子とも必ず寿司を食べようと約束していた。

善之は、お任せコースと冷酒を注文した。大将が握る寿司を一貫一貫味わいながら冷酒を口にする。グラスの冷酒を飲み干した善之は、二杯目の冷酒を注文した。早いペースで酒を口にしていくのだが、不思議と酔わない。

コース料理をすべて食べ終えたものの飲み足りなさを感じた善之は、さらに冷酒を注文した。料理も一品追加する。

カウンターの向こうから、大将が「観光ですか？」と問いかけてきた。

「ええ」善之が頷く。

「おひとりですか？」大将が、重ねて問いかける。

「まあ」善之は、寂しそうな表情を浮かべた。

「金沢は美味しい物がたくさんあるから、いろいろと食べていってくださいよ」と声をかけてきた大将に向かって、善之は「そうさせてもらいます」と、明るく返事をした。

寿司屋を出た善之は、ホテルに戻った。まだまだ宵の口であり、麻子と一緒に旅行であれば、これからカラオケにでも繰り出していたところである。

歯を磨きシャワーを浴びた善之は、広いダブルベッドに二つ並べられた枕の片方の枕元に、巾着袋の中身と首から外したペンダントを並べた。そのままベッドの上に大の字になり天井の一点を見つめる。

予約した部屋はデラックスダブルルームであり、もともと広めの部屋であったのだが、麻子のいない空間は、善之にとってただただ広く寂しく映った。天井を見つめる善之の脳裏に、麻子との思い出が駆け巡る。追憶に浸る善之の目から涙があふれ出る。「麻子、お前がいない人生なんて考えられないよ」善之は、天井に向かって呟いた。

なんでもなかった頃がほんとうに幸せだったと感じていた。旅行など来られなくてもいい、金

などなくてもいい、ただ麻子がそばにいてくれるだけでいい、その言葉が何度も善之の頭の中を駆け巡った。

明日は輪島に行く。麻子が見たいと言っていた日本海の絶景がふんだんに見られる場所である。高い崖の上から下を覗くと、日本海の荒波が崖下の岩に強く打ちつけている様が目に映る。

「こういう場所から下を覗いていると、吸い込まれてしまいそう」麻子が、怯えたような声を上げる。

「こういう場所はねえ、自殺して成仏できない人間の魂がうじゃうじゃと彷徨っているから、生きている人間が引っ張られたりすることもあるみたいだよ」調子に乗った善之が、麻子を驚かせようと口にする。

「そんな変なことを言わないで！」麻子が、抗議の眼差しを向けてくる。

善之の脳裏に、二人で崖の上から海面を覗き込んでいるシーンが浮かんでいた。予定通り二人で旅をしていれば、おそらくこのような会話を交わしていたことであろう。

「吸い込まれそうになるか……」善之は、地上から海面に吸い込まれているシーンを想像した。何者かに強く引っ張られ、真逆さまに海へ落ちていく。切り立った岩が迫ってくる。しかし、不思議と恐怖は感じない。

切り立った岩の向こう側に、この世とは違う別の世界があるように思えた。そこには、笑顔を振りまく麻子もいる。善之のことを引っ張ろうとしていたのは麻子であったのだろうか。麻子と再び一緒に過ごせるのであれば、この世の人間でなくてもよい。

善之は、海面に吸い込まれていく誘惑に駆られていた。

## 8.

翌日、ホテルをチェックアウトした善之は、兼六園に向かった。兼六園は日本の三大庭園の一つであり、広大な敷地の中に趣のある日本庭園の造りが施された名勝であった。界限には、数々の工芸品の店が立ち並んでいる。

善之は、麻子の遺品とともに、兼六園を散策した。パンフレットに提示された散策コースに従って園内の風情を楽しむ。園内の至る所に、キキョウやハギなどといった花が咲き誇る。花好きでもあった麻子は、兼六園の落ち着いた風情と咲き誇る花のコントラストを目にすることを楽しみにしていた。善之は、そのような光景を何枚か写真に収めた。

兼六園を後にした善之は、国道を北上し、輪島に向かって車を走らせた。道路の向こう側に日本海が広がる。

善之は、眺めの良いポイントを目にするたびに車を止め、麻子の遺品を携えて車から降りた。助手席に麻子が乗っていたとしても、こうやって眺めの良いポイントを見つけるたびに車外に出ていたはずである。

目の前の日本海は波が荒かった。地上に立つ善之の顔にも、時折強い風が吹き付けてくる。

善之は、崖の上から海面を覗いてみた。バーンという轟音とともに、沖から押し寄せた波が岩に打ちつける。打ちつけられた波が、白い飛沫を上げる。飛沫が上がるたびに、地上と海面との

距離が接近するような錯覚に陥った。

善之は、身体が海面に吸い込まれていくような感覚にとらわれていた。頭の中に、金沢のホテルのベッドの上で、崖の上から海面に吸い込まれていく誘惑に駆られていたときの記憶が思い浮かんでいた。

輪島に到着した善之は、予約した旅館にチェックインした。すぐそばに日本海が広がる温泉旅館であった。二人は、露天風呂付きの客室を予約していた。

善之は、連れの人間が都合で来られなくなったことを伝えた。フロントスタッフが「一人分の食事代を差し引いた宿泊代にするように交渉してみましようか？」と問いかけてきたが、善之はそれを断り、二人分の料金を支払うことを告げた。

係に案内され客室に通される。客室は十二畳の和室であり、日本海に面したスペースに客室専用の露天風呂が備え付けられていた。お湯も、温泉を引いているということであった。

係が去り一人部屋に残された善之は露天風呂に浸かった。程よい温度に温められた温泉に半身をつけ、日本海に目をやる。

目の前の日本海は青かった。崖の上から覗いたときは荒々しい白波に揉まれていたが、遠くに見る日本海は穏やかな水面を漂わせていた。浮かぶ船もなく、視界いっぱいに青い海が広がる。地平線もくっきりと映る。時折、海鳥らしき姿が飛来し、視界を横切る。反日常的なのどかな光景が広がっていた。

善之は、地平線の向こうで麻子が待っているような幻想に駆られていた。

夕食の時間がやって来た。夕食は地元の食材をふんだんに使った懐石料理であった。仲居が、料理を順番に運んでくる。

善之は、地元の酒を注文した。仲居も、彼が一人客だということを知ってか、いろいろと話しかけてきた。観光の案内や食材の説明、はたまた地元まつわる神話まで、ありとあらゆる話題を口にした。善之も、適当に相槌を打ちながら、仲居の話に耳を傾けた。

旅館の夕食は美味しかった。善之は、すべての料理を残さず平らげた。

「まだお酒を飲めますか？」仲居が問いかけてきた。

「もう少し飲みたいですね」善之が答える。

金沢のときと同様、いくら飲んでも酔えなかった。おそらく、今日も普段よりは飲むピッチが速いはずだ。

善之は、もっと酒を飲みたかった。飲んで、気持ちよく酔って、そしてなにもかも忘れて布団の中に入りたかった。そうでもしなければ、朝まで寝られそうもない。

仲居が新しい酒を運んできた。善之の複雑な胸の内を察したのか、「これはサービスです」と言いながら、地元の食材を使った肴を一品テーブルの上に置いて行く。仲居とともに入ってきた布団係が、一組の布団を敷く。

「明日の朝に片づけますから、飲み終わったものはそのままにしておいてください」そう声をかけた仲居が、部屋を出て行った。

一人になった善之は、再び酒を飲み始めた。いろいろなことを頭の中で思い浮かべながら静かに酒を口にする。過去の思い出に浸るだけでなく、今後の自分のことも考えてみようと思っていた。

この旅行を終えたとき、自分はどのようなのであろうか。以前の自分に戻ることはできるのだろうか。善之は、胸の中で自問自答を繰り返した。時折、あの世の麻子に向かって話しかける。しかし、頭の中に思い浮かぶ将来の自分の姿は打ちひしがれた姿ばかりであった。孤独の中を彷徨い続ける自分がある。

そんな善之の脳裏に、とある光景が広がった。そこには一面に花が咲き誇り、多くの人たちの笑顔で満ちあふれていた。その中には、麻子の姿もあった。善之の姿に気づいた麻子が、遠くから手を振る。

「やっぱり、オレは麻子のもとに行くべきなのではないだろうか……」善之は呟いた。

あの世から麻子が自分のことを呼んでいるような気がした。この世から消え去ることへの誘惑が吹きつけてくる。わずかに残るこの世への未練との間で葛藤が揺れ動く。葛藤を鎮めようと善之は酒を口にしました。

やがて葛藤は鎮まった。善之の心は定まった。もう、なにも思い残すことはない。

柔らかな笑みを浮かべ、何度か頷いた善之は、わずかに残っていた酒を飲み干した。

## 9.

酒を飲み終えた善之は、行動を開始した。部屋に備え付けられた旅館名の入った便箋を一枚テーブルの上に置き、文字を走らせる。この世から消えるということを書き記した文面であった。

善之は、夜中に旅館を抜け出し、麻子の遺品とともに日本海に身を投げるつもりでいた。おそらく、次の日の朝、朝食を運んでくる仲居が善之のいないことに最初に気づくのであろう。そのとき、善之はすでに海の藻屑となっているはずである。

善之は、便箋に、迷惑をかけることを詫びる言葉とともにレンタカーショップへの連絡をお願いする言葉を綴った。便箋の脇に、宿泊料金と、それとは別に五万円の現金を添える。旅館に対する迷惑料のつもりであった。

メッセージを書き終えた善之は、浴衣を脱ぎ、服を着た。歯を磨き、荷物を旅行ケースにしまう。脱ぎ捨てた浴衣も、丁寧に畳んだ。

時刻を確認する。午後十一時十七分だった。

善之は、午前零時を回ってから旅館を抜け出すつもりでいた。それより早い時間だと、他の宿泊客や旅館の従業員に姿を見られてしまいそうな気がしたからであった。今も、周囲から微かに人の話し声が聞こえてくる。

善之は、旅館を抜け出すタイミングを待った。

時刻が午前零時を回った。微かに聞こえていた人の話し声もしなくなった。耳を澄ましたが、物音ひとつ聞こえてこない。

善之は、窓の外を眺めた。窓の外には、星が光り輝く夜空が広がっていた。風が吹き付ける気配も感じられない。

善之は、巾着袋の中から麻子の定期入れを取り出し、二人で映った写真を見つめた。笑顔の麻子と視線が合う。善之の決意が揺らぐことはなかった。次に笑顔の麻子と視線が合うのは、あの世に着いてからだ。

定期入れをしまった善之は、旅行ケースを持ち、部屋のドアを開けた。薄暗いフロアーには人影が見当たらない。足音を忍ばせながらそっと通路を歩いた善之は、非常口に出た。

非常階段を伝って旅館の敷地に降り立ち、外壁を迂回するように正面方向に回る。柵を乗り越え、旅館の外側に出る。そのまま道路を横断し、海の方へ向かって雑木林を進んだ。少し歩いたところに、日本海に面した切り立った崖がある。その崖を目指して、善之は一步一步歩みを進めた。

崖に打ちつける波の音のはっきりと聞こえてきた。雑木林が途切れ、辺り一面に漆黒の闇が広がる。遠くに街の灯りが見える。近くを走る国道から時折射し込むヘッドライトの光に地面が照らされた。

すぐそこは、日本海に面した崖であった。転落防止の柵も高くはない。楽に飛び越えられる高さであった。

善之は、地面に旅行ケースを置いた。空を見上げる。そこには、旅館から抜け出すときに部屋の窓から眺めたときと同じような光り輝く星が漆黒の空に散りばめられていた。どの方向を見回しても、一面銀色の星が光り輝いて見える。まるで、空から星が降ってくるかのような、幻想的な世界であった。

善之は、安らいだ気分になった。星たちまでもが、自分がこの世からあの世に架かる橋を渡ることを歓迎してくれているような錯覚に陥っていた。

軽く息をついた善之が、そっと崖の方向に足を踏み出す。目の前に、ぼんやりと月明りに照らされた柵が映る。打ちつける波の音は、善之の耳には入らなかった。

柵を両手で掴む。目の前に漆黒の闇が広がっている。

息を整え、両腕の力を込めた。このまま柵の外に向かって身を投げ出せば、麻子の待つ世界へ行くことができる。目をつむり、一、二の三で、乗り越えよう。

善之の意思が、瞼に伝わった。

そのときだった。ヘッドライトの光に浮かび上がった女の姿が善之の目に飛び込んできた。女の横顔が、くっきりと瞼に焼き付く。

「麻子？ 麻子！」善之は、声を発した。目の前に、漆黒の闇に吸い込まれようとする麻子がいた。「だめだ、飛び込んじゃ！」善之は、麻子の幻影に向かって駆け出した。

声に気がついた女が顔を向ける。善之は、女の身体を抱きとめた。

「だめだ、飛び込んじゃ！」何度も叫びながら、女の身体を、柵から引きはがそうと引っ張る。

「止めて！ 邪魔をしないで！」女が、声を上げながら、柵を掴んだ腕の力を込める。

しかし、男の力が勝った。善之と女が、一体となって地面に転げる。

女は、抵抗を止めた。

「なんで？　なんで邪魔をするの？」女がすすり泣く。

善之は、そんな女の身体を抱きとめていた。

女が顔を上げた。善之に向かって視線を合わせる。

善之も、おそろおそろ女の顔に視線を向けた。月明りの中に、女の顔が浮かび上がる。その顔は、麻子ではなかった。全く別人の女の顔であった。

「あっ！」慌てたように、善之が抱きとめていた手を離す。

泣き笑いのような表情を浮かべた女が、「なんで私を助けたのですか？」と問いかけてきた。

「すみません。ただ、死なせちゃいけないと思ったから……」善之が言葉を返す。

自分は、漆黒の闇に吸い込まれようとする麻子のことを引き戻そうとしたのだ。闇の向こう側はあの世である。「麻子をあの世に行かせてはいけない」そう感じた善之は、懸命に漆黒の闇の中に消えようとする女を抱き止めた。

「どうやら、私は死に損なったみたいね」女が、そっと呟く。

「えっ？」善之は、初めて目の前の女も自殺志願者であったことに気がついた。自殺をするために海へ飛び込もうとしていた善之が、同じように海へ飛び込もうとしていた女のことを助けてしまったのだ。皮肉な巡り合わせであった。

「ひょっとして、あなたも私と同じように、ここから身を投げようとしていたのですか？」女が問うてきた。善之が頷く。

「私は、どこまで行っても思い通りの人生を歩めないみたいね」女が、投げやりな表情を浮かべながら呟いた。その言葉を耳にした善之の胸の中に、女のことを憐れむ気持ちが芽生えてきた。

「なにがあったのですか？　ボクでよかったら話を聞きますよ」善之は声をかけた。女が、顔を横に向ける。しばしの時間口をつぐんでいた女が、善之に顔を向けた。

「ありがとう。つまらない話だけど、聞いてもらえるかしら？」そう言うと、女が自分の身の上を語り始めた。

女には、付き合っていた男がいた。彼は、芸人を目指していた。彼女はOLとして働きながら、芸に励む彼のことを懸命に支え続けた。「自分が売れたら一緒になろう」という彼の言葉を信じていたからであった。

やがて、彼にチャンスが訪れた。彼の一途な芸が、とあるテレビ局のプロデューサーの目に止まり、人気番組の準レギュラーの座を射止めることになったのだ。

彼のチャンスを、女も喜んだ。早く売れてほしいと願った。しかし、そんな女の気持ちを、彼は裏切った。番組を通じて知り合ったアシスタントディレクターの女性と真剣交際していることが発覚したのだ。

彼の足が、女のもとから遠のいた。女が、彼の胸の内を確かめようとする。

そんな女に向かって「重すぎるんだよ」の言葉を口にした彼が、一方的に別れを告げた。

信じていた男性(ひと)に裏切られた女は、この世をはかなみ、自殺することを決意した。一度彼と二人で訪れたことのある能登半島に、死に場所を求めて旅に出た。昨日の昼間、輪島市内の旅館をチェックアウトした女は、死に場所を求めて彷徨い歩き、この場所にたどり着いたということであった。

女がしゃべり終えた。善之は、一言もしゃべらずに女の話に耳を傾けていた。

「哀れな女の話でしょ」女が自嘲するような言葉を口にする。

「でも、あなたは生きるべきですよ」善之が、言葉を返す。

「そうかしら」

「あなたは、あなたを踏み台にしていった彼よりも幸せになるべきだ。きつとなれますよ」

「……」

「そうじゃないと、去って行った彼も浮かばれないだろうな。あなたが死んでしまったら、あなた自身の人生もお終いだし、彼も、きっと一生重荷を背負って生きていくことになると思う。二人ともが不幸になるんですよ。でも、あなたがこの苦難を乗り越えて幸せになれば、その彼だって、いつかきっと自分のしたことを悔やみ、人間として、芸人として成長するのではないですか？」

「そうね。あなたの言う通りかもしれないわね……。ありがとう。あなたのおかげで、もう一度やれそうな気がしてきたわ」

「よかったですね」

「もしよろしければ、あなたのことも私に話してみませんか？」

「そうだな……」しばしの時間思案した善之は、自分の心の中の闇を目の前の見ず知らずの女に打ち明けることにした。

10.

善之は、すべてのことを話した。麻子が異母兄妹であることも包み隠さずに話し、気がついたら麻子の存在が自分の心の中を占めていたことも打ち明ける。一人取り残された自分のことを麻子が呼んでいるはずだという確信を持っているということについても口にした。

女が、黙って善之の話に耳を傾ける。

善之が話し終えた。二人の耳に、打ちつける波の音がこだまする。まるで、善之の話をすべてさらっていくかのような波音であった。

やがて、女が口を開いた。

「あの、差支えなかったら、妹さんがくれたペンダントを見せていただけないかしら？」

女の言葉に、善之がペンダントを取り外した。女が、ペンダントを月明かりにかざす。善之は、そんな女の仕草を黙って見つめていた。

「花言葉って知っていますか？」女が、善之に問いかけた。

「花言葉ですか？ そういうのがあるのは知っているけど、ボク自身は全然わかりません」

「そう……」

「花言葉が、どうかしたのですか？」

「このペンダントには、妹さんのメッセージが込められているんじゃないのかしら？」

「妹のメッセージですか？ どんなメッセージが込められているんですか？」

「このペンダントに描かれている花の花言葉はね……」ペンダントに描かれている花は、チューリップとカキツバタと葉牡丹であった。

女が言うには、チューリップの花言葉は「永遠の愛」、カキツバタの花言葉は「幸せはあなたのもの」、葉牡丹の花言葉は「祝福」ということであった。ペンダントの表には、中央のチューリップを取り囲むように、カキツバタと葉牡丹の花が描かれていた。

「これって、あなたに対する永遠の愛の気持ちを表した上で、でも束縛するのではなくて遠くから見守っていきたいというメッセージを表しているのではないかしら。幸せになったあなたを私はいつでも祝福しますというようなメッセージのように私には思えるんだけど」

「オレのことを遠くで見守っている？」

「そうだとしたら、妹さんは、あなたが自分の後を追うことを絶対に望んでいないと思うわ。自分がいなくても、あなたには、どこかで幸せになって欲しいと望んでいると思うわ」

女の言葉を耳にした善之の目から、涙がこぼれ落ちた。在りし日の麻子のことが思い浮かぶ。彼女は、万事控えめで人のことを思いやる女性であった。善之と一緒にいるときも、自分の意見を押し通すようなことは一切しなかった。いつでも善之のことを立てていた。

「そうだったんだな……」善之は呟いた。

女の言うことがわかるような気がした。麻子の優しい性格を考えれば、善之のことを道連れにして喜ぶはずがなかった。自分は無念であっても、残された善之が幸せに生きている姿を見守っていたと思っているはずであった。なぜ、自分はそのことに気がつかなかったのだろうか。

善之は、独りよがりな感情で自分のことを死の淵まで追い詰めたことを恥ずかしく思う気持ちで一杯になった。

「そうだよな……」善之が呟く。

「どうやら、あなたもすっきりしたみたいね」

「そうですね」

二人は、月明かりの下で顔を見合わせた。

互いに話し終えた二人は、しばしの時間並んで夜空を眺めた。遠くのほうで薄らと空が白んでいる。散りばめられた星の輝きがいっそう増してきたように、二人の目には映った。

「あの、よろしければ自己紹介をしいませんか？ 助けていただいたお礼もしたいし」女が、遠慮がちに言葉を発した。善之が、女の顔に視線を当てる。

女の表情は和らいでいた。善之に話を聞いてもらったことで、過去からの束縛から解放されたのだろう。女の意識の中に、自ら命を絶とうなどという感情は、もはや残っていないようであった。新たな人生を踏み出すためには新たな出会いが良いきっかけとなる。女の瞳が、そのようなメッセージを発しているように善之には思えた。

善之も、自分の未来を思った。目の前の女に話を聞いてもらったおかげで、新たな一步を踏み出せそうである。しかし、なにもかもをすっきりと割り切ることはできない。麻子に対する思い

に整理をつけてからでないとなんか新たな一歩は踏み出せない。それは、新たな出会いで即座に消し去れるものではなかった。

善之は、言葉を返した。

「ボクたちは、知りあわないほうがいいと思います。ボクたちは、見ず知らずの人間同士だったからこそ、互いの過去を吐き出しあうことができました。これからは、過去からの鎖を断ち切って生きていかなければならないわけだけど、ここで知りあってしまうと、せつかく吐き出した過去をすべてこの場に捨て去っていくことができなくなってしまふような気がします」

「そうかもしれないわね……」女が呟いた。善之が、何度も頷く。女が、寂しそうな表情を浮かべる。

「それじゃ、私、そろそろ行きます」女が、腰を浮かした。善之が、女の顔に視線を向ける。

「あなたはどうするの？」女が問いかけた。

「ボクは、もう少しここにいます。もう少し、一人で海を眺めていたいです」

「そう、わかったわ。ほんとうにありがとう。今日のことは、一生忘れないわ」

「ボクも忘れません」

「それじゃ」女が、別れを告げた。

「それじゃ」善之も、軽く手を挙げる。

女が歩き始めた。善之は、女の後姿に目をやった。やがて、女の姿が善之の視界から消え、そして気配が消え去った。

善之は、打ちつける波の音に身を任せながら、目の前で気配を現し始めた海原に視線を移した。

11.

夜明けがやって来た。地平線の向こうから朝日が顔を覗かせる。漆黒の空にオレンジ色の光が差し込む。東の空が、薄らと明るくなり始めた。

一秒ごとに、雄大な朝日が、その全容を現し始めた。それは、一步一步大地に足を踏み入れる力強さを人間に与えてくれているようであった。

善之は、麻子の定期入れを取り出した。ケースに挟まれた二人で映った写真を見つめる。そこには、幸せに満ちあふれた二人の顔が映し出されていた。

善之は、ケースの中から写真を取り出した。何気なく裏を返した善之の目に、写真の裏に一作の詩が綴られているのが飛び込んできた。

東の方角に紙面を当てながら目を凝らす。そこには、次のような言葉が綴られていた。

私には、もう迷いはない。あなたに永遠の愛を誓い、あなたの幸せを祈り、あなたを祝福することに。

いつかあなたがほんとうの幸せを掴んだとき、私はあなたの聖母になってマリーゴールドの花束を捧げます。『生きる』という言葉の意味を込めて。

忘れることのできない麻子の字であった。

善之は、何度も詩を読み返した。今ようやく麻子の本心がわかった。二人の関係をどのように考えていたのかということについての本心である。

善之は、麻子の本心を知るために今回の旅行を計画した。そして、今こうやって麻子の本心を知ることができた。

やはり麻子がくれたペンダントには、花言葉で隠されたメッセージが込められていた。善之のことを一生遠くから見守っていく覚悟はできているというメッセージである。それとともに、善之にまっすぐ生きていってほしいというメッセージも残していた。

善之は、いつの日か麻子に対して「一生大切にする」という言葉を口にしたときに、麻子の嬉しそうな笑顔の中に、なにか複雑なものが入り混じったような表情が横切ったときのことを思い返していた。その意味が、今ようやくわかった。

それとともに、善之自身の麻子に対する想いを整理する形も見えてきた。彼女は、己の心の中で生き続ける永遠の女神であった。自分のことを愛してくれた今は亡き父親や母親が誇れるべき存在として己の心の中に生き続けているように、麻子も永遠の女神として心の中に生き続けるのだ。

一人の女としての幻影に惑わされ、麻子が自分に対して発し続けていたオーラを正面から捉えることができなくなってしまっていたが、彼女の本心を知ったことで、麻子の発するオーラの意味も感じ取れるようになった。これからも、永遠の愛に包まれたオーラを全身に浴びながら善之の肉体は生き続けていくのだ。

「生かされているということか……」善之は、子どものころの記憶にあった著名な僧侶がテレビ番組の中で口にしていた「人は皆生かされている」という言葉を思い起こしていた。

自分も、今こうやって生かされている。そして、今後も生き続けなければならない。

善之は、目の前の日本海に目をやった。朝日は完全に姿を現し、空一面が朝焼けに染まっていた。

そのとき、遠くから一条の光が視界の中に射し込んできた。燈台の灯であった。港に入る船舶の進路を誘導している灯である。

そして、その光の先には、二人が泊まるはずであった輪島の温泉旅館があった。

善之は立ち上がった。海に向かって「オレ、生かされてみるよ！」と叫ぶ。

善之の叫び声が、地平線に飲み込まれ、そして消えていった。

声が消えたことを確認した善之は、旅行ケースを手に、元来た道に向かって歩き始めた。

了

## 夜明けの燈台

<http://p.booklog.jp/book/84691>

著者：西河恵光

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saigayosimitu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84691>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84691>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ